

宮城県多賀城跡調査研究所年報1999

多賀城跡

宮城県多賀城跡調査研究所

序 文

今、多賀城外の調査から目が離せない。今年度の多賀城市埋蔵文化財調査センターによる城南土地区画整理事業に伴う多賀城南前面の調査では、都城の朱雀大路にあたる外郭南門から南に延びる南北大路と東山道の一部とみられる東西大路の交差点や、南北大路が旧砂押川と交わる場所に架けられた橋跡などが発見され、当時の国府域の様子が生々しく捉えられた。思えば、方約 900m の国庁城を形成する多賀城の南面に、計画的に地割された国府城が存在するのではないか、と指摘したのは、昭和 55 年(1980)に実施した多賀城跡第 37 次調査が最初であった。その後、仙塩道路の建設をはじめとする各種開発工事が相次ぎ、それらに伴う発掘調査によって多賀城外における古代都市の様相がかなり良く把握できるようになってきた。すなわち、多賀城の南前面には、南北大路と東西大路の 2 本の幹線道路を基準とした方格地割がみられ、そこには国司館や多賀城を支えた人々の町並み、多賀城に密接に関連する官衙城が計画的に配置されていたことなどが次々と明らかにされてきたのである。こうした調査成果は独り国府城を含む古代多賀城の実態の総合的解明に寄与するばかりではなく、諸国の国府周辺に展開された古代地方都市のありかたを研究する上でも重要な意義を持つものと言えよう。今後の調査にもさらに注目していきたい。

さて、多賀城跡の本年度の発掘調査事業は第 7 次 5 カ年計画の初年度にあたり、昨年に引き続き城前地区を対象に第 70 次調査を実施した。昨年度の調査では奈良時代にさかのぼる多くの建物跡などを発見し、この地区が平安時代になってから整備が進む城内の他の官衙地区とは様相を異にし、建物などの諸施設が奈良時代により充実していたことなどを明らかにしている。この成果を踏まえ、今回は昨年度の調査区の北隣接地を調査したものである。調査の結果は本文に詳述したとおりであるが、新たに掘立式建物跡 20 棟、柱列跡 20 条など多数の遺構を発見し、政庁南東前面にあたるこの城前地区がかなり重要な使われ方をされていたことが明らかにできた。この地区については来年度も調査を予定しているので、城前地区全体の官衙の構造や変遷、性格などについては、その成果を待って総合的に検討することとしたい。

本書の刊行にあたり、日頃からご指導をいただいている多賀城跡調査研究指導委員会の諸先生、文化庁、多賀城市および多賀城市教育委員会の関係者、調査を支援してくださった他の多くの皆様方に所員一同心から感謝申し上げる次第である。

平成 12 年 3 月

宮城県多賀城跡調査研究所
所長 白鳥 良一

目 次

I. 調査の計画	1
II. 第 70 次調査	2
1. 調査の目的と経過	2
2. 発見した遺構と遺物	4
3. 考察	57
III. 付章	65
1. 関連研究・普及活動	65
2. 組織と職員	69
3. 沿革と実績	70
付編 多賀城跡第 66 次調査出土帶金具と「丁字形利器」の金属考古学的調査結果	
岩手県立博物館 赤沼 英男	77

写真図版

例 言

1. 本書は平成 11 年度に実施した多賀城跡第 70 次調査、関連研究事業、普及活動の成果を収録したものである。
2. 当研究所の発掘調査・環境整備等の事業は多賀城跡調査研究指導委員会の指導と承認のもとに行っている。
3. 発掘調査の測量原点は政府正殿跡（S B 150 B）の身舎南側柱列中央に埋設してある。この原点と政府南門のほぼ中心を結ぶ線を南北の基準線、原点を通りこれに直交する線を東西の基準線に定めた。南北の基準線は真北に対し $1^{\circ} 04' 00''$ 東に偏っている。
4. 政府跡の遺構期と瓦の分類基準は、『多賀城跡 政府跡 図録編』（宮城県多賀城跡調査研究所、1980）、『多賀城跡 政府跡 本文編』（同、1982）による。
5. 土色については『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄：1976）を参照した。
6. 本書の作成にあたっては、白鳥良一・阿部恵・後藤秀一・柳澤和明・吾妻俊典・白崎恵介の討議・検討のもとに、I・II-1・III を阿部、II-2・3 を柳澤・白崎が執筆し、阿部・柳澤・白崎が編集した。遺構図面のトレース・図版組みは白崎が行った。遺物の実測図は後藤・吾妻を中心に行い、臨時職員がこれを補佐した。写真撮影は阿部、写真図版は阿部・白崎が行った。
7. 本文中の引用文献のうち『宮城県多賀城跡調査研究所年報 多賀城跡』は『年報』と略称した。
8. 本年度の発掘調査、調査資料の整理、本書の作成参加者は次のとおりである。

研究所員 白鳥良一・阿部恵・後藤秀一・柳澤和明・吾妻俊典・白崎恵介

臨時職員 王小慶（東北大学大学院生）・三浦滋・金澤義孝・高橋磨・大友朝二・沢田健・黒井富士夫・高橋辰雄・猪俣信義・松本庸一・高橋静枝・後藤節子・鶴巻まき子・中村みづ江・千葉莉枝・佐藤寿子・伊藤とし子・小野郁子・亀井桐子・今野健一郎・佐久間広恵・高橋美江・鈴木佐紀子・鈴木文子・佐藤友子・小幡悦子・高橋幹子

研修指導 桑原滋郎・丹羽茂（東北歴史博物館）

研修学生 竹ヶ原亜紀（東北大学大学院）・鈴木一議（東京学芸大学）

I. 調査研究事業の計画

当研究所では、1. 多賀城跡の発掘調査、2. 多賀城跡の環境整備、3. 多賀城関連遺跡（桃生城跡など）の発掘調査を計画的・継続的に実施している。ここでは、1. 多賀城跡の発掘調査計画について述べ、2・3の計画と実施については、III. 付章に概要を収録した。

多賀城跡の発掘調査は、昭和 44 年の研究所設立以来、多賀城跡調査研究指導委員会の指導のもとに、5 カ年ごとの計画を立案し、古代多賀城の解明に努めてきた。昨年度の第 69 次調査では、城前地区南部の発掘調査を行い、奈良～平安時代の 4 時期にわたって変遷する遺構が検出され、特に奈良時代の遺構が充実している城前地区官衙の様相の一端が明らかになった。

平成 11 年度は、平成 10 年 11 月の第 9 回多賀城跡調査研究現地指導委員会で承認された多賀城跡発掘調査第 7 次 5 カ年計画の初年度に当たる。今年度は昨年度に引き続き城前地区官衙の構造と変遷を明らかにすることを目的とし、城前地区南部の第 69 次調査区北隣りと第 69 次調査区東端部分を対象に調査を継続することにした。発掘調査面積は 2,000 m² である。なお、この他、現状変更に伴う発掘調査を 2 件行った。

年次	発掘調査次数(対象地区)	調査面積	予算
平成 11 年度	第 70 次調査(城前地区南部)	2,000 m ²	37,700 千円
平成 12 年度	第 71 次調査(城前地区南部)	2,000 m ²	41,000 千円
平成 13 年度	第 72 次調査(南門西側築地跡・城内南北大路跡)	1,800 m ²	41,000 千円
平成 14 年度	第 73 次調査(南門東側築地跡・城内南北大路跡)	1,500 m ²	41,000 千円
平成 15 年度	第 74 次調査(城外南北大路跡とその東側の状況)	1,500 m ²	41,000 千円
合計	5 地区	8,800 m ²	201,700 千円

表 1 多賀城跡発掘調査第 7 次 5 カ年計画

	氏名	現職	専門分野
委員長	芹沢 長介	東北福祉大学芹沢鉢介美術工芸館長	考古学
副委員長	須藤 隆	東北大学教授	考古学
委員	青木 和夫	お茶の水女子大学名誉教授	古代史
委員	飯淵 康一	東北大学教授	建築史学
委員	井手 久登	東京大学名誉教授	緑地学
委員	今泉 隆雄	東北大学教授	古代史
委員	岡田 茂弘	東北歴史博物館長	考古学
委員	笛山 晴生	学習院大学教授	古代史
委員	佐藤 信	東京大学教授	古代史
委員	塙田 敏志	東京農業大学教授	造園学
委員	坪井 清足	(財)大阪府文化財調査研究センター理事長	考古学
委員	横崎 彰一	(財)瀬戸市埋蔵文化財センター所長	考古学
委員	町田 章	奈良国立文化財研究所長	考古学
委員	渡辺 定夫	工学院大学教授	都市工学

表 2 多賀城跡調査研究指導委員会委員名簿

II. 第 70 次調査

1. 調査の目的と経過

(1) 調査の目的

多賀城跡外郭南門から政府南門に至る南北大路の東側には、南に延びる緩やかな丘陵がある（第1・2図）。この丘陵は南北約200m、東西約70mの広さで、城前地区と呼んでいる。これまで南北大路を対象として第43・44次（1983年）、第50次（1986年）の調査を実施し、第44次調査では、南北大路の東側溝に取り付く暗渠から、靈龜元（715）年～天平12（740）年の間に施行された郷里制に関わる木簡、兵制関係の木簡など奈良時代の木簡が多く出土した。このため南北大路の北東に隣接する城前地区に、奈良時代の軍事に関わる実務官衙が置かれていた可能性を考えてきた。

このような想定をもとに実施した第69次調査では、城前地区における官衙の機能や性格については特定できなかったが、奈良時代3時期・平安時代1時期の4時期にわたる官衙を検出し、特に奈良時代の官衙が充実していることが知られた。今年度は、昨年度に引き続き、この地区における官衙の構造と変遷および性格を明らかにすることを目的として調査を行った。城前地区的調査は3年間継続して行う予定であり、今年は2年目である。

(2) 調査の経過

第70次調査区内の北半部と調査区の北側には杉林が広がっていたため、4月21日から杉など立木の伐採と搬出を森林組合に委託して開始した。5月6日に約2,000m²の調査区を設定し、器材を搬入した。5月10日より調査区内にあった旧宅のコンクリート基礎などを重機で除去し、伐採した切り株の除根を人力により開始した。5月12日には遺物取り上げ用の3m四方のグリッドを設定した。

5月17日から表土除去を開始し、6月15日に終了した。6月18日から遺構検出作業を調査区中央部より東に向けて行い、最後に調査区西側を行って、8月20日までには主要遺構をほぼ検出した。

次いで8月23日に遺構精査を開始した。遺構精査と並行しながら測量用の基準点を設置し、9月28日から1/20の遺構平面図の作成を開始した。さらに、11月5日から遺構のレベル測定を開始した。11月10日にはラジコン・ヘリコプターによる空中写真撮影を行い、11月9～16日にはタワーによる地上写真撮影を行った。

11月10～24日に建物柱穴の断ち割り、断面図作成、断面写真撮影を行った。その間、埋め戻し用の土嚢作りを開始し、遺構精査・補足調査の終了した箇所より土嚢約10,000個で遺構と遺構面を保護し、11月26日には調査を終了した。その後、重機により調査区の埋め戻しを行った。

その間、9月21日には第10回多賀城跡調査研究現地指導委員会による現地指導を受けた。11月11日に報道機関に対して調査成果を公表し、11月13日に一般の人々を対象に現地説明会を行い、約250名の参加があった。12月11日の平成11年度宮城県遺跡調査成果発表会と2月19日の第26回古代城柵官衙遺跡検討会で第70次調査の概要を報告した。



第1図 多賀城跡全体図 (1/7,000)

2. 発見した遺構と遺物

第70次調査では、掘立式建物跡20棟、柱列跡20条、堅穴住居跡1棟、瓦組暗渠1条、鍛冶遺構1基、焼面4箇所、整地層の他、土壌、溝、ピットなど多数の遺構を検出した（第3図）。これら主要遺構の分布をみると、調査区のほぼ中央の丘陵尾根に建物が集中する箇所があり、遺構のない空白部を挟んでその東西両側に再び主要遺構が認められる。ここでは、調査区を大きく西部、中央部、東部の3カ所に分けて、検出したおもな遺構について記述する。

（1）調査区西部

調査区西部は西および南に緩やかに傾斜しており、表土の下はすぐ地山面となっている。おもな遺構は掘立式建物跡2棟、柱列跡3条であり、いずれも地山面で検出した。

1) 掘立式建物跡

【S B2468A・B建物跡】（平面図：第3図）

第69次調査でS A2468A・B柱列跡として報告したものである（『年報1999』）。今回の調査で、さらに北に1間分、そこから西に1間分検出し、これが建物跡であることが判明したので、S B2468建物跡と改称する。

【位置】調査区西部の南端から第69次調査区にまたがる。

【柱間数・棟方向】南北3間、東西1間以上で、棟方向は不明である。

【他の遺構との重複】なし。

【建て替え】第69次調査での柱穴の重複状況より、S B2468AからS B2468Bへの2時期の建て替えがある。

以下、おもに残存状況の良いS B2468B建物跡について記述し、S B2468A建物跡については検出状況に限って記す。

＜S B2468B建物跡＞

【検出状況】東側柱列および北側柱列の5カ所で柱穴を検出した。建物の西半部は調査区の外に位置する。

【柱穴掘方】掘方は一辺65～90cmの方形で、深さは、第69次調査によると東側柱列の北から1間目柱穴で約70cmである。埋め土は地山土をブロック状に含む明褐色砂質土を基調とした互層である。

【柱痕跡】東側柱列4カ所の柱穴で検出した。直径25cm前後の円形で、堆積土はしまりの悪い褐色土である。

【平面規模】東側柱列の総長は5.30m、柱間寸法は北から1.81m、1.71m、1.79mである。北側柱列の柱間寸法は約2.1mである。

【建物の方向】東側柱列でみると、北から東へ約2°偏る。

【出土遺物】第69次調査で、掘方埋め土から丸瓦II類破片、柱切取穴から政庁第II期の刻印「伊」丸瓦IIB類破片が少数出土した。

第2図 城前地区全体図 (1/1,000)





第3図 第70次調査(本年度)及び第69次調査(平成10年度)検出遺構全体図(1/200)

<SB2468A 建物跡>

【検出状況】 東側柱列の3ヵ所で柱穴を検出した。いずれの柱穴も重複するSB2468B建物跡の柱穴によって大きく壊されているため、遺構の詳細は不明である。

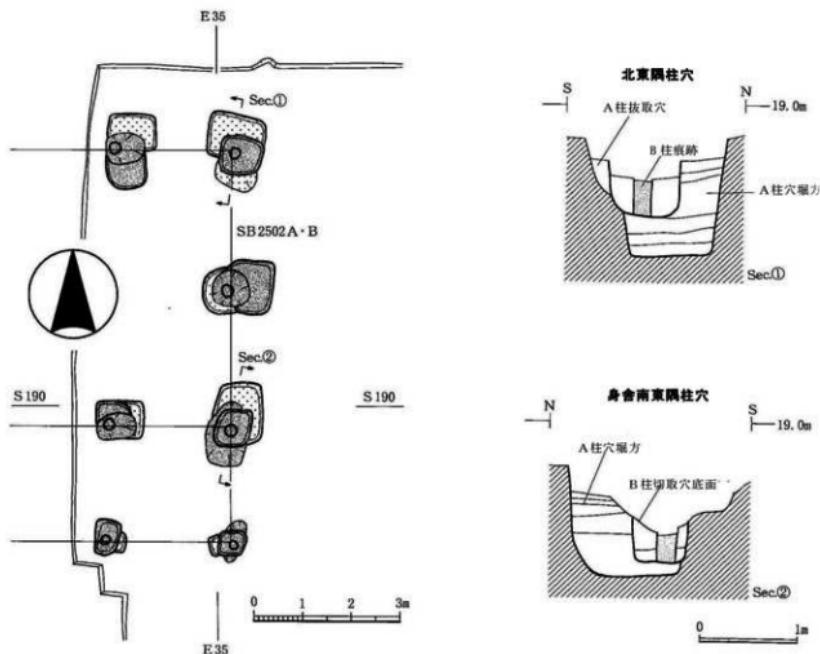
【SB2502A・B建物跡】(平面図・断面図: 第4図、写真: 図版3-1, 6-1・2)

【位置】 調査区西部の北端。

【柱間数・棟方向】 桁行1間以上、梁行2間の身舎に、南側に1間の廂が付く、東西棟と考えられる。

【他の遺構との重複】 なし。

【建て替え】 柱穴の重複状況より、ほぼ同位置でSB2502AからSB2502Bへの2時期の建て替えがある。ただし、重複関係と底面が浅いことからSB2502A建物跡の柱抜取穴とみたものは、SB2502Aの柱穴掘方より新しく、かつSB2502Bの柱穴掘方より古い柱穴の掘方となる可能性もあり、その場合は3時期の建て替えであったとみられる。



第4図 SB2502 建物跡平面図 (1/100) 及び柱穴断面図 (1/50)

以下、おもに残存状況の良い S B 2502B 建物跡について記述し、S B 2502A 建物跡については特記すべき事項に限って記す。

＜S B 2502B 建物跡＞

【検出状況】身舎 5 カ所および廂 2 カ所で柱穴を検出した。建物の西半部は調査区外に位置する。

【柱穴掘方】掘方は身舎が一辺 80～130cm、廂が一辺 40cm 前後の方形である。深さは、北東隅柱穴で約 80cm、身舎の南東隅柱穴で約 100cm である。埋め土は地山凝灰岩をブロック状に含む褐色土で、炭化物をわずかに含む。

【柱痕跡】検出した 7 カ所すべての柱穴で検出した。そのうちの 5 カ所は柱切取穴の底面付近で確認した。身舎が直径 24cm 前後、廂が直径 20cm 前後の円形で、堆積土はしまりのない暗褐色砂質土である。

【平面規模】北側柱列の柱間寸法は 2.45m である。東妻の総長は 7.94m、柱間寸法は北から 2.78m、2.87m、2.29m（廂）である。

【建物の方向】東妻でみると、南北基準線とほぼ一致する。

【出土遺物】掘方埋め土からロクロ調整で底部がヘラケズリ、内面が放射状ミガキされた土師器坏底部、須恵器坏、政府第 II 期の平瓦 II B 類 a タイプ、丸瓦などの破片、柱切取穴から須恵器甕、平瓦など破片、柱痕跡から須恵系土器高台坏、土師器坏・甕、政府第 II 期の平瓦 II B 類、丸瓦などの破片が少數出土した。

＜S B 2502A 建物跡＞

【検出状況】身舎 5 カ所および廂 2 カ所で柱穴を部分的に検出した。いずれの柱穴も重複する S B 2502B 建物跡の柱穴によって壊されている。

【柱穴掘方】掘方は身舎が一辺 70～100cm、廂が一辺 50～70cm の方形で、深さは、北東隅柱穴で約 120cm、身舎の南東隅柱穴で約 120cm であり、前述の S B 2502B 建物跡の柱穴掘方より深い。埋め土は地山凝灰岩をブロック状に含む黄褐色土である。

2) 柱列跡

【S A 2520 柱列跡】(平面図：第 3 図)

【位置】調査区西部の南寄り。

【柱間数】南北 3 間。

【他の遺構との重複】S A 2522 柱列跡より古い。

【検出状況】4 カ所で柱穴を検出した。いずれも柱穴の西半部が調査区外に位置し、柱穴の掘方を部分的に検出したが、柱痕跡や柱抜取穴などは確認できなかった。

【柱穴掘方】掘方は部分的な検出であるが、一辺 80～90cm の方形とみられ、埋め土は黄褐色土である。

【平面規模】各柱穴の掘方東辺を結ぶ線で計測すると、全長約 8.0m、柱間寸法は北から約 2.5m、約 3.4m、約 2.1m である。

【柱列の方向】各柱穴の掘方東辺を結ぶ線は、南北基準線とほぼ一致する。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【S A 2521 A・B・C 柱列跡】(平面図: 第3図)

【位置】調査区西部の南寄り。

【柱間数】南北3間。

【他の遺構との重複】なし。

【建て替え】柱穴の重複状況より、少しずつ西へ位置をずらすように、S A 2521 AからS A 2521 BさらにS A 2521 Cへの3時期の建て替えがある。

以下、おもに残存状況の良いS A 2521 C柱列跡について記述し、S A 2521 A・B柱列跡については特記すべき事項に限って記す。

< S A 2521 C 柱列跡 >

【検出状況】4カ所で柱穴を検出した。

【柱穴掘方】掘方は直径50~55cmの円形もしくは隅丸方形で、埋め土は黄褐色土である。

【柱痕跡】2カ所の柱穴で検出した。直径24cm前後の円形である。

【平面規模】総長約7.7mで、柱間寸法は北から約2.8m、約3.0m、約1.9mである。

【柱列の方向】南北基準線とほぼ一致する。

【出土遺物】柱痕跡から須恵器甕、政庁第III期の平瓦II B類bタイプなど破片が少数出土した。

< S A 2521 A・B 柱列跡 >

【検出状況】4カ所で柱穴を検出した。古い時期の柱穴はいずれも新しい時期の柱穴に大きく壊されている。

【柱穴掘方】S A 2521 Aの掘方は一辺90~110cmの方形、S A 2521 Bの掘方は一辺60~80cmの方形もしくは楕円形で、埋め土は黄褐色土である。

【出土遺物】S A 2521 Aの掘方埋め土から、不明銅製品が1点出土した。

【S A 2522 柱列跡】(平面図: 第3図、遺物: 第9図)

【位置】調査区西部の南寄り。

【柱間数】南北2間。

【他の遺構との重複】S A 2520 柱列跡より新しい。

【検出状況】3カ所で柱穴を検出した。

【柱穴掘方】掘方は一辺100~105cmの方形で、埋め土は黄褐色土である。

【柱痕跡】検出した3カ所すべての柱穴で確認した。直径30cm前後の円形である。

【平面規模】総長6.30mで、柱間寸法は北から3.17m、3.13mである。

【柱列の方向】南北基準線とほぼ一致する。

【出土遺物】掘方埋め土から鉄釘(5)、柱痕跡から土師器甕、須恵器甕、丸瓦の破片が少数出土した。

(2) 調査区中央部

調査区中央部は城前地区の丘陵尾根にあたり、ほぼ平坦で南に緩やかに傾斜しており、表土の下はすぐ地山面となっている。ここでのおもな遺構は掘立式建物跡7棟、柱列跡9条、竪穴住居跡1棟、土壙などで、これらの遺構はすべて地山面で検出した。

1) 掘立式建物跡

【S B2452A・B建物跡】(平面図: 第3・5図、断面図: 第7図)

第69次調査で検出したものである(『年報1999』)。今回の調査で、北側に廂がつくことが判明したので、昨年度の調査成果に追加して報告する。

【位置】調査区中央部の南端から第69次調査区にまたがる。

【柱間数・棟方向】桁行5間、梁行2間の身舎に、南北両側に1間ずつ廂がつく、東西棟である。

【他の遺構との重複】S B2451(第69次調査検出)・2508建物跡より新しく、SK2547土壙より古い。

【建て替え】柱穴の重複状況より、ほぼ同位置でS B2452AからS B2452Bへの2時期の建て替えがある。

以下、おもに残存状況の良いS B2452B建物跡について記述し、S B2452A建物跡については検出状況に限って記す。

< S B2452B建物跡 >

【検出状況】今回の調査では、身舎北側柱列の6カ所および北廂柱列の6カ所で柱穴を検出した。

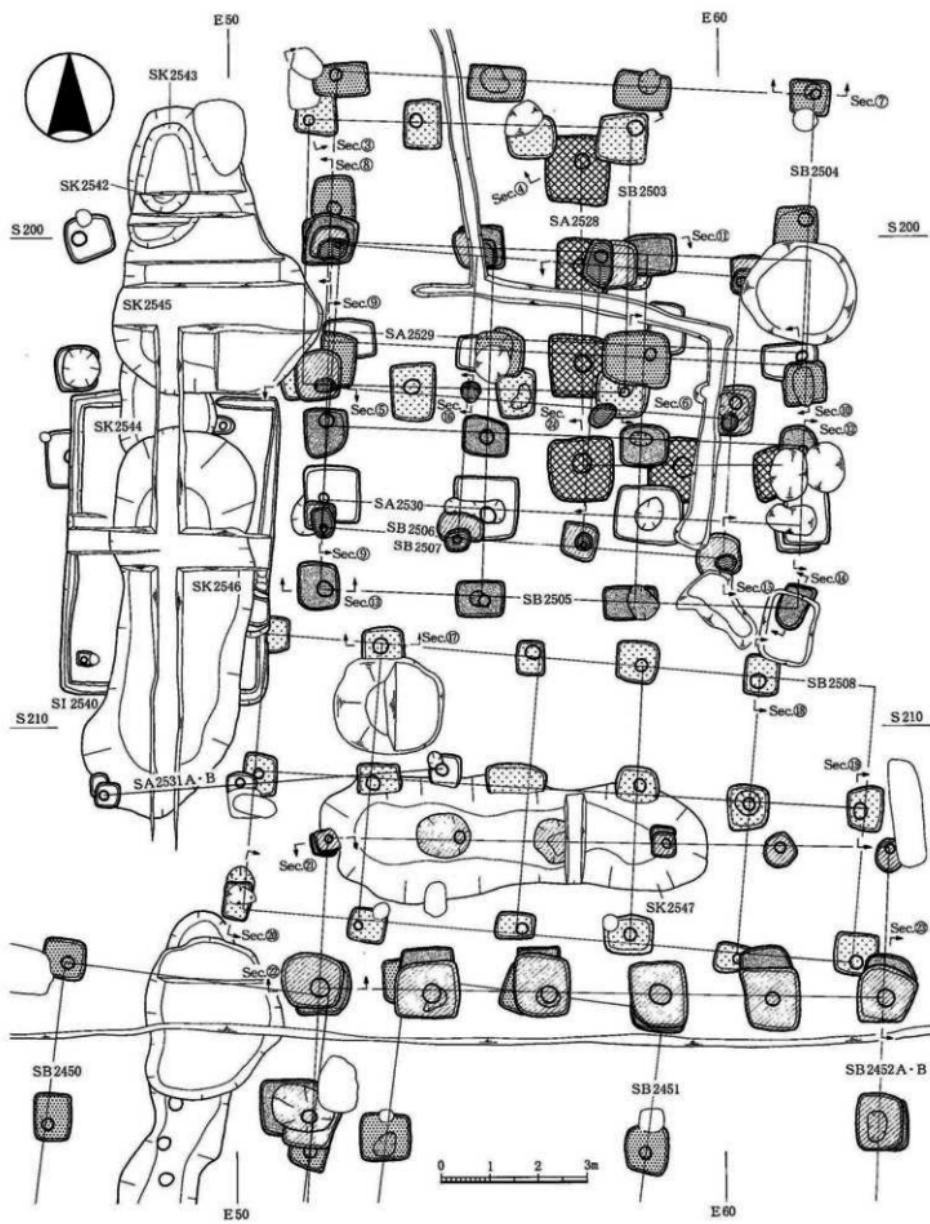
【柱穴掘方】掘方は身舎が一辺80~115cm、廂が一辺45~65cmの方形であり、身舎の方が廂よりも大きい。深さは身舎の北西隅柱穴で約135cm、廂の北西隅柱穴で約30cmであり、身舎の方が廂よりも深い。埋め土は明黄褐色土や褐色砂質土の互層である。また、廂の北西隅柱穴掘方では、平瓦が礎板状に埋められている状況が確認できた。なお、身舎の南東隅柱穴で柱の木質部が残存し、その下に平瓦を礎板として柱周りに平瓦を根巻き状に粘土とともに置いていた状況を第69次調査で確認している(『年報1999』)。

【柱痕跡】身舎北側柱列6カ所、北廂柱列5カ所の柱穴で検出した。そのうち身舎北側柱列の2カ所および北廂の1カ所は柱切取穴の底面付近で確認した。身舎が直径36cm前後、廂が20cm前後の円形で、堆積土はしまりのない黒褐色土で炭粒をわずかに含む。なお、北廂柱列の西から2間目では、柱は抜き取られていた。

【平面規模】桁行総長は身舎北側柱列で11.64m、柱間寸法は西から2.33m、2.33m、2.33m、2.32m、2.34mである。梁行は第69次調査の成果もあわせると、総長が西妻で11.00m、柱間寸法は北から2.98m(北廂)、2.70m、2.63m、2.68m(南廂)である。

【建物の方向】身舎北側柱列でみると、東西基準線とほぼ一致する。

【出土遺物】第69次調査で、掘方埋め土から土師器坏・甕、須恵器坏、政庁I~III期の平瓦、丸瓦の破片、柱切取穴から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、灰釉陶器椀、政庁I~III期の平瓦、丸瓦の破



片、柱痕跡から土師器坏、須恵器坏、政府第Ⅰ～Ⅲ期の平瓦、丸瓦の破片が少数出土した。土師器はいずれもロクロ調整で、掘方埋め土出土の土師器坏には回転糸切り無調整で内面横ミガキのもの、柱切取穴出土の土師器坏には回転糸切り後に手持ちヘラケズリしたもの、手持ちヘラケズリのものがある。底部切り離し後に再調整されたものが多く、いずれも底径が大きい。柱切取穴出土の須恵器坏にはヘラ切りのものが多く、他に回転糸切り後に手持ちヘラケズリしたものなどがある。

【S B 2452 A 建物跡】

【検出状況】今回の調査では、身舎北側柱列の6カ所および北廂柱列の2カ所で柱穴を検出した。これら 대부분は、重複するS B 2452 B 建物跡の柱穴によって大きく壊されており、遺構の詳細は不明である。

【出土遺物】第69次調査で、掘方埋め土から政府第Ⅱ期の平瓦Ⅱ B類の破片が1点出土した。

【S B 2503 建物跡】(平面図: 第5図、断面図: 第6図、写真: 図版3-3, 6-3~5)

【位置】調査区中央部の中央。

【柱間数・棟方向】桁行3間、梁行2間の東西棟である。

【他の遺構との重複】S A 2528 柱列跡より新しく、S B 2404～2407 建物跡、S K 2545 土壙より古い。また、S A 2529 柱列跡と位置が重複するが、直接の切り合いがなく新旧は不明である。

【検出状況】10個すべての柱穴を検出した。東西両妻の棟通りの柱穴は重複する柱穴に大きく壊されている。

【柱穴掘方】掘方は一辺85～105cmの方形で、深さは北東隅柱穴で約80cmである。埋め土は、地山土をブロック状に含むにぶい黄褐色土の互層である。

【柱痕跡】北側柱列3カ所、南側柱列2カ所の柱穴で検出した。そのうち南東隅柱穴では柱切取穴の底面付近で確認した。直径27cm前後の円形で、堆積土は灰黄褐色土で炭粒をわずかに含む。なお、南側柱列東から1間目の柱穴では柱は抜き取られていた。

【平面規模】桁行総長は北側柱列で6.68m、柱間寸法は西から2.20m、約2.4m、約2.1mである。梁行総長は東妻で5.36m、柱間寸法は北から約2.6m、約2.7mである。

【建物の方向】北側柱列でみると、東から南へ約2°偏る。

【出土遺物】柱抜取穴からロクロ調整と思われる体下部～底部手持ちヘラケズリの土師器坏底部破片の他、須恵器坏の破片が少数出土した。

【S B 2504 建物跡】(平面図: 第5図、断面図: 第6図、写真: 図版3-3, 6-6・7)

【位置】調査区中央部の中央。

第5図 調査区中央部の遺構平面図(1/100)

【柱間数・棟方向】桁行3間、(米1) 2間×東西4間×(0.5)。

【他の遺構との重複】S B 2503 建物跡、S A 2528・2529 柱列跡より新しく、S B 2505～2507 建物跡より古い。

【検出状況】10個すべての柱穴を検出した。

【柱穴掘方】 挖方は一辺 70~115cm の方形で、深さは北東隅柱穴で約 75cm である。埋め土は地山土や焼土をブロック状に多量に含むにぶい黄褐色土の互層である。

【柱痕跡】 北側柱列 2 カ所、両妻棟通り 2 カ所および南側柱列 1 カ所の柱穴で検出した。そのうち北西隅柱穴では柱切取穴の底面付近で確認した。直径 26cm 前後の円形で、堆積土は褐灰色粘質土である。なお、北側柱列 2 カ所および南側柱列 2 カ所の柱穴では柱は抜き取られていた。

【平面規模】 衍行総長は北側柱列で 10.90m、柱間寸法は西から約 3.2m、約 4.2m、約 3.5m である。梁行総長は東妻で約 5.5m、柱間寸法は北から 2.59m、約 2.9m である。

【建物の方向】 北側柱列でみると、東から南へ約 3° 傾る。

【出土遺物】 柱抜取穴から土師器坏、須恵器坏、平瓦、丸瓦の破片、柱痕跡から土師器坏・甕、政庁第 II 期の平瓦 II B 類、丸瓦の破片が少数出土した。このうち土師器坏にはロクロ調整のものがある。

【S B2505 建物跡】 (平面図：第 5 図、断面図：第 6 図、遺物：第 9 図、写真：図版 3-3, 6-6)

【位置】 調査区中央部の中央。

【柱間数・棟方向】 衍行 3 間、梁行 2 間で総柱の東西棟である。

【他の遺構との重複】 S B2503・2504 建物跡、S A2528・2529 柱列跡より新しく、S B2506・2507 建物跡より古い。また、S A2530 柱列跡と位置が重複するが、直接の切り合いがなく新旧不明である。

【検出状況】 北東隅柱穴を除く 11 個の柱穴を検出した。北側柱列では重複する柱穴によって、また東妻の柱穴は後世の攪乱によって、それぞれ柱穴が部分的に壊されている。

【柱穴掘方】 いずれの柱穴も掘方は一辺 75~105cm の方形で、建物の外側の柱穴と建物内部の柱穴とで大きな違いはない。深さは南西隅柱穴で約 85cm である。埋め土は地山土をブロック状に多量に含むにぶい黄褐色土や明黄褐色土を基調とした互層である。

【柱痕跡】 棟通り 3 カ所および南側柱列 2 カ所の柱穴で検出した。そのうち南側柱列西から 1 間目柱穴では柱切取穴の底面付近で確認した。直径 26cm 前後の円形で、建物の外側の柱穴と建物内部の柱穴とで大きな違いはない。堆積土は黒褐色土である。なお、棟通りの柱列の東から 1 間目および南側柱列東から 1 間目では柱は抜き取られていた。

【平面規模】 衍行総長は棟通りの柱列で 9.82m、柱間寸法は西から 2.33m、約 4.2m、約 3.4m である。梁行総長は西妻で約 7.2m、柱間寸法は北から約 3.7m、3.46m である。

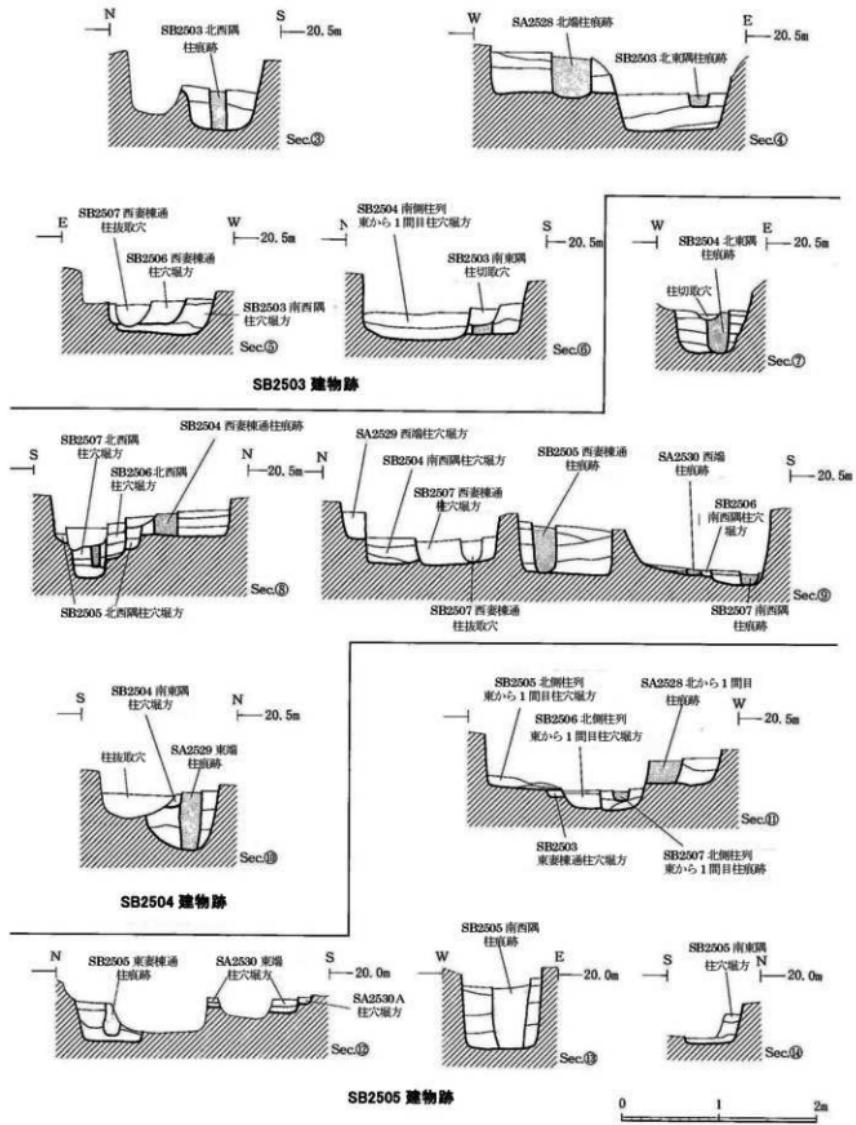
【建物の方向】 棟通りの柱列でみると、東から南へ約 4° 傾る。

【出土遺物】 柱抜取穴から丸瓦、鉄釘または鐵鎌の破片（3）、柱痕跡からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕などの破片が少数出土した。柱痕跡出土の須恵器坏には底部がヘラ切りのもの、須恵器蓋には天井部が回転ヘラケズリのものが各 1 点ある。

【S B2506 建物跡】 (平面図：第 5 図、断面図：第 6, 7 図、写真：図版 3-3, 6-8・9)

【位置】 調査区中央部の中央。

【柱間数・棟方向】 衍行 3 間、梁行 2 間の東西棟である。



第6図 調査区中央部の建物跡・柱列跡 柱穴断面図(1) (1/50)

【他の遺構との重複】SB2503～2505 建物跡、SA2528～2530 柱列跡より新しく、SB2507 建物跡より古い。

【検出状況】10個すべての柱穴を検出した。大多数の柱穴は、重複する柱穴や後世の擾乱によって部分的に壊されている。

【柱穴掘方】掘方は一辺 65～105cm の方形で、深さは北側柱列東から 1 間目柱穴で約 80cm である。

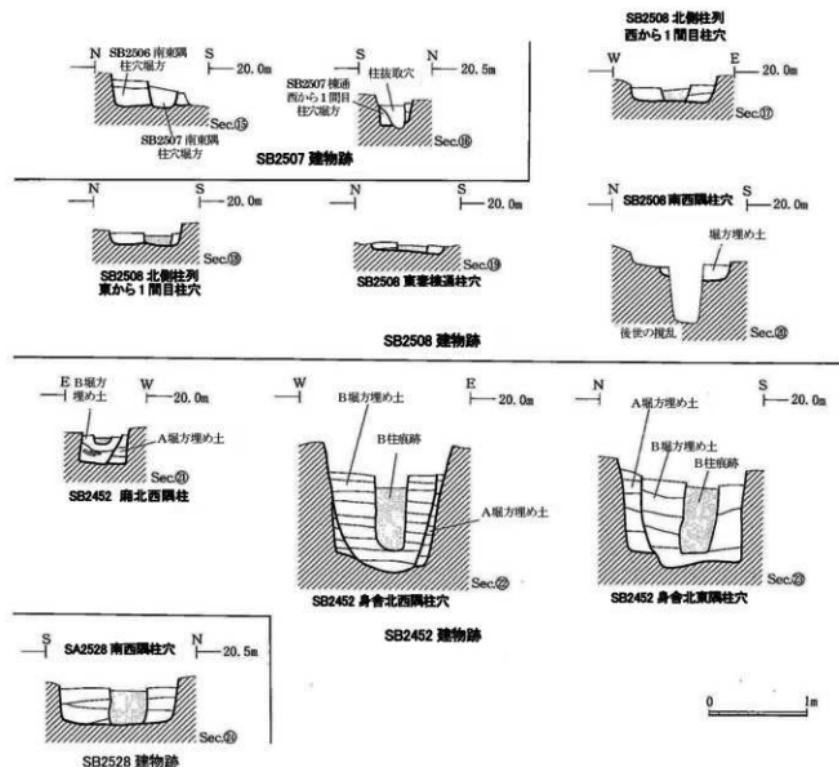
埋め土は灰白色火山灰をブロック状に多量に含む黒褐色土や暗褐色土を基調とした互層である。

【柱痕跡】東妻棟通りの柱穴 1 カ所で、柱切取穴の底面付近で検出した。直径 27cm の円形である。

【平面規模】桁行総長は南側柱列で約 8.2m、柱間寸法は西から約 3.0m、約 2.3m、約 2.9m である。

梁行総長は西妻で約 5.8m、柱間寸法は北から約 2.7m、約 3.1m である。

【建物の方向】南側柱列でみると、東から南へ約 6° 傾る。



第7図 調査区中央部の建物跡・柱列跡 柱穴断面図(2) (1/50)

【出土遺物】 挖方埋め土からロクロ調整の土師器坏、須恵器坏の破片、柱痕跡から平瓦II B類の破片が少數出土した。

【S B 2507 建物跡】 (平面図：第5図、断面図：第7図、遺物：第9図、写真：図版3-3, 6-8・9)

【位置】 調査区中央部の中央。

【柱間数・棟方向】 梁行3間、梁間2間で総柱の東西棟である。

【他の遺構との重複】 S B 2503～2506 建物跡、S A 2528～2530 柱列跡より新しい。

【検出状況】 12個すべての柱穴を検出した。北側柱列の2カ所では後世の擾乱によって柱穴が部分的に壊されている。

【柱穴掘方】 いずれの柱穴掘方も一辺30～60cmの隅丸方形もしくは梢円形で、建物の外側の柱穴と建物内部の柱穴とで大きな違いはない。深さは北西隅柱穴で約85cmである。埋め土は灰白色火山灰をブロック状に多量に含む黒褐色土の互層である。

【柱痕跡】 北側柱列3カ所および南側柱列3カ所の柱穴で検出した。直径18cm前後の円形で、堆積土はしまりがない黒色土である。なお、棟通りの柱列4カ所および南東隅柱穴では柱は抜き取られていた。

【平面規模】 梁行総長は南側柱列で約8.3m、柱間寸法は西から2.73m、2.57m、約3.0mである。梁行総長は西妻で5.79m、柱間寸法は北から約2.9m、約2.9mである。

【建物の方向】 南側柱列でみると、東から南へ約5°偏る。

【出土遺物】 柱抜取穴から須恵系土器坏・高台坏、土師器坏・甕、須恵器坏・甕、灰釉陶器椀、平瓦、丸瓦の破片、柱痕跡から須恵系土器坏・高台坏、土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・蓋、政庁第II期の平瓦II B類aタイプ、丸瓦、鉄釘(4)の破片が少數出土した。須恵系土器坏・高台坏は黄褐色で胎土が微細なものである。また、灰釉陶器椀は口縁部破片で、黒塙14号窯式または黒塙90号窯式の猿投窯製品とみられる。

【S B 2508 建物跡】 (平面図：第5図、断面図：第7図、写真：図版2-1)

【位置】 調査区中央部の南寄り。

【柱間数・棟方向】 梁行5間、梁行2間で総柱の東西棟である。

【他の遺構との重複】 S B 2452 建物跡、S A 2531 柱列跡、S I 2540 住居跡、S K 2547 土壙より古い。

【検出状況】 北東隅柱穴を除く17個の柱穴を検出した。全体的に後世の削平をうけており、残存状況はあまり良くない。

【柱穴掘方】 いずれの柱穴も掘方は一辺55～90cmの方形で、建物の外側の柱穴と建物内部の柱穴とで大きな違いはない。深さは南西隅柱穴で約35cmである。埋め土は地山土をブロック状に含む褐色土や灰黄褐色土である。

【柱痕跡】 北側柱列4カ所、棟通りの柱列5カ所および南側柱列5カ所の柱穴で検出した。そのうち棟通り柱列の東から1間目柱穴では柱切取穴の底面付近で確認した。直径27cm前後の円形で、建物の外側の柱穴と建物内部の柱穴とで大きな違いはない。堆積土は暗褐色土や灰褐色土である。

【平面規模】 衍行総長は棟通りの柱列で 12.31m、柱間寸法は西から 2.34m、約 2.9m、約 2.5m、2.26m、2.27m である。梁行総長は東妻から 1 間目で 5.67m、柱間寸法は北から 2.48m、3.19m である。

【建物の方向】 南側柱列でみると、東から南へ約 6° 傾る。

【出土遺物】 柱痕跡から摩滅した土師器坏、須恵器甕、丸瓦の破片が少数出土した。

2) 柱列跡

【S A 2523 柱列跡】 (平面図：第 8 図、写真：図版 3-2)

【位置】 調査区中央部の北寄り。

【柱間数】 東西 5 間。

【他の遺構との重複】 S A 2524 柱列跡より古い。

【検出状況】 6 カ所で柱穴を検出した。そのうち 3 個の柱穴は重複する柱穴や後世の溝によって部分的に壊されている。

【柱穴掘方】 掘方は一辺 100～135cm の方形で、埋め土は黄褐色土である。

【柱痕跡】 西端の柱穴で確認した。直径 39cm の円形である。

【平面規模】 総長約 14.9m で、柱間寸法は西から約 3.0m、約 2.7m、約 3.0m、約 3.0m、約 3.2m である。

【柱列の方向】 東から南へ約 2° 傾る。

【出土遺物】 柱抜取穴から平瓦、丸瓦の破片、鉄滓が少数出土した。

【S A 2524 A・B 柱列跡】 (平面図：第 8 図、写真：図版 3-2)

【位置】 調査区中央部の北寄り。

【柱間数】 東西 3 間。

【他の遺構との重複】 S A 2523 柱列跡より新しい。

【建て替え】 柱穴の重複状況より、ほぼ同位置で S A 2524 A から S A 2524 B への 2 時期の建て替えがある。

以下、おもに残存状況の良い S A 2524 B 柱列跡について記述し、S A 2524 A 柱列跡については検出状況に限って記す。

< S A 2524 B 柱列跡 >

【検出状況】 4 個の柱穴を検出した。

【柱穴掘方】 掘方は一辺 100～135cm の方形で、埋め土は黄褐色土である。

【柱痕跡】 2 カ所の柱穴で検出した。直径 30cm 前後の円形である。いずれも柱切取穴の底面付近で確認した。

【平面規模】 総長約 7.6m で、柱間寸法は西から約 2.7m、約 2.1m、2.88m である。

【柱列の方向】 東から南へ約 6° 傾る。

【出土遺物】 柱抜取穴から政庁第 I 期の二重弧文軒平瓦 511-a タイプ、政庁第 II 期の平瓦 II B 類 a タ

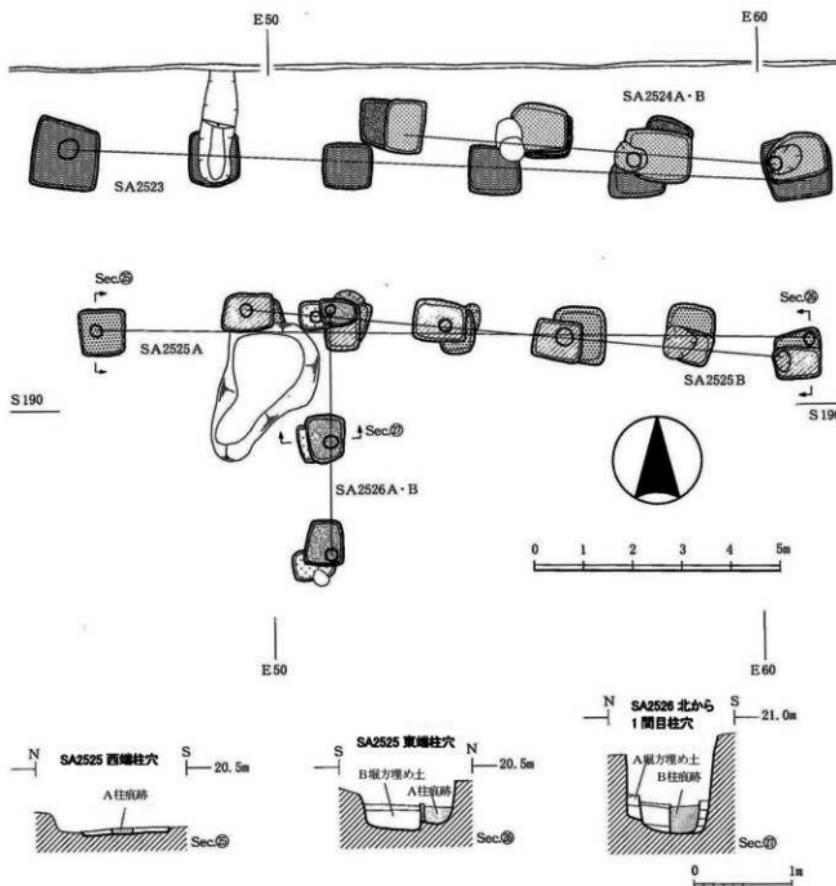
イブ、丸瓦などの破片、柱痕跡から平瓦II B類、丸瓦の破片が少數出土した。

＜SA2524A柱列跡＞

【検出状況】東端を除く3個の柱穴を検出した。柱穴の大部分は、重複するSA2524B柱列跡の柱穴によって壊されており、遺構の詳細は不明である。

【SA2525A・B柱列跡】(平面図・断面図：第8図、遺物：第9図、写真：図版3-2)

【位置】調査区中央部の北寄り。



第8図 SA2523～2526柱列跡平面図(1/100)及び柱穴断面図(1/50)

【柱間数】東西6間。

【他の遺構との重複】S A 2526 柱列跡より古い。

【建て替え】柱穴の重複状況より、方向をずらすように、S A 2525AからS A 2525Bへの2時期の建て替えがある。

< S A 2525A 柱列跡 >

【検出状況】7個の柱穴を検出した。大半の柱穴は重複する柱穴に大きく壊されている。

【柱穴掘方】掘方は一辺85~120cmの方形で、深さは東端柱穴で約45cmである。埋め土は地山土をブロック状に含む褐色土である。

【柱痕跡】東西両端の柱穴で検出した。直径25cm前後の円形で、堆積土はしまりのない灰黄褐色土である。

【平面規模】総長14.48mで、柱間寸法は西から約3.3m、約1.8m、約2.2m、約2.5m、約2.3m、約2.4mである。

【柱列の方向】東から南へ約2°偏る。

【出土遺物】掘方埋め土から土師器坏、須恵器甕、綠釉陶器椀の破片が少数出土した。このうち土師器坏は回転ヘラケズリされ、両面に漆が付着している。綠釉陶器椀は体部小破片で、黒笛14号窯式または黒笛90号窯式の猿投窯製品とみられる。

< S A 2525B 柱列跡 >

【検出状況】西端を除く6個の柱穴を検出した。西端の柱穴は後世の削平をうけて残存していない。

【柱穴掘方】掘方は一辆65~110cmの方形で、深さは東端柱穴で約50cmである。埋め土は灰黄褐色砂質土と褐色砂質土の互層である。

【柱痕跡】3カ所の柱穴で検出した。直径27cm前後の円形である。なお、2カ所の柱穴では柱は抜き取られていた。

【平面規模】総長約11.0m(5間分)で、柱間寸法は西から約2.0m、約2.2m、2.44m、約2.3m、約2.2mである。

【柱列の方向】東から南へ約6°偏る。

【出土遺物】柱抜取穴からは土師器坏・甕、須恵器坏・甕、平瓦II B類、丸瓦の破片、柱痕跡からは土師器坏・甕、須恵器坏、政序第II期の平瓦II B類aタイプ、政序第III期の平瓦II B類bタイプ、政序第IV期の平瓦II C類(6)、丸瓦などの破片、鉄滓(図版9-10)が少数出土した。このうち土師器はいずれもロクロ調整のもので、土師器坏には回転糸切り無調整のものが9点、回転糸切り後に体下部手持ちヘラケズリされたもの、手持ちヘラケズリ、回転ヘラケズリが各1点ある。また、須恵器坏には回転糸切り無調整のもの(1)が6点ある。

【S A 2526A・B 柱列跡】(平面図・断面図: 第8図、写真: 図版3-2)

【位置】調査区中央部の北寄り。

【柱間数】南北2間。

【他の遺構との重複】 SA 2525 柱列跡より新しい。

【建替え】 柱穴の重複状況より、ほぼ同位置で SA 2526 A から SA 2526 B への 2 時期の建替えがある。

以下、おもに残存状況の良い SA 2526 B 柱列跡について記述し、SA 2526 A 柱列跡については検出状況に限って記す。

〈SA 2526 B 柱列跡〉

【検出状況】 3 個の柱穴を検出した。

【柱穴掘方】 掘方は一辺 70~100cm の方形で、深さは北から 1 間目柱穴で約 105cm である。埋め土は地山土をブロック状に含む黒褐色土や褐色土の互層である。

【柱痕跡】 3 個すべての柱穴で検出した。直径 26cm 前後の円形で、堆積土はしまりのない暗褐色土である。

【平面規模】 総長 5.10m で、柱間寸法は北から 2.79m、2.31m である。

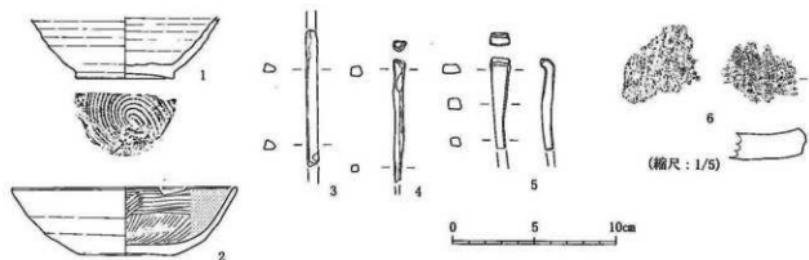
【柱列の方向】 南北基準線とほぼ一致する。

【出土遺物】 柱抜取穴からは須恵系土器坏、土師器坏、須恵器坏・壺、政庁第 II 期の平瓦 II B 類 a タイプ、丸瓦などの破片、柱痕跡からは須恵器坏、政庁第 II 期の平瓦 II B 類、丸瓦などの破片が少数出土した。このうち須恵器坏にはヘラ切りのものが 2 点、回転糸切り無調整のものが 1 点ある。

〈SA 2526 A 柱列跡〉

【検出状況】 3 個の柱穴を検出した。柱穴の大部分は、重複する SA 2526 B 柱列跡の柱穴によって壊されており、遺構の詳細な検討はできないが、北端柱穴で直径 20cm の柱痕跡を検出した。

【SA 2528 柱列跡】 (平面図 : 第 5 図、断面図 : 第 7 図、写真 : 図版 2-1)



No.	種類	出土場所・層位	特徴	登録番号
1	須恵器 壺	SA2525 柱列跡	[底面] ヘラ切り無調整。底径 6.0cm。残存 1/2。	R5 13019
2	土師器 壺	SA2525 柱列跡	[底面] ヘラ切り無調整。[内面] がき付・ラミガキ・黒色処理。 口径 13.6cm。底径 6.0cm。高さ 4.1cm。残存 3/5。	R2 13019
3	不明器物	SA2505 柱列跡	両端欠損。残存長 8.3cm。幅 7.5mm。断面 D 字形。	RM22 13038
4	釘	SA2507 柱列跡	頭部欠損。頭・釘足欠損。残存長 7.5cm。断面 6mm 方形。	RM1 13038
5	釘	SA2522 挖方	頭 12×7mm 方形。釘足欠損。残存長 5.6cm。断面 8×5mm 方形。	RM4 13038
6	平瓦	SA2525	平LIIIC 類。政庁第 IV 期。[正面] 印刷押印。[背面] 布目。	R7 13030

第 9 図 調査区西部・中央部の建物跡・柱列跡の出土遺物

() 内の数値は復元値

【位置】調査区中央部の中央。

【柱間数】南北3間、東西2間で、L字形の柱列である。

【他の遺構との重複】S B 2503～2507 建物跡、S A 2530 柱列跡より古い。

【検出状況】6個の柱穴を検出した。東西柱列の東端柱穴は後世の擾乱により大きく壊されている。

【柱穴掘方】掘方は一辺100～135cmの方形で、深さは南西隅柱穴で約50cmである。埋め土は地山土をブロック状に含む黄褐色砂質土や褐色土の互層である。

【柱痕跡】5カ所の柱穴で検出した。直径36cm前後の円形で、堆積土は灰黄褐色土である。

【平面規模】南北総長は6.13m、柱間寸法は北から2.10m、2.01m、2.02mである。東西総長は約4.0mで、柱間寸法は西から2.07m、約1.9mである。

【柱列の方向】南北柱列でみると、南北基準線とほぼ一致する。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【S A 2529 柱列跡】(平面図：第5図、断面図：第6図、写真：図版3-3)

【位置】調査区中央部の中央。

【柱間数】東西3間。

【他の遺構との重複】S B 2504 建物跡より古い。また、S B 2503 建物跡と位置が重複するが、直接の切り合いがなく新旧不明である。

【検出状況】4個の柱穴を検出した。いずれの柱穴も重複する柱穴や後世の擾乱により部分的に壊されている。

【柱穴掘方】掘方は一辺75～115cmの方形で、埋め土は黄褐色土である。

【柱痕跡】東端柱穴で検出した。直径14cmの円形である。

【平面規模】総長約9.3mで、柱間寸法は西から約2.6m、約4.0m、約2.8mである。

【柱列の方向】東から南へ約2°偏る。

【出土遺物】掘方埋め土から政庁第II期の平瓦II B類、抜取穴から土師器甕、政庁第II期の平瓦II B類aタイプ、丸瓦などの破片が少数出土した。

【S A 2530A・B 柱列跡】(平面図：第5図、断面図：第6図、遺物：第9図、写真：図版3-3)

【位置】調査区中央部の中央。

【柱間数】東西3間。

【他の遺構との重複】S A 2528 柱列跡より新しく、S B 2506 建物跡より古い。

【建て替え】東端柱穴の重複状況より、S A 2530AからS A 2530Bへの2時期の建て替えがみられる。

以下、おもに残存状況の良いS A 2530B柱列跡について記述し、S A 2530A柱列跡については検出状況に限って記す。

< S A 2530B 柱列跡 >

【検出状況】4個の柱穴を検出した。東端柱穴は後世の擾乱により大きく壊されている。

【柱穴掘方】 堀方は一辺 115~135cm の方形で、深さは西端柱穴で約 70cm である。埋め土は炭片を含むにぶい黄褐色土や、灰白色火山灰をブロック状に含む灰黄褐色土である。

【柱痕跡】 2 カ所の柱穴で検出した。そのうち 1 カ所は柱切取穴の底面付近で確認した。直径 25cm 前後の円形で、堆積土は黒褐色土で炭粒や灰白色火山灰をブロック状に含む。なお、1 カ所の柱穴では柱は抜き取られていた。

【平面規模】 総長約 9.8m で、柱間寸法は西から 3.38m、約 3.3m、約 3.1m である。

【柱列の方向】 東から南へ約 3° 傾る。

【出土遺物】 堀方埋め土から回転糸切り無調整の須恵器坏破片、柱痕跡から須恵器坏、回転糸切り無調整の土師器坏（2）、政庁第 II 期の平瓦 II B 類、丸瓦などの破片が少数出土した。

< S A 2530 A 柱列跡 >

【検出状況】 東端柱穴 1 個を検出した。S A 2530 B 柱列跡の東端柱穴および後世の擾乱により大きく壊されているため、遺構の詳細は不明である。

【S A 2531 A・B 柱列跡】 (平面図：第 5 図、写真：図版 2-1)

【位置】 調査区中央部の南西寄り。

【柱間数】 東西 3 間。

【他の遺構との重複】 S B 2508 建物跡より新しく、S K 2546・2547 土壌より古い。

【建て替え】 西端柱穴の重複状況より、S A 2531 A から S A 2531 B への 2 時期の建て替えがみられる。

以下、おもに残存状況の良い S A 2531 B 柱列跡について記述し、S A 2531 A 柱列跡については検出状況に限って記す。

< S A 2531 B 柱列跡 >

【検出状況】 3 個の柱穴を検出した。

【柱穴掘方】 堀方は一辺 50~65cm の方形で、埋め土は黄褐色土である。

【柱痕跡】 3 カ所すべての柱穴で検出した。そのうち 1 カ所では柱切取穴の底面付近で確認した。直径 20cm 前後の円形である。

【平面規模】 総長 6.99m で、柱間寸法は西から 2.85m、4.14m である。

【柱列の方向】 東から北へ約 4° 傾る。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

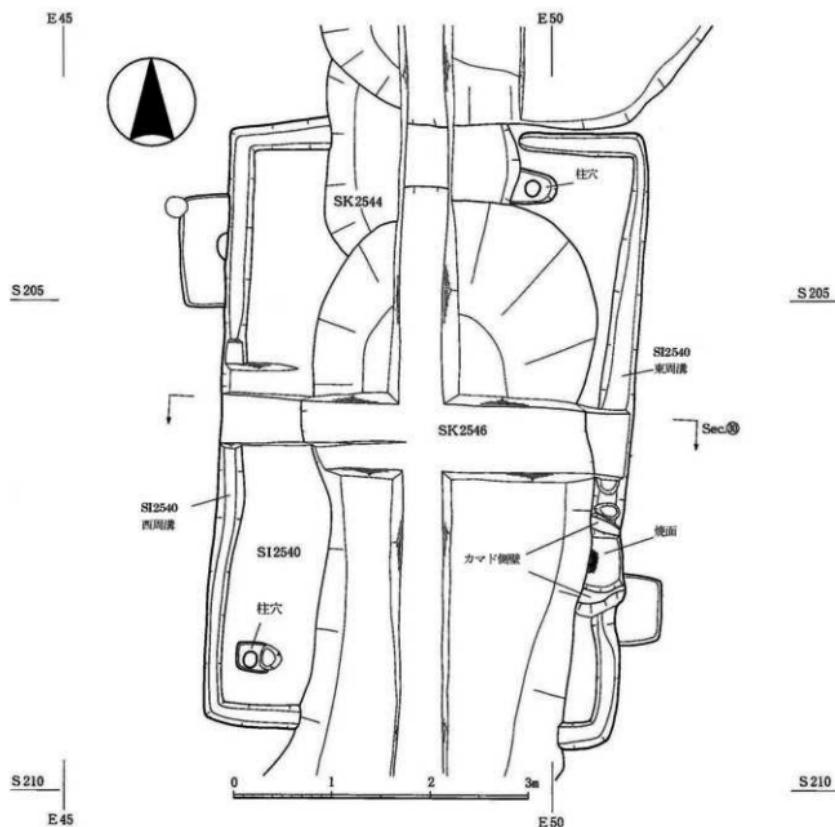
< S A 2531 A 柱列跡 >

【検出状況】 西端柱穴 1 個を検出した。重複する S A 2531 B 柱列跡の柱穴に大きく壊されているため、遺構の詳細は不明である。

3) 壺穴住居跡

【S I 2540 住居跡】 (平面図・断面図：第 10 図、写真：図版 2-1)

【位置】 調査区中央部の西寄り。



第10図 SI2540 住居跡、SK2546 土壌平面図・断面図 (1/50)

【他の遺構との重複】S B 2508 建物跡、S A 2527 柱列跡より新しく、S K 2544～2546 土壙より古い。

【検出状況】中央部分を南北に S K 2544・2546 土壙に壊されており、東・西辺および南・北辺の周溝の一部、カマド、柱穴を検出した。

【規模・平面形】東西約 4.2m、南北約 6.3m の長方形平面である。

【発掘南北基準線に対する住居の方向】西辺でみると、北から東へ約 3° 偏る。

【壁】西辺で約 25cm 残存していた。

【床面】地山面を床としており、ほぼ平坦とみられる。

【周溝】西辺、東辺のカマド部分を除いた部分、北・南辺の一部の壁沿いで確認した。幅 15～30cm、深さ 15cm で、断面形は「U」字形である。周溝内の堆積土は風化した地山礫片を含む明褐色砂である。

【カマド】東辺のやや南寄りに位置しており、側壁および燃焼部を確認した。側壁は明黄褐色粘質土によって構築されており、高さが約 10cm 残存していた。燃焼部の規模は幅約 50cm、奥行きは約 30cm 以上で、焼面が一部残存していた。カマド内部には焼土をブロック状に含む明赤褐色土や明褐色土からなるカマド崩落土が堆積していた。

【柱穴】北東部で 1 個、南西部で 1 個検出した。掘方は一辺 25～35cm の方形もしくは隅丸方形である。いずれの柱穴でも直径 15cm 前後の柱痕跡を確認した。

【堆積土】床面および周溝堆積土の上に、風化した地山礫片が堆積している。

【出土遺物】西周溝から土師器坏、政序第 II 期の平瓦 II B 類 a タイプ、丸瓦などの小破片、柱穴から政序第 II 期の平瓦 II B 類 a タイプ、カマド内堆積土から土師器坏、須恵器坏、丸瓦の小破片が少数出土した。

4) 土壙

【S K 2542 土壙】(平面図：第 5 図)

【他の遺構との重複】S K 2543・2545 土壙より古い。

【形態・規模】東西約 1.0m、南北 0.4m 以上の不整形で、深さは約 1.2m である。

【堆積層】風化礫片を多く含む褐色砂層で、人為堆積である。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【S K 2543 土壙】(平面図：第 5 図)

【他の遺構との重複】S K 2542・2545 土壙より新しい。

【形態・規模】南北約 2.6m、東西約 1.4m の不整形で、深さは約 60cm である。

【堆積層】風化礫片を多く含む褐色砂層で、人為堆積である。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【S K 2544 土壙】(平面図：第 5 図)

【他の遺構との重複】S K 2545・2546 土壙より古い。

【形態・規模】東西約2.0m、南北2.1m以上の不整形で、深さは約50cmである。

【堆積層】風化礫片を多く含む褐色砂層で、人為堆積である。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【SK2545 土壌】(平面図: 第5図、遺物: 第11図)

【他の遺構との重複】SK2542・2544土壌より新しく、SK2543土壌より古い。

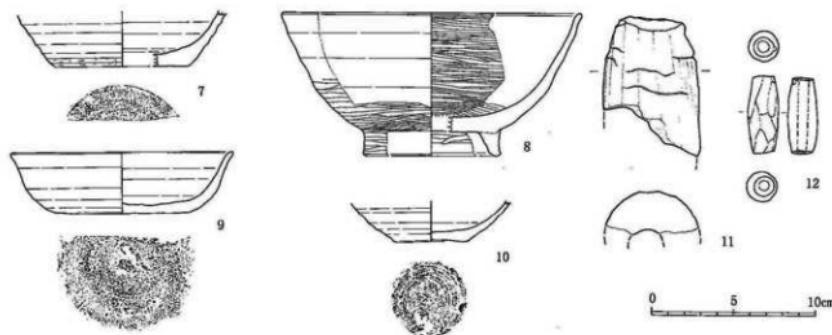
【形態・規模】南北約6.0m、東西約4.3mの不整形で、深さは約80cmである。

【堆積層】風化礫片を多く含む灰褐色や褐色砂層で、5層に分かれ、いずれも人為堆積である。SK2546土壌とは重複しないが、堆積層が類似しており、これと同時期の可能性がある。

【出土遺物】土師器坏・甕・蓋、須恵器坏・高台坏・蓋・壺、綠釉陶器椀、政庁第Ⅰ期～第Ⅱ期までの平瓦、丸瓦の破片が少数出土した。このうち土師器坏はいずれもロクロ調整で、回転糸切り後に手持ちヘラケズリされたもの、手持ちヘラケズリのもの、回転糸切り無調整のものがある。須恵器坏ではヘラ切りのもの、回転ヘラケズリのもの(7)、回転糸切り無調整のものがある。須恵器高台坏(8; 図版7-9)はロクロ調整後に両面がヘラミガキされた口縁部へ高台部破片で、内面に漆皮膜が付着し、漆バレットとして再利用されている。綠釉陶器椀は京都系の軟質の体部小破片1点である。

【SK2546 土壌】(平面図: 第5・10図、断面図: 第10図、遺物: 第11図)

【他の遺構との重複】SI2540住居跡、SK2544土壌より新しい。



No.	種類	出土遺物・層位	特徴	登録	番号
7	須恵器 壊	SK2545 土壌-4層	[底部～体下部] 回転ヘラケズリ。底径8.2cm、残存2/5。	R1	13020
8	須恵器 高台坏	SK2545 土壌-1層	底部ヘラ切り→ロクロナデ→高台→ロクロナデ→両面ヘラミガキ。内面底部に漆皮膜付着。 口径(18.4)cm、高さ(8.4)cm、底径8.8cm、残存3/5。	R5	13020
9	須恵器 杯	SK2546 土壌-4層	[底部] ヘラ切り・4角・サザエ。 口径(13.6)cm、底径(9.2)cm、器高3.8cm、残存3/5。	R1	13020
10	須恵器 壊	SK2546 土壌-2層	[底部] 回転ヘラ無調整。底径4.6cm、残存3/4。	R13	13020
11	輪印口	SK2546 土壌-2層	先端破片。ガラス質強化、輪印印アラゲ。 残存長8.6cm、厚さ外径約6cm、内径約2cm。	R23	13027
12	土錐	SK2546 土壌-2層	完形。全体4.6cm、指付アラゲ。 長さ4.7cm、幅1.9cm、厚さ1.9cm、内径6mm	R22	13027

第11図 SK2545・2546土壌の出土遺物

()内の数値は復元値

【形態・規模】南北約8.0m、東西約3.0mの不整形で、深さは約1.1mである。

【堆積層】11層に細分されるが、層相から4層に大別される。第1層（取り上げ1層）は灰白色火山灰ブロックを含むしまりの悪いにぶい黄褐色土、第2層（取り上げ2・2b・2c層）は炭片を多く含むにぶい黄褐色土、第3層（取り上げ3～5層）が風化礫片を多量に含む明黄褐色砂層と風化礫片を多く含む褐色土の互層、第4層（取り上げ6～9層）が風化礫片を多量に含む褐色砂層である。第4層は土壤の南半部全体と北半部下部に堆積し、第3層は北半部に厚く堆積する。これら第3・4層は人為的に埋め戻された層、第1・2層は北半部の窪みに自然堆積した層とみられる。

【出土遺物】第4層からは土師器坏・甕、須恵器坏（9）・甕・壺、政庁第II期の八葉蓮華文軒丸瓦（型番不明）と刻印「伊」平瓦II B類aタイプ、政庁第I期～第II期の平瓦、丸瓦の破片、第3層からは土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺、政庁第I期～第II期の平瓦、丸瓦の破片、第2層からは須恵系土器坏（10）、土師器坏・高台坏・耳皿・甕、須恵器坏・盤・蓋・甕・壺、政庁第I期～第II期の平瓦、政庁第II期の刻印「田」Aの丸瓦、輪羽口（11；図版9-5）などの破片、土錐（12；図版9-4）、第1層からは須恵系土器坏・高台坏、土師器坏・耳皿・甕、須恵器坏・甕、政庁第I期～第III期の平瓦、丸瓦の破片、鉄滓が少数出土した。土師器は各層ともロクロ調整のものである。

土師器坏・須恵器坏は第3・4層には調整のわかるものが少ないが、第1・2層には手持ちヘラケズリまたは回転ヘラケズリで再調整されるものと再調整されないものの両者がある。

【S K2547 土壙】（平面図：第5図）

【他の遺構との重複】S B2452・2508 建物跡より新しい。

【形態・規模】東西約8.0m、南北約2.6mの不整形で、深さは約40cmである。堆積土は黄褐色土である。

【出土遺物】土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺、政庁第I期～第III期までの平瓦、丸瓦の破片が少数出土した。土師器はいずれもロクロ調整で、坏には回転糸切り無調整のもの、回転ヘラケズリのもの、回転糸切り後に手持ちヘラケズリされたもの、手持ちヘラケズリのものがある。須恵器坏には回転糸切り無調整のものとヘラ切りのものとがある。

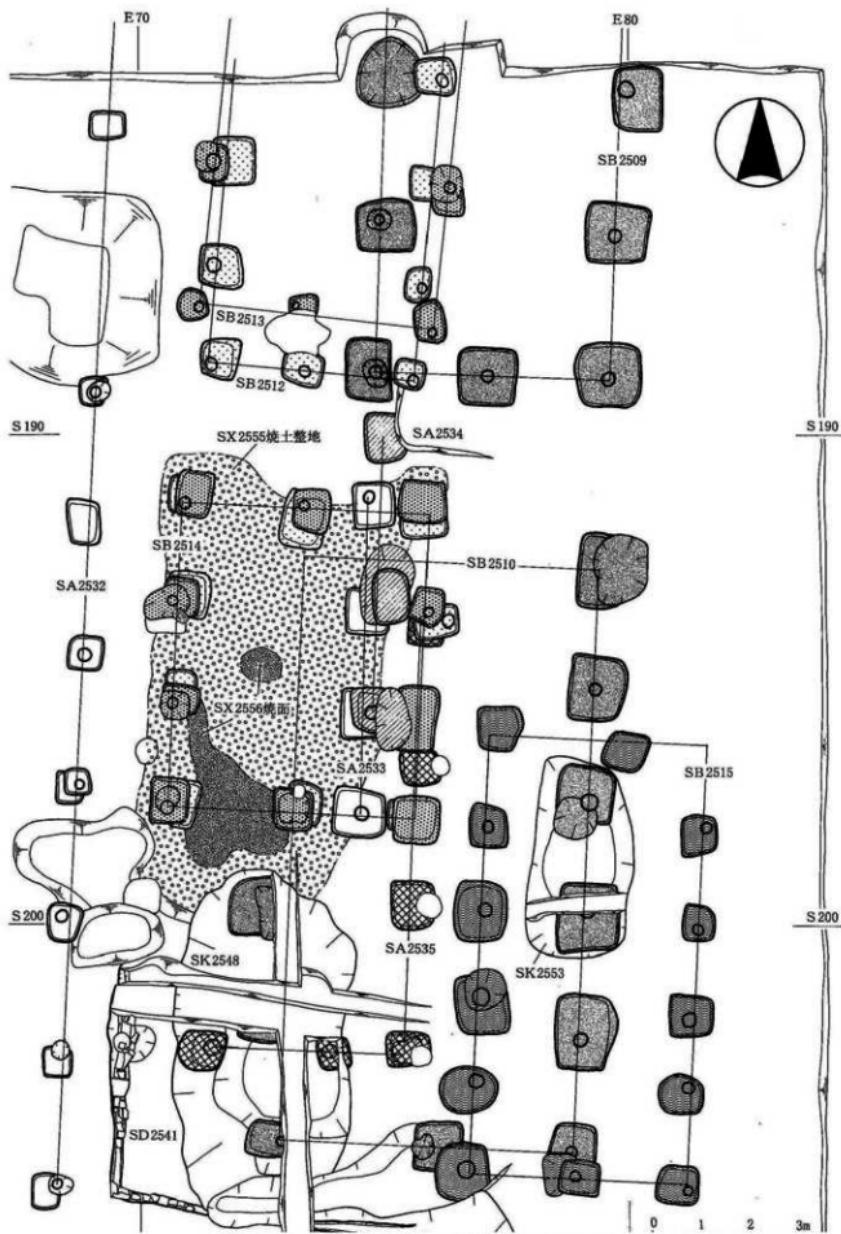
（3）調査区東部

調査区東部では焼土整地4カ所、焼面4カ所、掘立式建物跡11棟、柱列跡8条、瓦組暗渠1条、鍛冶遺構1基、土壤7基などを検出した。調査区東部は東側に緩やかに傾斜し、本地区的造営当初の整地層とみられる堆積層が広く分布している。S B2509・2512・2513 建物跡より南に位置する主要遺構は、この整地層や焼土を多量に含む焼土整地の底面またはその上面、土壤の底面などで検出した。

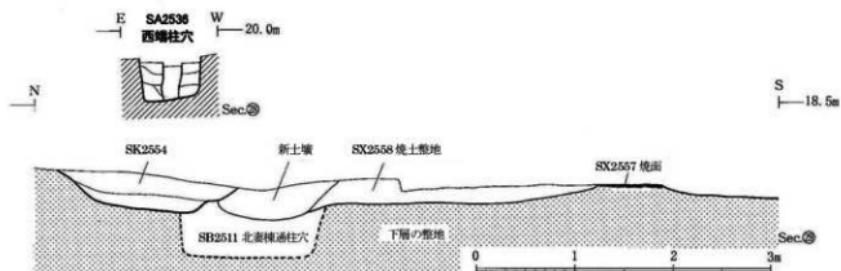
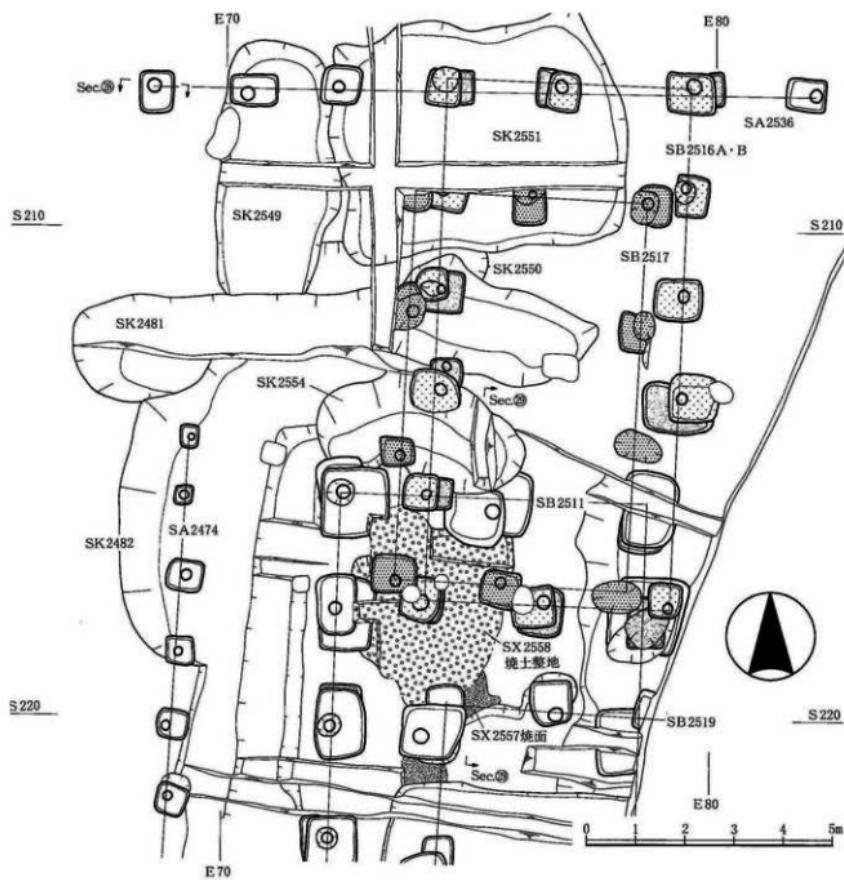
1) 整地と焼面

【S X2555 焼土整地】（平面図：第12図）

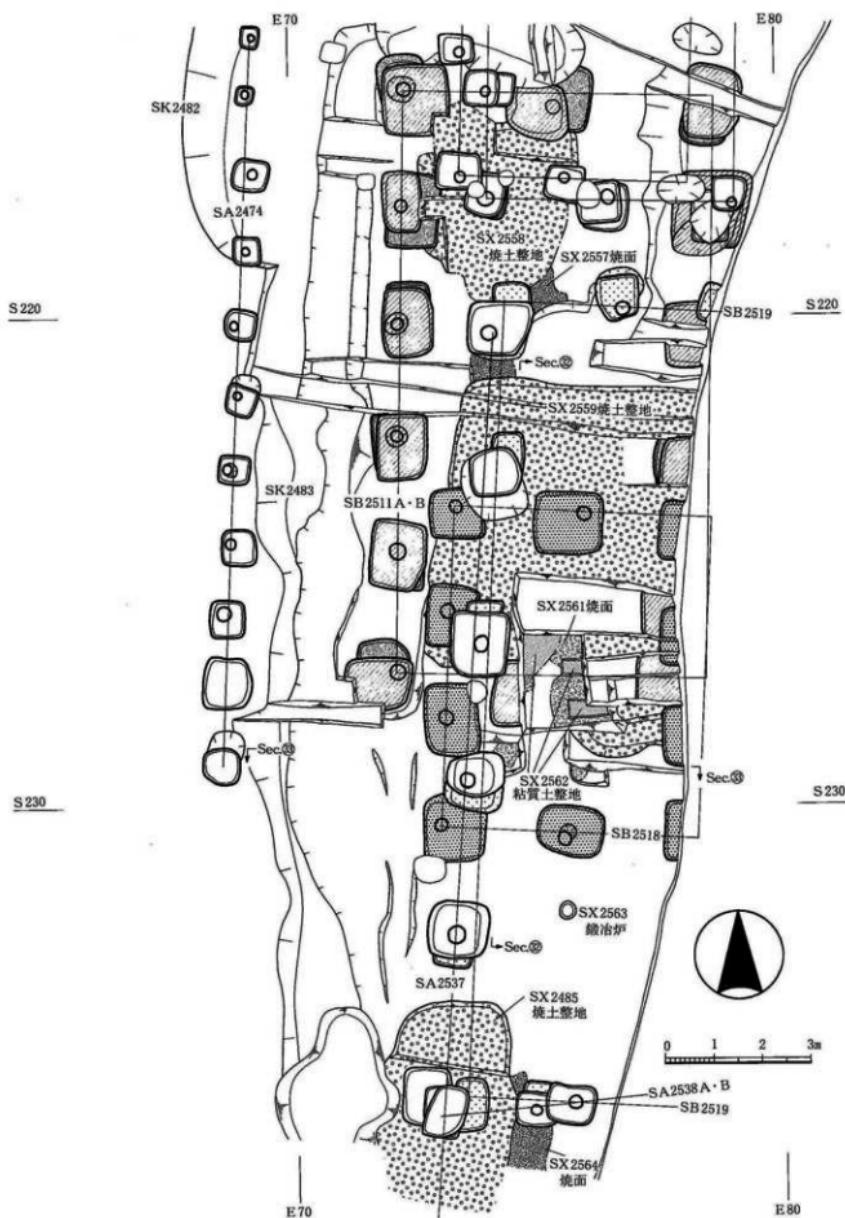
【位置】調査区東部の北寄り。



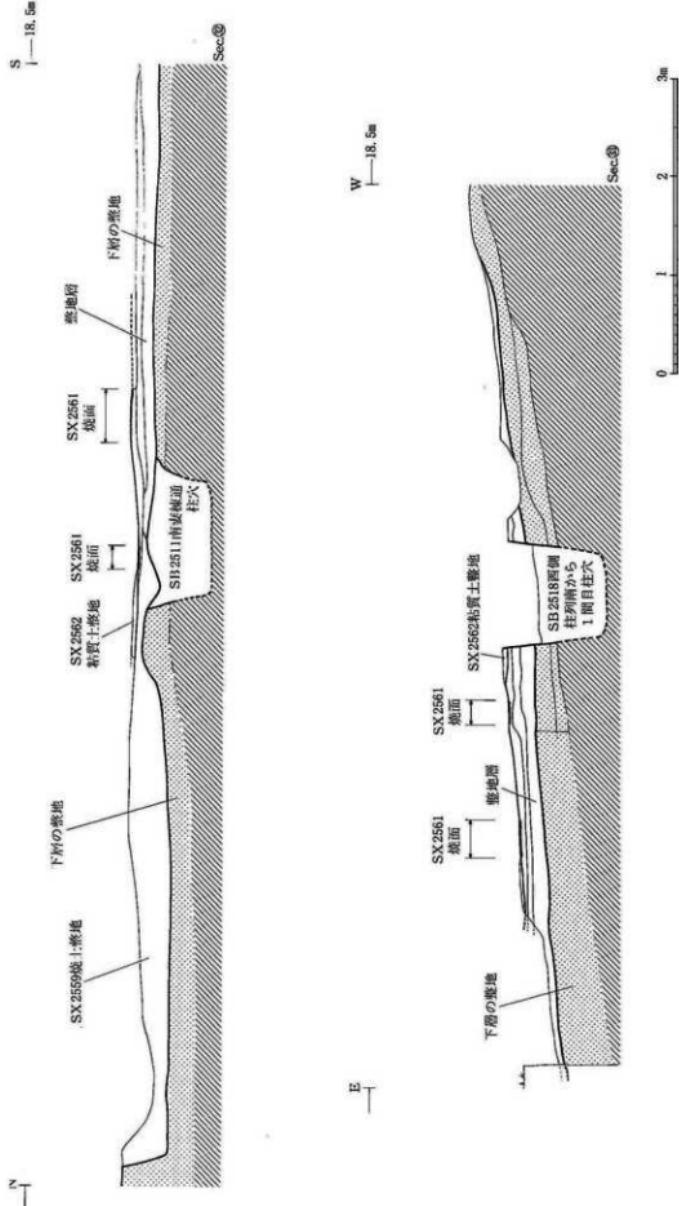
第12図 調査区北東部の遺構平面図 (1/100)



第13図 調査区東部中央の遺構平面図(1/100)及び断面図(1/50)



第14図 調査区南東部の造構平面図 (1/100)



第 15 図 調査区南東部の造構断面図 (1/50)

【他の遺構との重複】S B2510 建物跡より新しく、S B2514 建物跡、S A2533・2534 柱列跡、S K2548 土壙、S X2556 焼面より古い。

【概要】南北約9.4m、東西約5.4m、深さ30cm以上の土壙を掘削し、粒径5mm～5cmの焼土塊・炭片、明黄褐色粘質土ブロックを多量に含む褐色土で人為的に整地したものである。この焼土整地より新しい柱穴の壁面の観察によれば、下層には焼面があるとみられる。

【S X2558 焼土整地】(平面図: 第13・14図、断面図: 第13図、遺物: 第16図)

【位置】調査区東部の南寄り。

【他の遺構との重複】S B2511 建物跡、S X2557 焼面より新しく、S B2516・2517・2519 建物跡、S A2537 柱列跡、S K2482・2554 土壙より古い。

【概要】南北約4.1m、東西約3.1m、深さ約25cm以上の不整形の土壙を掘削し、粒径5mm～5cmの焼土塊・炭片、明黄褐色粘質土ブロックを多量に含む褐色土で人為的に整地したもので、スサ入りの焼け壁土片も含む。

【出土遺物】土師器甕、須恵器坏・甕、平瓦、丸瓦などの破片が少數出土した。須恵器坏にはヘラ切りで底径の大きなもの(13; 図版7-1)がある。時期のわかる平瓦は29点で、政庁第II期の平瓦が22点と多く、政庁第I期の平瓦は5点、政庁第III期の平瓦は2点と少ない。丸瓦には政庁第II期の刻印「田」Aの丸瓦 II B類が1点ある。

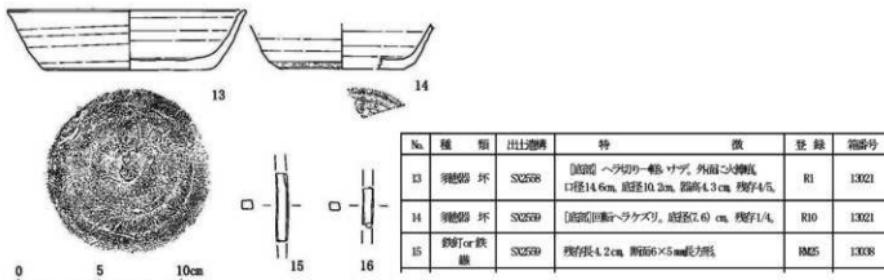
【S X2559 焼土整地】(平面図: 第14図、断面図: 第15図、遺物: 第16図)

【位置】調査区東部の南寄り。

【他の遺構との重複】S B2511 建物跡、S X2557 焼面より新しく、S B2518・2519 建物跡、S A2537 柱列跡、S X2561 焼面、S X2562 明黄褐色粘質土整地より古い。

【概要】南北約7.5m、東西5.0m以上、深さ約55cmの不整形の土壙を掘削し、粒径5mm～5cmの焼土塊・炭片、明黄褐色粘質土ブロックを多量に含む褐色土で人為的に整地したものである。

【出土遺物】非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・楕・蓋・甕、平瓦、丸瓦、鉄釘または鉄鏃(15・16)、スサ入りの焼けた土壁、漆紙の破片が少數出土した。須恵器坏には回転ヘラケズリ



第16図 SX2558・2559 焼土整地の出土遺物

で底径の大きなもの（14）がある。漆紙は10×5cmほどの断片2片で、文字は認められない。時期のわかる平瓦は56点で、政庁第Ⅱ期の平瓦が46点と多く、政庁第Ⅰ期の平瓦は4点、政庁第Ⅲ期の平瓦は6点と少ない。

【S X2485 焼土整地】（平面図：第14図）

第69次調査にてSK2485土壤として検出したものであるが、今回の調査によって、埋め土に多量の焼土塊や炭片が含まれている状況が確認できたため、S X2458焼土整地と改称する。

【位置】調査区東部の南寄り。

【他の遺構との重複】S X2564焼面より新しく、S B2519建物跡、S A2537・2538柱列跡より古い。

【概要】南北約5.0m、東西約2.6m、深さ約40cmの不整形の土壤を掘削し、粒径5mm～5cmの焼土塊・炭片、明黄褐色粘質土ブロックを多量に含む褐色土で人為的に整地したものである。

【出土遺物】非クロロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕、政庁第Ⅱ期の重圈文軒丸瓦241、平瓦、丸瓦の破片が少数出土した。須恵器坏はヘラ切りのもので、高台坏は回転ヘラケズリ後に付高台したものである。時期のわかる平瓦は28点で、政庁第Ⅱ期の平瓦が24点と多く、政庁第Ⅰ期の平瓦が3点と少ない。

【S X2562 粘質土整地】（平面図：第14図、断面図：第15図）

【位置】調査区東部の南寄り。

【他の遺構との重複】S B2511建物跡、S X2561焼面、S X2559焼土整地より新しく、S A2537柱列跡より古い。S B2518・2519建物跡の内部に位置し、これらとの新旧関係は不明である。

【概要】S B2518・2519建物内部に部分的に分布し、S X2561焼面の上を覆う厚さ約5cmの明黄褐色粘質土整地である。粒径約1mmの砂粒・ガラス粒を多く含み、暗褐色土ブロックをやや多く含む。

【出土遺物】ヘラ切りの須恵器坏、低い宝珠状つまみの須恵器蓋、政庁第Ⅱ期の平瓦、丸瓦の破片が少数出土した。

【S X2556 焼面】（平面図：第12図）

【位置】調査区東部の北寄り。

【他の遺構との重複】S X2555焼土整地より新しく、S B2514建物跡より古い。

【範囲】長軸約80cm、短軸約60cmの楕円形の範囲とその南側の長軸約3.5m、短軸約2.1mの不整形の範囲が堅く焼き締まり、赤く変色していた。

【S X2557 焼面】（平面図：第13・14図、断面図：第13図、写真：図版2-3）

【位置】調査区東部の南寄り。

【他の遺構との重複】S B2519建物跡、S A2537柱列跡、S X2558・2559焼土整地より古い。S B2511建物跡の内部に位置するが、新旧関係は不明である。

【概要】S B2519 北西隅柱穴の周囲にあり、長軸約 2.9m、短軸約 0.9m の範囲が堅く焼き縮まり、赤く変色していた。

【S X2561 焼面】(平面図：第 14 図、断面図：第 15 図、写真：図版 2-3)

【位置】調査区東部の南寄り。

【他の遺構との重複】S A2537 柱列跡、S X2562 黄色粘質土整地より古い。また、S X2559 焼土整地の南側には、この焼土整地より新しい褐色砂質土の整地層があり、S X2561 焼面はこの整地層よりも新しい。S B2518 建物跡の内部にあり、これと位置が重複するが、新旧関係は不明である。

【概要】長軸約 3.5m、短軸約 2.3m の不整形の範囲が堅く焼き縮まり、赤く変色していた。焼けの著しい箇所では約 1.5cm の厚さ、薄い箇所では 2~5mm の厚さで赤褐色に堅く焼き縮まる。残りの悪い箇所では暗赤褐色に変色していた。

【S X2564 焼面】(平面図：第 14 図)

【位置】調査区東部の南寄り。

【他の遺構との重複】S B2519 建物跡、S A2538 柱列跡、S X2560 焼土整地より古い。

【概要】南北約 2.1m、東西約 0.8m の範囲が堅く焼き縮まり、赤く変色していた。

2) 挖立式建物跡

【S B2509 建物跡】(平面図：第 12 図、写真：図版 4-1)

【位置】調査区東部の北寄り。

【柱間数・棟方向】桁行 3 間以上、梁行 2 間の南北棟である。

【他の遺構との重複】S B2512 建物跡より古い。

【検出状況】南妻、および南妻から 2 間目までの柱穴 7 個を表土下の地山面で検出した。建物北半部は調査区外にある。

【柱穴掘方】掘方は一辺 120~130cm の正方形、または長辺 130~135cm、短辺 90~100cm の長方形を基調とし、埋め土は黄褐色土である。

【柱痕跡】検出した 7 個の柱穴のうち、6 カ所で柱痕跡を検出した。そのうち 2 カ所は柱切取穴の底面付近で確認した。柱痕跡は径約 26cm の円形である。

【平面規模】桁行の柱間寸法は東側柱列で南から 2.88m、3.01m である。梁行総長は 4.73m で、柱間寸法は南妻で西から 2.30m、2.43m である。

【建物の方向】東側柱列でみると、北から東へ約 4° 傾む。

【出土遺物】柱切取穴から土師器壺・甕、須恵器壺・甕、政庁第 II 期の刻印「物」平瓦 II B 類、スサ入りの土壁などの破片が少數出土した。

【S B2510 建物跡】(平面図：第 12 図、断面図：第 23 図、写真：図版 4-2・3)

【位置】調査区東部の北寄り。

【柱間数・棟方向】桁行5間、梁行2間の南北棟である。

【他の遺構との重複】S X2555 焼土整地、S B2514・2515 建物跡、S K2548・2553 土壌より古い。S A2535 柱列跡、S I 2541 土壌と位置が重複するが、新旧関係は不明である。

【検出状況】北妻棟通り下と西側柱列の北から2間分の4個の柱穴を除く10個の柱穴をS X2555 焼土整地上面で検出した。

【柱穴掘方】掘方は長辺135～155cm、短辺95～115cmの長方形、または一辺100～115cmのほぼ正方形を基調とし、埋め土は黄褐色土である。

【柱痕跡】検出した10個の柱穴のうち、6カ所で柱痕跡を検出した。そのうち1カ所は柱切取穴の底面付近で確認した。柱痕跡は径約30cmの円形である。

【平面規模】桁行総長は東側柱列で約11.9mと推定され、柱間寸法は南から2.32m、2.59m、2.24m、2.31m、約2.4mである。梁行総長は南妻で5.96m、柱間寸法は約3.0mと推定される。

【建物の方向】東側柱列でみると、北から東へ約4°偏る。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【S B2511A・B建物跡】(平面図:第14図、断面図:第13・15図、遺物:第17図、写真:図版2-3, 5-1・2, 6-10)

【位置】調査区東部の南寄り。

【柱間数・棟方向】桁行5間、梁行2間の南北棟である。

【他の遺構との重複】S X2558・2559 焼土整地、S B2519 建物跡、S A2538 柱列跡、S K2482・2483・2554 土壌より古い。建物内部に位置するS X2557 焼面との新旧関係は不明である。

【建て替え】ほぼ同位置で建て替えられており、A→Bの2時期の建て替えがある。

【検出状況】14カ所すべての柱穴を検出したが、東側柱列は調査区外に一部かかるため、全形を検出していない。ほぼ同位置で建て替えられているため、S A2511Aについては柱痕跡を確認していないが、柱穴掘方、平面規模、方向はS B2511Bと同様とみられる。以下、残存状況の良いS B2511Bについておもに記述する。

< S B2511B 建物跡 >

【柱穴掘方】掘方は長辺120～150cm、短辺80～115cmの長方形を基調とする。埋め土はにぶい黄褐色土で、明黄褐色土ブロック、粒径1～2cmの岩片を不均一に多量に含み、焼土ブロックをまったく含まない。南妻棟通り下柱穴と南東隅柱穴の掘方上面には黄褐色～褐色の砂を主体とする整地層があり、その上をS X2559 焼土整地が覆う。また、南西隅柱穴の掘方上面にもこの整地層があり、その上をさらにS X2559 焼土整地と一連とみられる焼土整地が覆う。また、北西隅柱穴、西側柱列の北から1間目柱穴の掘方は土壤状のS X2558 焼土整地に覆われている。これら5カ所の柱穴のうち、南妻の3カ所は掘方掘り込み面である当時の地表面が良好に残されている。

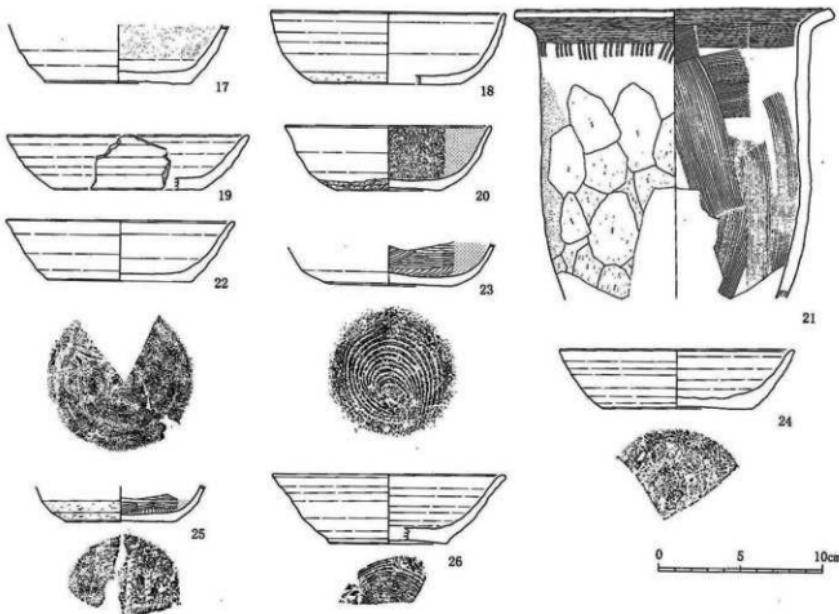
なお、S B2511B建物の掘方の直上を覆う整地層については、調査が部分的なため不明確な点が多

いが、S B 2111 建物内部とその周囲に分布しているとみられるため、S B 2111B 建物の造営に伴う土間の嵩上げ整地と現時点ではみておきたい。

【柱痕跡】 西側柱列の 6 カ所で柱痕跡を検出した。うち 3 カ所は柱切取穴の底面付近で検出されたが、当時の地表面とのレベル差を考慮すると、当時の地表面をあまり掘り込みずに柱を切り取ったとみられる。直径約 30cm の円形で、堆積土は黒褐色土で、焼土ブロック・炭片を含む。

【平面規模】 桁行総長は西側柱列で 11.90m、柱間寸法は北から 2.38m、2.42m、2.28m、2.38m、2.44m である。梁行総長は 6 m 前後とみられ、柱間寸法はほぼ 3 m と推定される。

【建物の方向】 西側柱列でみると、南北基準線とほぼ一致する。



No.	種類	出土場所・層位	特徴	測定	箱番号
17	須恵器 砕	S B 211B 柱切跡	底面へ切り。2 次加熱のため全斜等傾。底径 9.0cm。	R4	13019
18	須恵器 砕	S B 211B 柱切跡	底部へ下部断面回転へラケズリ。口径(14.4)cm、底径(9.0)cm、器高 4.3cm、残存 1/4。	R1	13019
19	須恵器 砕	S B 211B 技取穴	底面へラ切り一箇 サザ。口径(17.8)cm、底径(9.0)cm、器高 3.4cm。	R1	13019
20	土師器 砕	S B 211B 挖方	[底下へ]底面手持ちカケズリ。内面剥落、黒色處理。口径(12.6)cm、底径 6.4cm、器高 4.0cm、残存 2/3。	R3	13019
21	土師器 瓦	S B 2117 技取穴	非クロコ調窓。[口縁部]面ヨコナギ。 [底面外側へ]カケズリ、内面へラチナ。口径(19.0)cm、残存 1/4。	R1	13019
22	須恵器 砕	S B 2118 技取穴	底面へラ切り一箇 サザ。口径(14.0)cm、底径 8.8cm、器高 3.7cm、残存 2/3。	R3	13019
23	土師器 砕	S B 2119 柱切跡	底面回転切り無窓。全焼紅陶。内面剥落へラミガキ—黑色處理。底径 7.8cm、残存 3/4。	R1	13019
24	須恵器 砕	S B 2119 柱切跡	底面へラ切り一箇 サザ。口径(14.4)cm、底径 9.2cm、器高 3.6cm、残存 1/4。	R1	13019
25	土師器 砕	S B 2124 柱切跡	底部へ体面回転へラケズリ。内面横力向へラミガキ—黑色處理。底径 6.8cm、残存 1/2。	R1	13019
26	須恵器 砕	S B 2124 柱切跡	底面回転切り無窓。口径(14.2)cm、底径(7.8)cm、器高 4.2cm、残存 1/4。	R4	13019

第 17 図 調査区東部の建物跡・柱列跡の出土遺物

() 内の数値は復元値

【出土遺物】 柱抜取穴から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、政庁第II期の平瓦II B類aタイプ、丸瓦などの破片、柱痕跡から土師器坏・甕、須恵器坏、政庁第II期の平瓦II B類aタイプ、丸瓦などの破片が少数出土した。土師器坏・甕はいずれも非クロ調整のものである。また、柱痕跡出土の須恵器坏にはヘラ切りのもの（17）が1点、回転ヘラケズリのもの（18）が2点あり、いずれも底径が9.0cmと大きい。

【S B2512 建物跡】（平面図：第12図、写真：図版4-1）

【位置】 調査区東部の北寄り。

【柱間数・棟方向】 枠行3間以上、梁行2間の南北棟である。

【他の遺構との重複】 S B2513 建物跡より新しく、よりS B2509 建物跡古い。

【検出状況】 南妻、および南より3間目までの柱穴8個を表土下の地山面で検出した。

【柱穴掘方】 掘方は一辺55～100cmの方形で、埋め土は黄褐色土である。

【柱痕跡】 検出した8個の柱穴のうち、6カ所で柱痕跡を検出した。直径約25cmの円形である。

【平面規模】 枠行の柱間寸法は東側柱列でみると、南から1.88m、約2.1m、約2.1mである。梁行総長は南妻で4.18m、柱間寸法は西から1.94m、2.25mである。

【建物の方向】 東側柱列でみると、北から東へ約5°偏る。

【出土遺物】 柱抜取穴から須恵器坏破片が少数出土した。

【S B2513 建物跡】（平面図：第12図、写真：図版4-1）

【位置】 調査区東部の北寄り。

【柱間数・棟方向】 枠行2間以上、梁行2間の南北棟である。

【他の遺構との重複】 S B2512 建物跡より新しい。

【検出状況】 南妻、および南より1間目までの柱穴5個を表土下の地山面で検出した。

【柱穴掘方】 掘方は一辺55～80cmの方形で、埋め土は黄褐色土である。

【柱痕跡】 検出した5個の柱穴のすべてで検出した。うち2カ所は柱切取穴の底面付近で確認した。直径約21cmの円形である。

【平面規模】 枠行の柱間寸法は東側柱列でみると2.95mである。梁行総長は3.81mで、柱間寸法は西から1.96m、1.89mである。

【建物の方向】 東側柱列でみると、北から東へ約7°偏る。

【出土遺物】 柱抜取穴から土師器坏・甕、須恵器坏、政庁第II期の平瓦II B類、丸瓦などの破片、柱痕跡から須恵器坏破片が少数出土した。

【S B2514A・B 建物跡】（平面図：第12図、写真：図版4-2）

【位置】 調査区東部の北寄り。

【柱間数・棟方向】 枠行3間、梁行2間の南北棟である。

【他の遺構との重複】 S B 2510 建物跡、S A 2535 柱列跡、S X 2555 焼土整地、S X 2556 焼面より新しく、S A 2534 柱列跡より古い。

【建て替え】 ほぼ同位置で建て替えられており、A→Bの2時期の建て替えがある。

【検出状況】 S B 2514Bについて、10個すべての柱穴をS X 2555 焼土整地上面で検出した。S B 2514Aについては、東側柱列の南から1間目を除く9個の柱穴を検出した。ほぼ同位置で建て替えられているため、柱痕跡を確認していないが、柱穴掘方、平面規模、方向はS B 2514Bと同様とみられる。以下、残存状況の良いS B 2514Bについておもに記述する。

< S B 2514B 建物跡 >

【柱穴掘方】 掘方は一辺55~100cmの方形を基調とする。埋め土は焼土ブロックを多く含む褐色土である。

【柱痕跡】 検出した10個の柱穴のうち6カ所で柱痕跡を検出した。うち3カ所は柱切取穴の底面付近で検出した。直径約22cmの円形である。

【平面規模】 衍行総長は西側柱列で6.22m、柱間寸法は北から2.02m、2.07m、2.14mである。梁行総長は南妻で約5.1m、柱間寸法は約2.6mと推定される。

【建物の方向】 西側柱列でみると、北から東へ約3°偏る。

【出土遺物】 柱抜取穴から須恵器壺、政府第II期の平瓦II B類aタイプ、丸瓦、スサ入りの土壁などの破片が少数出土した。須恵器壺にはヘラ切りのものが1点ある。また、柱痕跡から土師器壺・甕、須恵器壺・甕、政府第II期の平瓦II B類、刻印「古」丸瓦、スサ入りの土壁などの破片が少数出土した。土師器壺はロクロ調整のもので、土師器甕にはロクロ調整のものと非ロクロ調整のものがある。須恵器壺にはヘラ切りのものが1点、回転ヘラケズリのものが1点ある。

< S B 2514A 建物跡 >

【柱穴掘方】 掘方は一辺70~120mの方形である。埋め土は焼土ブロックを多く含む褐色土である。

【出土遺物】 掘方埋め土からロクロ調整の土師器壺、須恵器壺・甕、政府第II期の平瓦II B類、丸瓦などの破片が少数出土した。

【S B 2515 建物跡】 (平面図: 第12図、遺物: 第17図、写真: 図版4-3)

【位置】 調査区東部の北寄り。

【柱間数・棟方向】 衍行5間、梁行2間の南北棟である。

【他の遺構との重複】 S B 2510 建物跡より新しい。S K 2553 土壙と位置が重複するが、新旧関係は不明である。

【検出状況】 北東隅を除く13個の柱穴を検出した。

【柱穴掘方】 掘方は一辺65~90cmまたは一辺105~125cmの方形である。埋め土は地山土を多量に含む褐色土である。

【柱痕跡】 検出した13個の柱穴のうち11カ所で柱痕跡を検出した。うち1カ所は柱切取穴の底面付近で検出した。直径約26cmの円形で、堆積土は褐色土である。

【平面規模】 衍行総長は西側柱列で約 9.0mと推定され、柱間寸法は北から 2.0m（推定）、1.71m、1.78m、1.70m、1.82mである。梁行総長は南側柱列で 4.55m、柱間寸法は西から 2.17m、2.38mである。

【建物の方向】 西側柱列でみると、北から東へ約 5° 傾る。

【出土遺物】 柱抜取穴から土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕、時期・型番不明の軒平瓦、政庁第II期の平瓦II B類aタイプ、丸瓦、スサ入りの土壁などの破片が少數出土した。このうち土師器坏はロクロ調整で、回転糸切り無調整のものが1点ある。土師器甕にはロクロ調整のものと非ロクロ調整のものとがある。また、須恵器坏にはヘラ切り後に軽くナデられたもの（19）が6点、回転糸切り後に手持ちヘラケズリされたものが1点ある。柱痕跡からは土師器坏・甕、須恵器坏、政庁第II期の平瓦II B類などの破片が少數出土した。

【S B2516A・B建物跡】（平面図：第13図、遺物：第17・18図、写真：図版2-2）

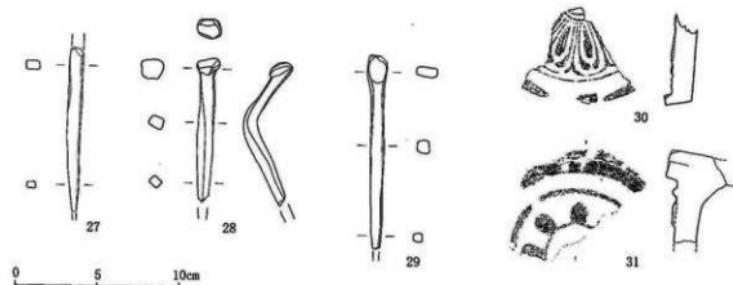
【位置】 調査区東部の中央。

【柱間数・棟方向】 衍行5間、梁行2間の南北棟である。

【他の遺構との重複】 S B2511 建物跡、S A2536 柱列跡、S X2558 焼土整地より新しく、S B2517 建物跡、S K2551・2552・2554 土壌より古い。

【建て替え】 ほぼ同位置で建て替えられており、A→Bの2時期の建て替えがある。

【検出状況】 S B2516Bについて、東側柱列の南から1間目柱穴を除く13個の柱穴をS X2558 焼土整地上面で検出した。S B2516Aについては、東側柱列の北から1・2・4間目と西側柱列の北から1間目を除く10個の柱穴を検出した。ほぼ同位置で建て替えられているため、柱痕跡を確認していないが、柱穴掘方、平面規模、方向はS B2516Bと同様とみられる。以下、残存状況の良いS B2516Bについておもに記述する。



No.	種類	出土場所・層位	特徴	登録	箱番号
27	釘或鉤頭	S B2516B抜取穴	頭部欠損、残存長10cm、断面8×5mm方形。	IM09	13038
28	釘頭	S B2516B抜取穴	頭13×12mm方形。釘足欠損、残存長8.9cm、断面9×8mm方形。体部く字形に曲がる。	IM3	13038
29	釘頭	S B2516B抜取穴	頭12×5mm菱形。釘足欠損、残存長11.8cm、断面8mm方形。	IM2	13038
30	軒丸瓦	S A2534抜取穴	12葉軒付蓮垂軒丸瓦JC311。政庁第III期、10当小破片。	I7	13028
31	軒丸瓦	S A2537抜取穴	8葉垂付軒丸瓦JC312。政庁第IV期、12当破片。	I5	13028

() 内の数値は復元値

第18図 調査区東部の建物跡・柱列跡の出土遺物(2)

< S B 2516B 建物跡 >

【柱穴掘方】掘方は一辺 65~100cm の方形で、埋め土は地山ブロックを多量に含む褐色土である。

【柱痕跡】検出した 13 個の柱穴のうち 12 カ所で柱痕跡を検出した。うち 2 カ所は柱切取穴の底面付近で検出した。直径約 24cm の円形で、堆積土は黒褐色土である。

【平面規模】桁行総長は東側柱列で 10.68m、柱間寸法は北から 2.06m、2.19m、2.11m、4.22m（2 間分）である。梁行総長は南妻で 5.02m、柱間寸法は西から 2.48m、2.54m である。

【建物の方向】東側柱列でみると、北から東へ約 2° 傾る。

【出土遺物】掘方埋め土からロクロ調整で手持ちヘラケズリの土師器壺（20；図版 8-1）、須恵器甕、丸瓦の破片、漆紙小断箇、抜取穴から鉄釘または鉄鎌（27）の破片、柱痕跡から回転ヘラケズリと手持ちヘラケズリの土師器壺、土師器蓋・甕、ヘラ切りの須恵器壺、須恵器蓋・甕・壺、政府第 I 期の二重弧文軒平瓦 511-c タイプ、政府第 I 期～第 II 期の平瓦、刻印「田」の丸瓦などの破片が少數出土した。

< S B 2516A 建物跡 >

【出土遺物】柱抜取穴から須恵器甕、丸瓦などの破片、柱痕跡から非ロクロ調整の土師器甕、政府第 II 期の平瓦 II B 類などの破片が少數出土した。

【S B 2517 建物跡】（平面図：第 13 図、遺物：第 17 図、写真：図版 2-2）

【位置】調査区東部の中央。

【柱間数・棟方向】桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟である。

【他の遺構との重複】S B 2511・2516 建物跡、S X 2558 烧土整地より新しく、S K 2550・2551・2552・2554 土壙より古い。

【検出状況】S X 2558 烧土整地上面で、10 カ所すべての柱穴を検出した。

【柱穴掘方】掘方は一辺 60~90cm の方形で、埋め土は地山ブロックを多量に含む褐色粘質土である。

【柱痕跡】10 カ所の柱穴のうち 6 カ所で柱痕跡を検出した。うち 3 カ所は柱切取穴の底面付近で検出した。直径約 22cm の円形で、堆積土は黒褐色土である。

【平面規模】桁行総長は西側柱列で約 7.9m と推定され、柱間寸法は北から約 2.4m、2.95m、2.54m である。梁行総長は北妻で約 4.8m と推定され、柱間寸法は西から約 2.5m、2.34m である。

【建物の方向】西側柱列でみると、北から東へ約 2° 傾る。

【出土遺物】柱抜取穴から非ロクロ調整の土師器甕（21）、須恵器壺・蓋・甕、政府第 II 期の平瓦 II B 類 a タイプ、丸瓦、木舞痕のあるスサ入りの土壁（図版 9-11）などの破片、柱痕跡から須恵器壺破片が少數出土した。このうち須恵器壺には回転ヘラケズリとヘラ切りのものが各 1 点ある。

【S B 2518 建物跡】（平面図：第 14 図、断面図：第 15 図、遺物：第 17・18 図、写真：図版 2-3, 5-1・2）

【位置】調査区東部の南寄り。

【柱間数・棟方向】桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟である。

【他の遺構との重複】 S B 2511 建物跡、S X 2559 焼土整地より新しく、S B 2519 建物跡、S A 2538 柱列跡、S K 2518 土壌より古い。建物内部に位置する S X 2561 焼面との新旧関係は不明である。

【検出状況】 S X 2559 焼土整地上面で、10 カ所すべての柱穴を検出したが、東側柱列は調査区外に一部かかるため全形を検出していない。

【柱穴掘方】 掘方は一辺 105~140cm の方形で、埋め土は焼土ブロック・炭片・地山ブロックを多く含む褐色土である。

【柱痕跡】 10 カ所の柱穴のうち 6 カ所で柱痕跡を検出した。直径約 28cm の円形で、堆積土は黒褐色土である。

【平面規模】 衍行総長は西側柱列で 6.49m、柱間寸法は北から 2.17m、2.12m、2.20m である。梁行総長は北妻で約 4.8m と推定され、柱間寸法は西から 2.66m、約 2.2m である。

【建物の方向】 西側柱列でみると、北から東へ約 3° 傾る。

【出土遺物】 掘方埋め土から土師器甕、須恵器坏、政庁第 II 期の平瓦 II B 類 a タイプ、丸瓦などの破片、柱抜取穴から土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・蓋・甕・長頸壺、政庁第 II 期の平瓦 II B 類 a タイプ、丸瓦、スサ入りの土壁、鉄釘（28・29）などの破片、柱痕跡から土師器甕、政庁第 II 期の平瓦 II B 類 a タイプ、丸瓦などの破片が少数出土した。抜取穴出土の土師器坏には非ロクロ調整の有段坏が 1 点、ロクロ調整でヘラケズリされたものが 3 点ある。また、抜取穴出土の須恵器坏にはヘラ切りのもの（22）が 5 点、須恵器高台坏には回転糸切り後に付高台されたものが 1 点ある。

【S B 2519 建物跡】 (平面図：第 14 図、写真：図版 2-3)

【位置】 調査区東部の南寄り。

【柱間数・棟方向】 衍行 5 間の南北棟で、梁行は 2 間以上である。

【他の遺構との重複】 S B 2511・2518 建物跡、S X 2559 焼土整地、S X 2557 焼面より新しく、S A 2537 柱列跡より古い。建物内部に位置する S X 2561 焼面との新旧関係は不明である。

【検出状況】 東側柱列は調査区外にあり、東側柱列 5 個を除く 9 個の柱穴を検出した。西側柱列は新しい S A 2537 柱列跡に大きく壊され、柱痕跡の位置を確定できなかつたため、平面規模・方向は明らかにできなかつた。

【柱穴掘方】 掘方は一辺 60~110cm の方形で、埋め土は黄褐色土である。

【柱痕跡】 検出した 9 カ所の柱穴のうち北妻棟通り下柱穴で直径 31cm の柱痕跡を検出した。

【出土遺物】 柱抜取穴から土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕、政庁第 III 期の平瓦 II B 類、丸瓦、スサ入りの土壁などの破片が少数出土した。土師器坏はロクロ調整のもので、須恵器坏にはヘラ切りのものが 2 点、須恵器蓋には宝珠状つまみのものが 1 点ある。柱痕跡からは政庁第 II 期の平瓦 II B 類 a タイプ、丸瓦などの破片が少数出土した。

3) 柱列跡

【S A 2532 柱列跡】 (平面図：第 12 図、遺物：第 17 図)

【位置】調査区東部の北寄り。

【柱間数】南北8間以上。

【検出状況】搅乱で壊されている北から1間目柱穴を除く8個の柱穴を地山面で検出した。南から3間目の柱穴で新旧2時期の柱穴があり、この柱穴を境に北側と南側の柱列に分けられる可能性もある。

【柱穴掘方】掘方は一辺50~90cmの方形で、埋め土は黄褐色土である。

【柱痕跡】検出した8個の柱穴のうち5カ所で検出した。うち2カ所は柱切取穴の底面付近で確認した。柱痕跡は直径約23cmの円形である。

【平面規模】検出総長約21.5m、柱間寸法は北から約5.4m(推定2間分)、約2.7m、約2.7m、2.67m、2.74m、約2.8m、約2.6mである。

【柱列の方向】北から東へ約3°偏る。

【出土遺物】柱抜取穴から須恵器坏、政府第II期の平瓦II B類、丸瓦などの破片、柱痕跡からロクロ調整の土師器坏、須恵器坏、平瓦、丸瓦の破片が少数出土した。このうち土師器坏には回転糸切り無調整のもの(23)が1点、回転糸切り後に手持ちヘラケズリされたものが2点ある。

【S A2533 柱列跡】(平面図: 第12図、写真: 図版4-2)

【位置】調査区東部の北寄り。

【柱間数】南北3間。

【他の遺構との重複】S B2514建物跡、S X2555焼土整地より新しく、S A2534柱列跡より古い。

【検出状況】S X2555焼土整地上面で4個の柱穴を検出した。

【柱穴掘方】掘方は一辆85~105cmの方形で、埋め土は焼土ブロック・炭片を多量に含む褐色砂質土である。

【柱痕跡】北端の柱穴で、直径23cmで円形の柱痕跡を検出した。

【平面規模】総長約6.5m、柱間寸法は約2.0~2.3mと推定される。

【柱列の方向】南北基準線とほぼ一致すると推定される。

【出土遺物】掘方埋め土から土師器坏・甕、須恵器坏・圜脚円面硯(図版9-16)、政府第II期の平瓦II B類aタイプ、丸瓦、スサ入りの土壁などの破片が少数出土した。このうち土師器坏にはロクロ調整で、回転ヘラケズリのものが1点、須恵器坏にはヘラ切りのものが1点ある。柱痕跡からはロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・双耳坏・蓋・甕・壺、政府第II期の平瓦II B類、丸瓦の破片が少数出土した。

【S A2534 柱列跡】(平面図: 第12図、遺物: 第17・18図、写真: 図版4-2)

【位置】調査区東部の北寄り。

【柱間数】南北2間。

【他の遺構との重複】S B2514建物跡、S A2533・2535柱列跡、S X2555焼土整地より新しい。

【検出状況】S X2555 烧土整地上面と地山面で3個の柱穴を検出した。

【柱穴掘方】掘方は一辺75~110cmの方形で、埋め土は黒褐色土である。

【柱痕跡】南端の柱穴で、直径27cmで円形の柱痕跡を検出した。

【平面規模】総長約5.6mと推定される。

【柱列の方向】北から東へ約3°偏ると推定される。

【出土遺物】柱抜取穴から土師器坏、須恵器坏・蓋・甕、政庁第III期の細弁蓮花文軒丸瓦311(30)、政庁第II期の平瓦II B類、丸瓦、木舞痕のあるスサ入りの土壁(図版9-12)などの破片が少数出土した。土師器坏はいずれもロクロ調整で、回転糸切り無調整のもの、回転糸切り後に手持ちヘラケズリされたものが各1点ある。須恵器坏にはヘラ切りのものが1点ある。また、柱痕跡からは土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕・壺、政庁第II期の平瓦II B類aタイプ、政庁第III期の平瓦II B類、丸瓦、スサ入りの土壁などの破片が少数出土した。土師器坏はいずれもロクロ調整で、回転ヘラケズリで内面横ミガキのもの(25)、回転糸切り後に体下部手持ちヘラケズリされたものが各1点、ヘラケズリのものが2点ある。須恵器坏には回転糸切り無調整のもの(26)が3点、ヘラ切り後に手持ちヘラケズリされたもの、手持ちヘラケズリのもの、ヘラ切りのものが各1点ある。

【S A2535 柱列跡】(平面図:第12図、断面図:第23図、遺物:第17図)

【位置】調査区東部の北寄り。

【柱間数】南北3間で、南端から西へ2間、L字状に曲がる。

【他の遺構との重複】S B2514建物跡、S A2534柱列跡、S K2548土壌より古い。

【検出状況】6個の柱穴を検出した。南部では抜取穴が大きく入り、北部では新しいS B2514建物跡で大きく壊されているため、柱痕跡は確認していない。

【柱穴掘方】掘方は一辺60~100cmの方形で、埋め土は黄褐色土である。

【出土遺物】抜取穴から丸瓦の破片、柱痕跡から土師器坏、須恵器坏・高台坏・甕、政庁第II期の平瓦II B類aタイプ、丸瓦などの破片が少数出土した。このうち土師器坏にはロクロ調整で底部がヘラケズリ、内面が横ミガキされているもの、須恵器坏にはヘラ切り後に軽くナデられたもの(24)が各1点ある。

【S A2536 柱列跡】(平面図:第13図、断面図:第13図、写真:図版2-2)

【位置】調査区東部の中央。

【柱間数】東西6間と推定される。

【他の遺構との重複】S B2516建物跡、S K2549・2551土壌より古い。

【検出状況】東から1・2・3間目の柱穴はS B2516建物跡北妻柱穴と完全に重複しているため、検出していない。それ以外の4個の柱穴を地山面で検出し、それぞれで柱痕跡を確認した。

【柱穴掘方】掘方は一辺65~95cmの方形で、深さは西端柱穴で深さ約45cmある。埋め土は地山粒を少量含む褐色土と地山粒を多く含む灰褐色土の互層である。

【柱痕跡】 柱痕跡は直径約25cmの円形で、堆積土は炭片を含む暗褐色土である。

【平面規模】 縦長13.53m、柱間寸法は西から1.92m、1.87m、9.75m（4間分）である。

【柱列の方向】 東西基準線とほぼ一致する。

【出土遺物】 柱痕跡から土師器壺・甕、須恵器壺・甕、平瓦II B類、丸瓦の破片が少數出土した。土師器はいずれもロクロ調整のもので、須恵器壺にはヘラ切りのものが1点ある。

【S A 2537 柱列跡】（平面図：第3・14図、遺物：第18図、写真：図版2-3）

【位置】 調査区東部の南寄り。

【柱間数】 南北7間以上。

【他の遺構との重複】 S B 2511・2518・2519 建物跡、S X 2558・2559・2485 焼土整地、S X 2557 焼面より新しく、S A 2538・2539 柱列跡、S K 2483 土壙より古い。

【検出状況】 S X 2558・2559・2485 焼土整地などの整地層上面で、8個の柱穴を検出した。

【柱穴掘方】 掘方は一辺90~120cmの方形で、埋め土は焼土ブロック・炭片を多く含む褐色土である。

【柱痕跡】 柱切取穴、抜取穴が大きく入り、4カ所で柱痕跡を柱切取穴の底面付近で検出した。直径約30cmの円形で、堆積土は黒褐色土である。

【平面規模】 縦長約19.3mと推定され、柱間寸法は北から約2.8m、約3.5m、2.76m、3.20m、約3.4m、約3.6m、約1.9mである。

【柱列の方向】 北から東へ約5°偏る。

【出土遺物】 柱抜取穴から土師器壺・甕・甕、須恵器壺・甕、政府第IV期の齒車状文軒丸瓦427（31；図版9-1）、政府第II期の平瓦II B類aタイプ、丸瓦などの破片が少數出土した。土師器壺はいずれもロクロ調整で、回転糸切り無調整のもの、ヘラケズリのもの、回転糸切り後にヘラケズリされたものが各1点ある。土師器甕には非ロクロ調整で、両面がヘラミガキ後に両面黒色処理されたものが1点ある。須恵器壺にはヘラ切りのもの、回転糸切り無調整のものが各1点ある。また、柱痕跡からは土師器壺・甕、須恵器壺、政府第II期の平瓦II B類aタイプ、丸瓦などの破片が少數出土した。土師器壺はいずれもロクロ調整で、手持ちヘラケズリのものが4点、回転糸切り後にヘラケズリされたものが各1点ある。須恵器壺には回転糸切り無調整のものが1点ある。

【S A 2538 柱列跡】（平面図：第14図）

【位置】 調査区南東部南端。

【柱間数】 東西1間以上。

【重複】 S B 2519 建物跡、S A 2537 柱列跡より新しい。

【検出状況】 2個の柱穴を検出し、西から1間目柱穴で柱痕跡を確認した。

【柱穴掘方】 一辺70~105cmの方形で、埋め土は褐色土である。

【柱痕跡】 直径24cmの円形で、堆積土は黒褐色土である。

【平面規模】柱間は約 1.8m である。

【柱列の方向】東西基準線とほぼ一致するとみられる。

【出土遺物】掘方埋め土から平瓦 II B 類、丸瓦の破片、柱抜取穴から土師器坏・甕、須恵器坏・皿、政庁第 II 期の刻印「伊」丸瓦などの破片が少数出土した。土師器坏にはロクロ調整のもの、須恵器坏には回転糸切りのものがある。

【S A 2539 柱列跡】(平面図：第 3 図)

【位置】調査区南東部南端。

【柱間数】南北 1 間以上。

【重複】S A 2537 柱列跡より新しい。

【検出状況】2 個の柱穴を検出し、いずれの柱穴でも柱痕跡を確認した。

【柱穴掘方】一辺 80~100cm の方形で、埋め土は褐色土である。

【柱痕跡】直径 26cm の円形で、堆積土は黒褐色土である。

【平面規模】柱間は約 2.16m である。

【柱列の方向】南北基準線とほぼ一致するとみられる。

4) 土壌

【S K 2481 土壌】(平面図：第 13 図、遺物：第 22 図、写真：図版 2-2)

【位置】調査区東部の中央。第 69 次調査にて一部検出したものである。

【他の遺構との重複】S B 2516・2517 建物跡、S K 2481・2482・2549・2550 土壌より新しい。

【形態・規模】東西約 10.7m、南北約 2.5m の不整形で、深さ約 55cm ある。

【堆積層】3 層に分かれ、1 層が暗褐色土、2 層が暗褐色土に黄褐色土が混じる土層、3 層が暗い褐色土である。

【出土遺物】土師器坏・甕、須恵器坏・甕、政庁第 II 期の单弧文軒平瓦 640、政庁第 I 期～第 III 期の平瓦、丸瓦の破片、鉄滓が少数出土した。土師器はロクロ調整で、坏には回転糸切り後に手持ちヘラケズリされたもの、手持ちヘラケズリのもの、回転糸切り無調整のもの (70；図版 8-10) がある。須恵器坏にはヘラ切りのものがある。

【S K 2548 土壌】(平面図：第 12 図、断面図：第 23 図、遺物：第 19 図、写真：図版 4-2)

【位置】調査区東部の北寄り。

【他の遺構との重複】S B 2510 建物跡、S A 2535 柱列跡、S D 2541 瓦組暗渠、S X 2555 焼土整地より新しい。

【形態・規模】平面形は南北約 7.0m、東西約 3.7m の不整形円形で、深さは約 40cm である。

【堆積層】8 層に分かれ、人為的に埋められている。1 層は炭片・地山粒を含むにぶい黄褐色土、2 層は地山粒を多量に含む黒褐色土、3 層は地山粒を多量に含むにぶい黄褐色土や褐色土、4 層は地山

粒を多量に含むにぶい黄褐色土、5層は褐色砂質土とにぶい褐色土が不均一に混じる土層、6層は炭片を多く含む黒褐色粘質土、7層はにぶい黄褐色粘質土、8層は地山粒をやや多く含む褐色土である。

【出土遺物】各層から土師器・須恵器、平瓦、丸瓦、スサ入りの土壁の破片が少數出土した。土師器はいずれもロクロ調整で、坏・高台坏・甕がある。土師器坏は摩滅したものが多いが、調整のわかるものは手持ちヘラケズリまたは回転ヘラケズリ（32；図版8-2）されており、回転糸切り無調整のものは認められない。須恵器には坏（33～39）、盤（40）、蓋・甕・壺がある。須恵器坏の多くはヘラ切り（33～35；図版7-3・4）で、他に回転糸切り無調整（38・39；図版7-6）、回転糸切り後の手持ちヘラケズリ（37；図版7-5）、手持ちヘラケズリ、回転ヘラケズリのものが少数ある。また、須恵器坏には底部に「大」カと墨書されたもの（39；図版8-13）、内面底部に墨が全体的に付着し、研磨痕が認められず、墨溜容器に転用されたもの（35；図版7-4）が各1点ある。瓦は政庁第I期～第II期の平瓦が各層より出土しているが、1・3～5層から政庁第III期の平瓦II B類、3層から政庁第IV期の細弁蓮花文軒丸瓦 310B（41；図版9-2）と平瓦II C類が少數出土している。他には2層から鉄滓が1点、1層から猿投窯製品の縁釉陶器椀口縁部破片が1点、手持ち砥石が1点、鉄釘または鉄鎌の破片（42・43）が2点出土している。

【S K2549 土壙】（平面図：第13図、写真：図版2-2）

【位置】調査区東部の中央。

【他の遺構との重複】S A2536 柱列跡、S K2551 土壙より新しく、S K25522 土壙より古い。

【形態・規模】平面形は南北約 5.3m、東西約 2.5m の不整梢円形で、深さは約 30cm である。

【堆積層】5層に分かれ、人為的に埋められている。1層は炭片・地山粒を少量含む黒褐色粘質土、2層は地山粒をやや多く含む灰黄褐色土、3層は地山粒を多く含むにぶい黄褐色土、4層は炭片を多く含む褐灰色土、5層は炭片を少量含む褐色粘質土である。

【出土遺物】4・3・1層から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、平瓦、丸瓦の破片が少數出土した。土師器坏はいずれもロクロ調整で、手持ちヘラケズリのものがある。須恵器坏はヘラ切りである。

【S K2550 土壙】（平面図：第13図）

【位置】調査区東部の中央。

【他の遺構との重複】S B2517 建物跡より新しく、S K2551・2552 土壙より古い。

【形態・規模】南北約 1.2m、東西約 1.0m の不整形で、深さは約 15cm ある。

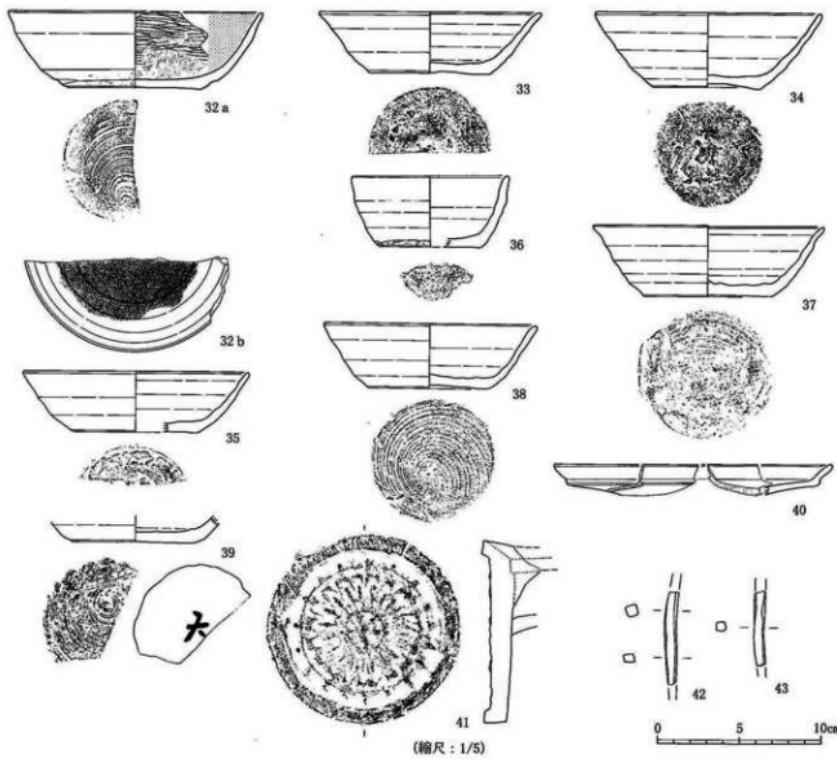
【堆積層】褐灰色土ブロック、炭片、地山粒を少量含む褐色砂質土である。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【S K2551 土壙】（平面図：第13図、遺物：第20～22図、写真：図版2-2）

【位置】調査区東部の中央。

【他の遺構との重複】S B2516・2517 建物跡、S A2536 柱列跡、S K2550 土壙より新しく、S K2549



No.	種類	層位	特徴	登錄	箱番号
32	土師器 壺	6層	底部へ体下部回転深切り一鉢形へラケズリ。[内面]横方向へマギヤー黒色処理。口径(15.6)cm 底径(8.2)cm。器高4.7cm。残存1/3。底部外縁に文字等印埋施あり。	R1	13021
33	須恵器 壺	5層	[底面]ヘラ切り一鉢形 ナヅ。口径(13.6)cm 底径(7.4)cm。器高3.7cm。残存1/2。	R5	13021
34	須恵器 壺	4層	[底面]ヘラ切り一鉢形 ナヅ。口径(13.8)cm 底径6.4cm。器高4.6cm。残存1/2。	R12	13021
35	須恵器 壺	4層	底部へ全周面に墨着付するが、研磨削りは認められぬ。墨留深部に墨痕。[底面]ヘラ切り一鉢形 ナヅ。口径(13.8)cm 底径(7.6)cm。器高3.7cm。残存1/3。	R9	13021
36	須恵器 壺	5層	[底面]体下部手持ち一鉢形 ナヅ。口径(9.6)cm 底径6.6cm。器高4.3cm。残存1/4。	R4	13021
37	須恵器 壺	4層	[底面]回転深切り一鉢形 ナヅ。口径14.2cm 底径8.0cm。器高4.4cm。残存3/4。	R8	13021
38	須恵器 壺	4層	[底面]回転深切り無墨跡。口径(13.0)cm 底径7.4cm。器高4.0cm。	R7	13021
39	須恵器 壺	4層	[底面]回転深切り無墨跡。墨書「大」力。口径(7.4)cm 残存1/2。	R10	13021
40	軽井戸	4層	須恵器蓋を表す。内面に墨痕。	R11	13021
41	軽井戸瓦	3層	20 築新石器時代瓦310B。政府第IV期。瓦当破片。外縁に珠文 中央に1-5の円印墨子	R29	13028
42	鉄釘 or 鉄鏃	1層	残存長6cm。断面7mm方形。	R40	13028
43	鉄釘 or 鉄鏃	1層	残存長5cm。断面6mm方形。	R41	13028

第19図 SK2548 土壤の出土遺物

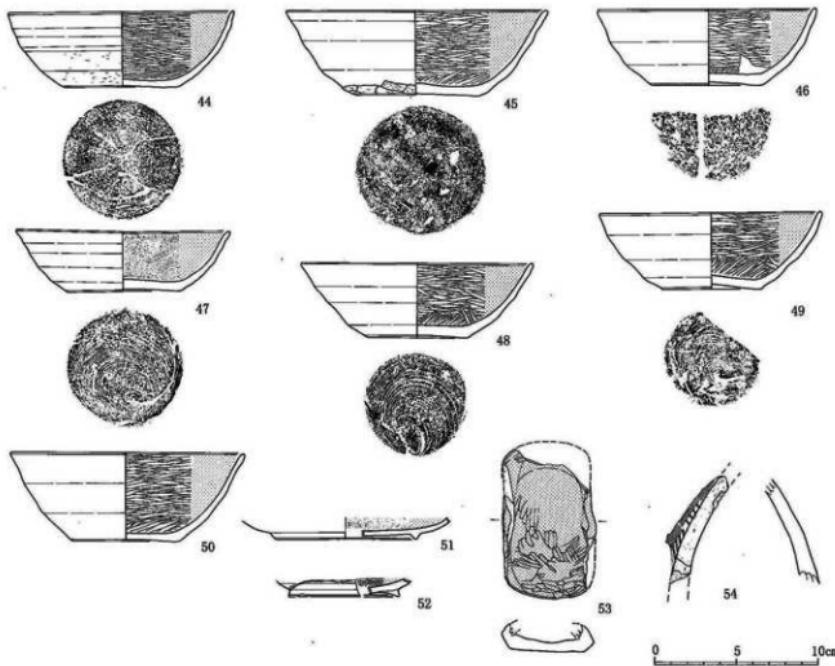
()内の数値は復元値

土壤より古い。

【形態・規模】 東西約6.1m、南北約4.7mの不整形で、深さは約40cmである。

【堆積層】 3層に分けられ、1層が褐色土、2層が炭片・地山粒を少量含む褐灰色土、3層が炭片を多量に含む黒褐色土で、下部がやや粘土化している。

【出土遺物】 多量の土器・瓦が各層から出土した（表3-1）。土器には土師器、須恵器、須恵系土器、灰釉陶器、綠釉陶器がある。土器の出土個体数は3層が136点、2層が104点、1層が124点、計364



No.	種類	層位	特徴	標本	箱番号
44	土師器 瓢	1層	圓底一部中腹斜面にケズリ。内面井桁状ヘラミガタ・褐色の施 口径13.8cm、底径7.0cm、厚さ4.1cm、残存3/4。	819	13023
45	土師器 瓢	2層	圓底斜面にケズリ。内面井桁状ヘラミガタ・褐色の施 口径10.0cm、底径7.6cm、厚さ5.1cm、残存2/3。	825	13023
46	土師器 瓢	2層	圓底斜面にケズリ。内面横丸肋ヘラミガタ・褐色の施 口径13.0cm、底径6.8cm、厚さ4.7cm、残存2/3。	829	13023
47	土師器 瓢	1層	圓底斜面にケズリ。内面横丸肋ヘラミガタ・褐色の施 口径13.1cm、底径7.0cm、厚さ3.8cm、残存3/4。	864	13026
48	土師器 瓢	2層	圓底斜面にケズリ。内面井桁状ヘラミガタ・褐色の施 口径14.2cm、底径6.2cm、厚さ4.6cm、残存4/5。	823	13023
49	土師器 瓢	1層	圓底斜面にケズリ。内面井桁状ヘラミガタ・褐色の施 口径13.6cm、底径6.0cm、厚さ4.2cm、残存1/3。	836	13026
50	土師器 瓢	2層	圓底斜面にケズリ。内面井桁状ヘラミガタ・褐色の施 口径14.3cm、底径6.8cm、厚さ5.4cm、残存4/5。	835	13023
51	土師器 高台碗	1層	高台高3.0cm白面の施釉。内面井桁状ヘラミガタ・褐色の施 口径8.0cm、底径6.8cm、厚さ2.3cm。	854	13023
52	土師器 高台碗	3層	高台高3.0cm白面の施釉。内面井桁状ヘラミガタ・褐色の施 口径8.0cm、底径6.8cm、厚さ2.3cm。	820	13022
53	土師器 両面	1層	両面斜面にケズリ。両面ロクロナブレ・ヘラミガタ・褐色の施 口径4.1cm、厚さ3/4。	890	13026
54	焼きカマド	3層	土師器。破片。外面可憐目ナゲテ。内面ヘラケズリ。厚さ8~11mm。	823	13022

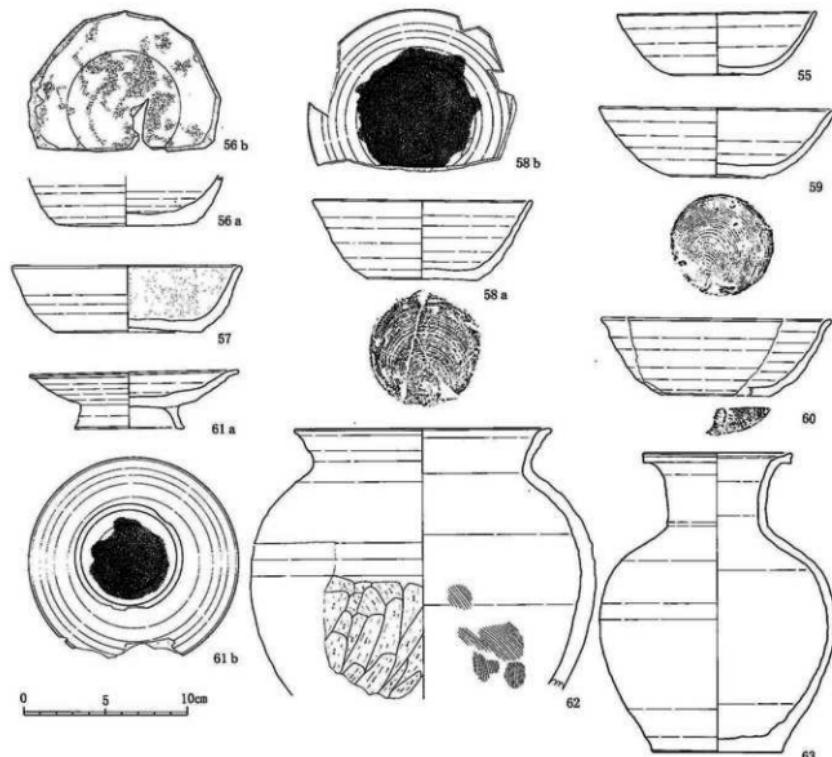
() 内の数値は復元値

第20図 SK2551 土壌の出土遺物 (1)

点と多い。各層とも土器の約 82~86% (平均 84%) が土師器で、須恵器が次いで多く、須恵系土器、灰釉陶器、綠釉陶器は少ない。

土師器には坏 (44~50; 図版 8-3~9)・高台坏 (51・52)・高台皿・耳皿 (53; 図版 8-12)・甕・置きカマド (54) があり、土師器坏が各層とも土器全体の約 73~80% (平均 77%) を占めている。

土師器坏では各層とも様相が類似しており、底部切り離し後に手持ちヘラケズリ (45・46) または



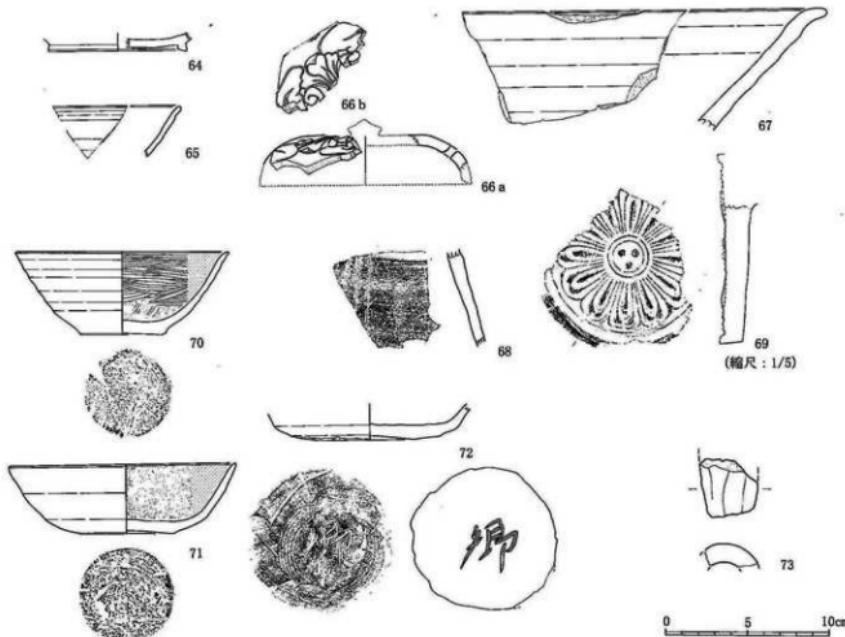
No.	種類	層	特徴	個数	箱番号
55	須恵系土器 壊	2層	底部切り離し無理数の破壊片。口径12.0cm、底径6.4cm、高さ3.8cm、残存72%。	100	13023
56	須恵器 壊	3層	底端へアーチナード、底径8.6cm、底端内面に磨擦跡有り。	103	13022
57	須恵器 壊	2層	底部切り離し、2次焼成で底付に2回焼。口径 8.0cm、底径 9.0cm、高さ 1.1cm、残存73%。	108	13023
58	須恵器 壊	3層	底部切り離し無理数。口径11.4cm、底径6.6cm、高さ1.4cm。	107	13022
59	須恵器 壊	2層	底部切り離し無理数。口径14.2cm、底径6.0cm、高さ4.3cm、残存72%。	104	13023
60	須恵器 壊	1層	底部切り離し無理数。口径12.4cm、底径5.0cm、高さ4.7cm、残存1%。	101	13023
61	須恵器 高台坏	3層	口径12.8cm、高さ6.6cm、底径3.5cm(直付型)。	104	13022
62	須恵器 甕	3層	口径外径12.4cm、内径ヘラケズリ、底付ヘラケズリ、残存2%。	106	13022
63	須恵器 甕	2層	底部切り離し無理数。残存1%。	105	13023

第 21 図 SK2551 土壌の出土遺物（2）

() 内の数値は復元値

回転ヘラケズリ (44) の再調整がなされるものと、再調整されない回転糸切り無調整のもの (47~49) がほぼ同数ある (表 3-2)。底部内面のミガキは放射状のものが主体を占めるが、横方向のものもやや多く、井桁状のものがごく少ない (表 3-3)。

須恵器には坏 (56~60)・高台坏 (61)・高台皿・蓋・甕 (62)・壺 (63; 図版 7-11)・円面硯 (68) がある。須恵器坏には各層とも回転糸切り無調整のもの (58・59; 図版 7-8)、ヘラ切りのもの (56・57) がほぼ同数ある (表 3-2)。坏 (56) は内面全面に漆皮膜が付着し、漆バレットに再利用されてい



No.	種類	出土地點・層位	特徴	厚さ	番号
64	灰陶器	SK2551 土壤-3層	角削り、内面直壁状、縦溝有り、底径14高さ8.4cm、残存1/4。	1.8	R38 13022
65	灰陶器 壁	SK2551 土壤-3層	内面直壁状のつぶれ角削り、底径9.0高さ8.4cm。	1.8	R39 13022
66	青銅鏡 香炉	SK2551 土壤-2層	縦溝有り、底径10.0、器表有り、縫合線有り、透視圖。	1.8	R24 13021
67	須恵器 壁	SK2551 土壤-3層	口縫合・内側縫合、両面クロナフ、内面直壁状、底径12.4高さ10.5、縫合部有り、縫合部ガタ有り。	1.9	R38 13022
68	円面硯	SK2551 土壤-1層	研磨面、底面破損、縫合部有り、縫合部ガタ有り。	1.8	R82 13035
69	軒丸瓦	SK2551 土壤-1層	12.5mm厚板瓦状形状、内面直壁状、瓦当有り。	1.8	R86 13038
70	土鍋器 壁	SK2551 土壤-1層	直筋縫合切り縫合部、内面横筋縫合、一側色剥離、口径13.0cm、底径5.3cm、高さ5.1cm、厚さ1.3cm。	1.2	R2 13021
71	土鍋器 壺	SK2551 土壤-1層	直筋縫合切り縫合部、内面黒色剥離、内面と外側縫合部有り、口径11.8cm、底径5.8cm、高さ4.3cm、厚さ1.3cm。	1.0	R3 13021
72	須恵器 壺	SK2551 土壤-1層	直筋縫合切り縫合部、施釉有り、底径8.8cm、高さ2.3cm。	1.0	R3 13021
73	輪舟口	SK2551 土壤-1層	青磁胎体漆塗り半埋黑色、所存長3.5cm、厚さ1.2cm、内面2cm。	1.0	R13 13027

() 内の数値は復元値

第 22 図 SK2551 土壤の出土遺物 (3)、SK2481・2554 土壤の出土遺物

SK2551 土壌 3層

種類	類	3層	2層	1層	計	口縁～底部破片						底部破片						合計	
						完形	3/4	2/3	1/2	1/3	1/4	1/6	完形	3/4	2/3	1/2	1/3	1/4	
土師器	环	106	76	99	281	手持ちケズリ							手持ちケズリ						6
	高台环	1	1	1	3	手持ちケズリ	1						手持ちケズリ	1					1
	高台皿			1	1	不明	1	1	1	1			回転系切り	2	1	4	5	9	25
	耳皿			2	2	回転系切り							回転系切り	1			3		1
	甕	6	8	3	17	回転系切り							回転系切り	1			1	1	4
	置きカマド	1		1	1	不明	1						回転系切り	1			1	1	4
須恵器	环	114	85	106	305	回転系切り							回転系切り	1			1	7	16
	环	12	11	12	35	手持ちケズリ	1						手持ちケズリ	1			1	1	2
	高台皿	1		1	1	不明	1	1	1	1			回転系切り	1			1	1	4
	高台皿	1		1	1	回転系切り							回転系切り	1			1	1	4
	甕	2		2	2	不明	1						回転系切り	1			1	1	4
	甕	3	2	1	6	回転系切り							回転系切り	1			1	1	4
	甕	2	2	3	7	合計	6	2	2	3	3	2	合計	11	11	11	11	61	166
	円面鏡			1	1	回転系切り							回転系切り	1			1	1	4
	小計	18	18	17	53	回転系切り							回転系切り	1			1	1	4
	須恵器	高台跡	2		1	3	合計	1						回転系切り	1			1	1
灰釉陶器	甕	1		1	1	回転系切り							回転系切り	1			1	1	4
	甕	1		1	1	不明	1						回転系切り	1			1	1	4
	縦釉陶器	1		1	1	回転系切り							回転系切り	1			1	1	4
	縦釉陶器	香伊盃	1		1	不明	1						回転系切り	1			1	1	4
	計	136	104	123	363	回転系切り							回転系切り	1			1	1	4
	軒丸瓦	政 府 第 四期		1	1	回転系切り							回転系切り	1			1	1	4
軒平瓦	政 府 第 四期	1		1	1	不明	1						回転系切り	1			1	1	4
	政 府 第 一期	7	3	5	15	回転系切り							回転系切り	1			1	1	4
	平瓦	政 府 第 二期	37	10	2	49	回転系切り						回転系切り	1			1	1	4
	平瓦	政 府 第 三期	9	3	2	14	回転系切り						回転系切り	1			1	1	4
	丸瓦	28	15	5	48	回転系切り						回転系切り	1			1	1	4	
	計	108	40	19	167	回転系切り						回転系切り	1			1	1	4	

环は底部の破片数。环以外の土器については、口縁・底部または特徴的な部位の破片数

表3-1 土器・瓦の個体数

SK2551 土壌 2層

器種	底 部	再調整	口縁～底部破片						底部破片						合計	
			完形	3/4	2/3	1/2	1/3	1/4	1/6	完形	3/4	2/3	1/2	1/3	1/4	
土師器	手持ち	3	手持ちケズリ							手持ち	3	手持ち				6
	手持ち	4	手持ちケズリ							手持ち	4	手持ち				13
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				1
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				1
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				1
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				1
須恵器	手持ち	5	手持ちケズリ							手持ち	5	手持ち				15
	手持ち	5	手持ちケズリ							手持ち	5	手持ち				15
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				1
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				1
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				1
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				1
灰釉陶器	手持ち	1	手持ちケズリ							手持ち	1	手持ち				3
	手持ち	1	手持ちケズリ							手持ち	1	手持ち				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
土師器	手持ち	1	手持ちケズリ							手持ち	1	手持ち				3
	手持ち	1	手持ちケズリ							手持ち	1	手持ち				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
須恵器	手持ち	1	手持ちケズリ							手持ち	1	手持ち				3
	手持ち	1	手持ちケズリ							手持ち	1	手持ち				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
灰釉陶器	手持ち	1	手持ちケズリ							手持ち	1	手持ち				3
	手持ち	1	手持ちケズリ							手持ち	1	手持ち				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
土師器	手持ち	1	手持ちケズリ							手持ち	1	手持ち				3
	手持ち	1	手持ちケズリ							手持ち	1	手持ち				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3

SK2551 土壌全体 (3層～1層)

器種	底 部	再調整	口縁～底部破片						底部破片						合計	
			完形	3/4	2/3	1/2	1/3	1/4	1/6	完形	3/4	2/3	1/2	1/3	1/4	
土師器	手持ち	4	手持ちケズリ							手持ち	4	手持ち				12
	手持ち	5	手持ちケズリ							手持ち	5	手持ち				15
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
須恵器	手持ち	1	手持ちケズリ							手持ち	1	手持ち				3
	手持ち	1	手持ちケズリ							手持ち	1	手持ち				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
灰釉陶器	手持ち	1	手持ちケズリ							手持ち	1	手持ち				3
	手持ち	1	手持ちケズリ							手持ち	1	手持ち				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
	回転系	1	回転系切り							回転系切り	1	回転系切り				3
土師器	手持ち	1	手持ちケズリ													

る。坏（58；図版7-7）は内面底部に墨が全面に付着するが、研磨痕が認められず、墨溜容器に転用されている。高台坏（61；図版7-10）はほぼ完形で、高台部外面に墨が全面に付着するが、研磨痕が認められず、墨溜容器に転用されている。

須恵系土器には坏（55；図版7-16）・高台鉢（67）が各1点、灰釉陶器には猿投窯製品の黒雀14号窯式の椀高台部破片（64）と黒雀90号窯式の椀口縁部破片（65）、壺口縁部破片が各1点、綠釉陶器には猿投窯製品の黒雀90号窯式の香炉蓋体部破片（66；図版7-17）が1点ある。香炉蓋は優品である。

瓦では政府第Ⅰ期～第Ⅲ期の平瓦、丸瓦が各層から出土した。他には政府第Ⅱ期の偏行唐草文軒平瓦621、政府第Ⅲ期の細弁蓮花文軒丸瓦311（69；図版9-3）、刻印「物」Aの平瓦ⅡB類が各1点、刻印「占」丸瓦が2点ある。

【S K2553 土壙】（平面図：第12図）

【位置】調査区東部の北寄り。

【他の遺構との重複】S B2510 建物跡より新しい。S B2515 建物跡と位置が重複するが、新旧関係は不明である。

【形態・規模】東西約4.1m、南北約2.0mの不整楕円形で、深さは約40cmある。

【出土遺物】土師器坏・甕、須恵器甕、政府第Ⅰ期の二重弧文軒平瓦511-eタイプ、政府第Ⅰ期～第Ⅱ期の平瓦、丸瓦の破片が少数出土した。

【S K2554 土壙】（平面図：第13図、断面図：第13図、遺物：第22図）

【位置】調査区東部の中央。

【他の遺構との重複】S K2482 土壙より古く、S B2511・2516・2517 建物跡、S X2558 焼土整地より新しい。

【形態・規模】東西約4.3m、南北約2.5mの不整形で、深さは約40cmある。

【堆積層】2層に分かれ、1層が炭片を多く含む褐色土、2層が炭片を多く含む黒褐色粘質土である。

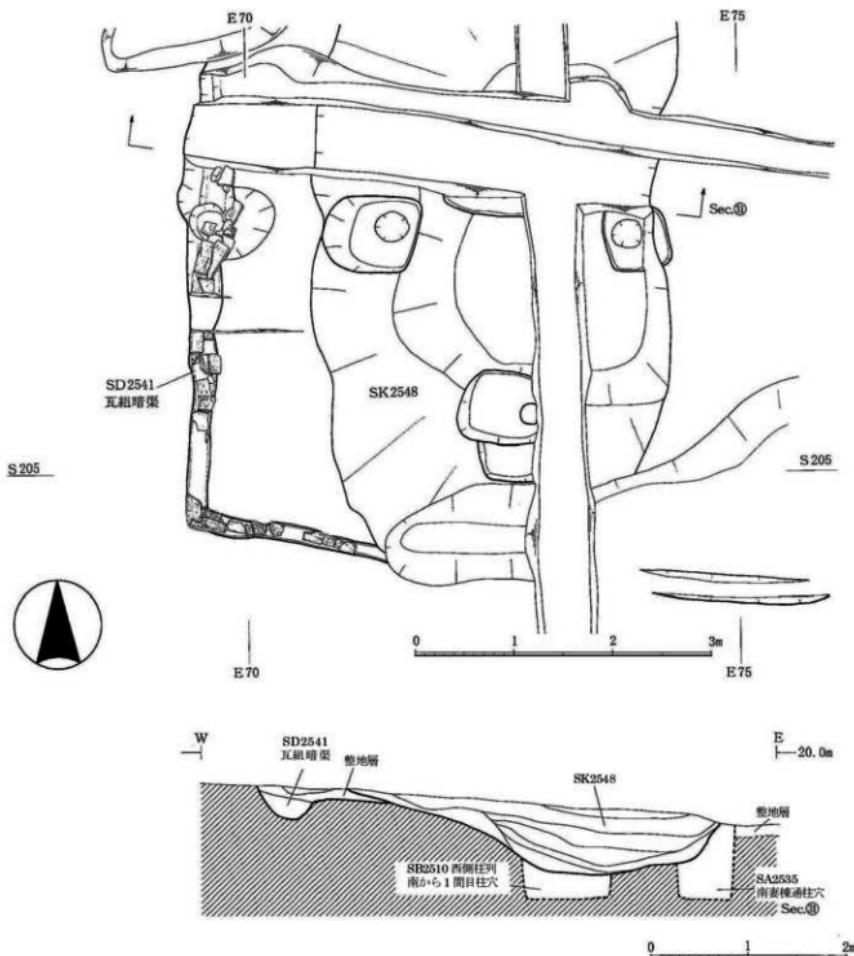
【出土遺物】土師器坏・甕・甌、須恵器坏・甕、政府第Ⅰ期～第Ⅱ期の平瓦、政府第Ⅱ期の刻印「物」A・「物」C・「丸」Aの平瓦ⅡB類aタイプ、丸瓦、輪羽口（73）の破片が少数出土した。このうち土師器の坏・甕はロクロ調整で、甕は非ロクロ調整で両面ヘラミガキ後に両面黒色処理されている。ロクロ調整の土師器坏には回転糸切り無調整のもの（71；図版8-11）、回転ヘラケズリのもの、回転糸切り後に手持ちヘラケズリされたもの、手持ちヘラケズリのものがある。須恵器坏には回転糸切り無調整のもの、回転糸切り後に底部周辺を手持ちヘラケズリし、底部外面中央に焼成前に「郷」と刻書されたもの（72；図版8-15）がある。

【S K2565 土壙】（平面図：第3図、遺物：第24図）

【位置】調査区中央部北寄り。

【形態・規模】東西約1.2m、南北約1.0mの不整形で、深さは約30cmある。

【出土遺物】土師器坏・甕、須恵器坏・甕・不明容器（75）、平瓦、丸瓦の破片が少数出土した。土師器はいずれもロクロ調整で、坏には手持ちヘラケズリのもの、甕には内面ヘラミガキ後に黒色処理されたもの、須恵器坏にはヘラ切りのものがある。須恵器不明容器（75；図版7-13）は底部中央に焼成前に穿孔され、器厚が13~16mmと分厚い。孔径は10mmである。上下の区別、器種名もわからず、類例は寡聞にして知らない。平瓦には政府第III期の平瓦II B類bタイプなどがある。



第23図 SD2541 瓦組暗渠平面図・断面図 (1/50)

5) その他の遺構

【S D 2541 瓦組暗渠】(平面図: 第23図、断面図: 第23図、写真: 図版4-2・5-3)

【位置】調査区東部の北寄り。

【他の遺構との重複】S K2548 土壌より古い。S B2510 建物跡、S A2535 柱列跡と位置が重複するが、新旧関係は不明である。また、S X2555 焼土整地の南に位置するが、攪乱で新旧関係は不明である。

【概要】北部および東部は削平され、全体の規模は不明であるが、長さは南北 4.8m以上、東西 6.5m以上のL字形の瓦組暗渠である。方向は、西辺でみると発掘南北基準線に対し北で東に約3°偏る。幅約30cm、深さ約20cmで、断面U字形である。平瓦凸面を上に向けて一部重複させながら並べて蓋をした暗渠で、暗渠の上部は整地されている。暗渠の施設瓦にはおもに政府第II期の平瓦II B類aタイプを用いている。堅穴住居跡の周溝の可能性がまず考えられるが、北に隣接するS X2555 焼土整地の掘方の西辺の延長上にあることから、これとの関連性の有無も含めて、来年度に再検討する。

【S X2563 鍛冶遺構】(平面図: 第14図)

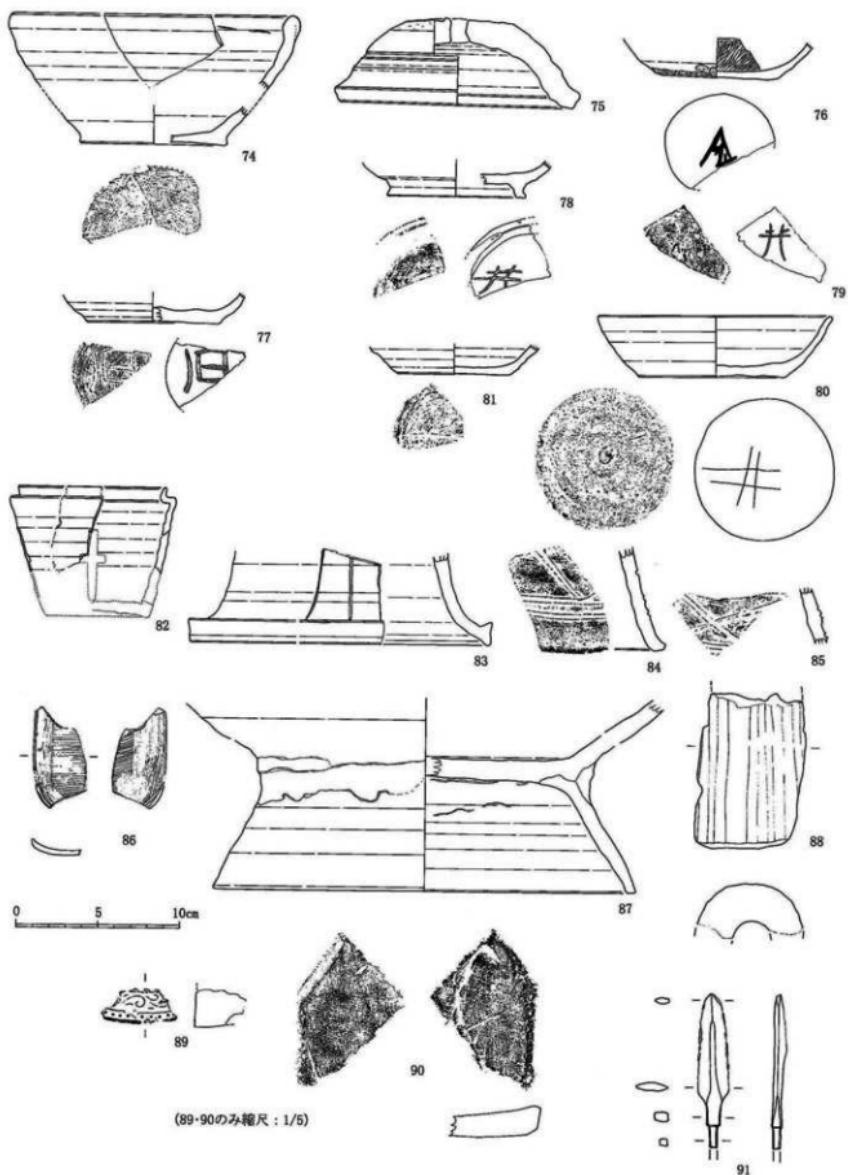
【位置】調査区東部の北寄り。

【概要】S X2559 焼土整地の周囲に分布する整地層の上面で検出したが、精査は行っていないため、詳細は不明である。直径約35cmの円形で、壁が約5cmの厚さで固化していた。遺物は出土していないが、状況からみて小鍛冶遺構とみられる。

(4) その他の遺構と表土の出土遺物

その他、土壌から輪羽口、土錐、隅切瓦、粘板岩製の石製品、ピットからスサ入りの土壁の破片、溝から漆塊(図版9-8)、整地層からスサ入りの土壁(図版9-9)の破片が出土した。表土からも土器・瓦が多数と少数のスサ入りの土壁、砥石の破片、鉄滓などが少数出土した。このうち京都府篠塙跡群西長尾5号窯併行期の須恵器籠鉢(74; 図版7-12)、墨書き師器坏(76)、焼成前刻書「厨」(異体字)須恵器坏(77; 図版8-16)、焼成前刻書「井」高台坏・坏(78・79; 図版8-17・18)、焼成後刻書「井」須恵器坏(80; 図版8-19)窯記号のある須恵器坏(81; 図版8-20)、十字形の透かし窓のある須恵器短頸壺(82; 図版7-15)、須恵器円面硯(83~85)、両黒土師器風字硯(86)、須恵系土器高台鉢(87)、輪羽口(88; 図版9-6)、平城宮所用軒平瓦6721の系譜を引く政府第I期の均整唐草文軒平瓦660(89)、隅切瓦(90)、鉄鎌(91; 図版9-7)などを図示した(第24図)。

須恵器短頸壺(82; 図版7-15)は口縁部~体上部小破片で、きわめて類例が少ない。頸部は6mmと短く、直立気味に立ち上がる。口径は約9.0cm、最大径は約10cmと推定される。肩部が強く張って稜を成し、肩部に最大径が位置する。体部中央には十字形の透かし窓が入っている。胎土が均質、焼成も良好で、色調は両面がくすんだ灰色、断面が灰白色である。胎土・焼成・色調は県内の須恵器窯の製品とはまったく異なる。器形・形態・法量は、愛知県刈谷市井ヶ谷町所在の州原6号窯出土の「十字透かし彫坏」(坂野, 1979)に類似し、猿投窯製品とみられる(註1)。



第24図 SK2565~2567 土壌、表土の出土遺物

No.	種類	出土遺物・留立	持 値	登録号	箱番号
74	須恵器鉢	表土・中央部 京丹波町須恵尾毛5号窯跡群第4号窯。底面・側面斜め切り無縫接。口径17.0 cm、底径6.0 cm、高さ8.0 cm。	R5	13097	
75	須恵器	SK266 調査区・中央・東部。「体子落出器」ラグゼリ。口部斜め切り無縫接。口径14.2 cm、底径6.0 cm、高さ5.3 cm、穴径1.0 cm。体部・底部厚1.5 cm以上。残存1/2。	R1	13024	
76	土師器 壺	調査区・中央・東部 底面斜め切り無縫接。口径14.2 cm、底径6.0 cm、高さ8.0 cm。	R17	13025	
77	須恵器 壺	表土・東部 「底面斜め切り無縫接・側面斜め切り」複数個。口径16.0 cm。	R22	13025	
78	須恵器 高台壺	表土・中央部 「底面・側面斜め切り無縫接・側面斜め切り」複数個。「井」。底径約8.4 cm。	R2	13025	
79	須恵器 壺	側面斜め切り「井」	R17	13025	
80	須恵器 壺	表土・東部 「底面・側面斜め切り無縫接・側面斜め切り」複数個。「井」。 口径14.2 cm、底径8.4 cm、高さ3.8 cm、残存2/3。	R19	13025	
81	須恵器 壺	表土・東部 「底面・側面斜め切り無縫接・側面斜め切り」。底径6.0 cm。	R39	13025	
82	須恵器 短縫縦	表土 体部二十字縫合し、最大幅約10 cm、残存1/8。	R56	13025	
83	円筒瓶	表土・東部 側面斜め切り無縫接。	R1	13024	
84	円筒瓶	表土・中央部 側面斜め切り無縫接。側面斜め切り無縫接。	R18	13025	
85	円筒瓶	表土・東部 側面斜め切り無縫接。	R10	13025	
86	魔方環	表土・東部 土師器底・内面にはシニアミガキ・側面斜め刈理。	R11	13025	
87	須恵器鉢 高台壺	表土・東部 須恵器底・側面と高台部無縫接。底径25.0 cm、残存3/4。	R43	13025	
88	輪印印	表土 表面泥付印「カナ」。残存長9.5 cm、厚さ2.3 cm、内径2.4 cm。	R66	13027	
89	軒瓦	表土 瓦敷地底付印2,000、半瓦敷地付印1,6721の調査区引く。行政第1期	R90	13035	
90	周瓦	SK267 「井面」ヘラケズリ、「井面」丸目・ナゲ。側面斜め切り落とし・ラグゼリ。 行政第2期ノハリノヒタヒタ無縫接。	R1	13000	
91	鉢	表土 長径4 cm、断面30mm×5 mm	IM06	13038	

第24図 SK2565~2567 土壌、表土の出土遺物

() 内の数値は復元値

京都府篠塚跡群西長尾5号窯併行期の須恵器鉢（74；図版7-12）は、都城の基準土器群では平安京III期古（930～960年頃）～平安京III期中（960～980年頃）に含まれ（古代の土器研究会編，1992～1994）、多賀城跡では5例目の出土である（『年報1997』『年報1998』）。今のところ東日本で多賀城跡以外の遺跡では出土していない。

3. 考察

（1）主要遺構の変遷と年代の検討

今回の第70次調査で検出した主要遺構は、掘立式建物跡20棟、柱列跡20条、竪穴住居跡1棟である。第69次調査の成果と併せると、これまで城前地区で検出した主要遺構は、掘立式建物跡29棟、柱列跡30条、材木痕跡3条、竪穴住居跡3棟、井戸跡1基になる。以下、第70次調査で検出した主要遺構について、調査区の西部、中央部および東部の3つに分けて、遺構の新旧関係、出土遺物などから、それらの変遷を検討し、検討する。

1) 調査区西部の遺構の変遷

調査区西部の主要遺構を整理すると第25図のような新旧関係がみられた。

【調査区北西部】 <対象遺構> S B2502A・B 建物跡

S B2502 建物跡はほぼ同位置でA→Bと建て替えられている。そのうちS B2502B建物跡の柱穴掘方埋め土からロクロ調整で底部がヘラケズリ、内面が放射状ミガキされた土師器壺が出土しており、

9世紀以降にこの建物が建てられていることを示す。

【調査区南西部】 <対象遺構> S B 2468 A・B 建物跡、S A 2520~2522 柱列跡

S B 2468 建物跡は、今回検出した柱穴では重複が確認できなかつたが、第 69 次調査において A→B とほぼ同位置で建て替えていたことがわかっている。そのうち S B 2468 B 建物跡の柱切取穴からは政府第 II 期の刻印「伊」丸瓦 II B 類が出土しており、政府第 II 期〔天平宝字 6 (762) 年～宝亀 11 (780) 年〕の造営以降に建物が壊されていることを示す。

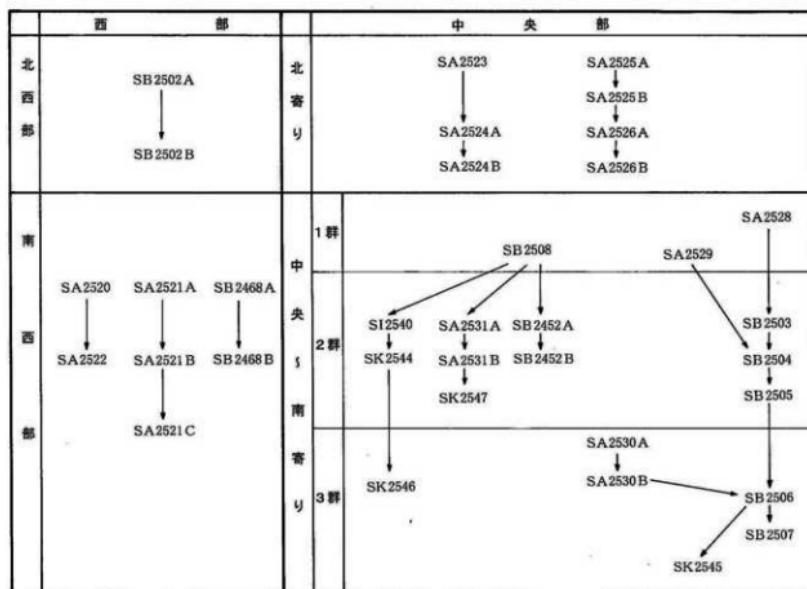
S A 2520~2522 柱列跡はいずれも調査区西辺際に位置し、建物跡となる可能性もある。これらの中では、S A 2520 柱列跡→S A 2522 柱列跡の変遷があり、S A 2521 A・B・C 柱列跡とあわせて考えると、少なくとも 5 時期にわたってこの場が使われ続けている。

2) 調査区中央部の遺構の変遷

中央部の主要遺構を整理すると第 25 図のような新旧関係がみられた。

【調査区中央部北寄り】 <対象遺構> S A 2523~2526 柱列跡

この地区では、① S A 2523 柱列跡→S A 2524 A・B 柱列跡、② S A 2525 A・B 柱列跡→S A 2526 A・B 柱列跡の変遷がある。なお S A 2523・2524 柱列跡に関しては、調査区北辺際に位置し、建物跡とな



第 25 図 城前地区（西部・中央部）検出の主要遺構の新旧関係

る可能性もある。このうち、**S A 2525A 柱列跡**の柱穴掘方埋め土からロクロ調整の土師器坏や黒笹14号窯式もしくは黒笹90号窯式のものとみられる綠釉陶器椀が出土しており、この柱列は9世紀以降につくられたことを示す。

【調査区中央部中央～南寄り】

＜対象遺構＞ **S B 2452・2503～2508 建物跡、S A 2527～2531 柱列跡、S I 2540 住居跡**

この地区の中央部では、①S A 2528 柱列跡→S B 2503 建物跡→S B 2504 建物跡→S B 2505 建物跡→S B 2506 建物跡→S B 2507 建物跡、②S A 2529 柱列跡→S B 2504 建物跡、③S A 2530 A・B 柱列跡→S B 2506 建物跡→S K 2545 土壙の変遷がある。

S B 2503～2507 建物跡はいずれも桁行3間、梁行2間の東西棟で、発掘基準線に対し概ね同方向に偏っており、建物の西妻もほぼ揃っている。このうち、**S B 2504 建物跡**の柱抜取穴からはロクロ調整の土師器坏が出土しており、9世紀以降にこれらの建物が壊されているとみられる。また、**S B 2506・2507 建物跡**の柱穴掘方埋め土は黒褐色土で、10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰（註2）がブロック状に含まれており、10世紀前葉以降にこれらの建物が建てられているとみられる。以上のことから、ここではS B 2504・2505 建物跡は9世紀代の建物、S B 2506・2507 建物跡は10世紀前葉以降の建物と考える。そして、S B 2504 建物跡より古い**S B 2503 建物跡**、さらに古い**S A 2528 柱列跡**はともに8世紀に遡る可能性がある。また、S B 2504 建物跡より古いS A 2529 柱列跡は、柱穴掘方埋め土から政庁第II期の平瓦II B類が出土しており、政庁第II期の造営以降にこの柱列がつくられている。位置関係からS B 2503・2504 建物跡とは同時に存在し得ないことを考えると、S B 2503 建物跡より古くなる可能性がある。

この地区的南寄りでは、S B 2508 建物跡→S B 2452A・B 建物跡の変遷がある。**S B 2452A 建物跡**の柱穴掘方埋め土から政庁第II期の平瓦II B類が出土しており、政庁第II期の造営以降にこの建物が建てられることを示す。また、**S B 2452B 建物跡**の柱穴掘方埋め土から政庁第III期の平瓦や、ロクロ調整で再調整された土師器坏が出土しており、9世紀前半以降にこの建物が建てられることを示す。ここではこれらの建物跡は9世紀代の遺構と考える。S B 2452 建物跡より古い**S B 2508 建物跡**は、桁行5間、梁行2間の純柱建物跡である。建物の規模、発掘基準線に対する建物の偏り具合などをみると、S B 2504～2505・2452 建物跡とは様相を異にしており、ここでは他の9世紀代の建物群とは別に扱う。

S A 2530 柱列跡はS B 2506 建物跡より古いものであるが、柱痕跡には10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰がブロック状に含まれており、10世紀前葉以降に柱列が壊されていることを示す。ここではこの柱列跡は10世紀前葉頃の遺構と考える。

S A 2531 柱列跡はS K 2547 土壙より古いものである。S K 2547 土壙の堆積土からはロクロ調整の土師器坏が出土していることから、この柱列跡は9世紀代以降に壊されていることを示す。ここではこの柱列跡は9世紀代の遺構と考える。

S I 2540 住居跡は前述のS A 2527 柱列跡、S B 2508 建物跡より新しいものである。この住居跡からは政庁第II期の平瓦が出土し、これより新しいS K 2545 土壙からは8世紀代の須恵器とともに9世

紀後半頃とみられる土師器壊が出土している。したがって、政府第II期以降、9世紀後半以前の住居とみられる。

以上のことから、この調査区中央部中央～南寄りでは、9世紀代と考えた遺構を軸にして、

1群：9世紀代の遺構より古い遺構（S B2503・2508 建物跡、S A2528・2529 柱列跡）

2群：9世紀代～10世紀前葉の遺構（S B2452・2504～2505 建物跡、S A2531 柱列跡）

3群：10世紀前葉～中頃の遺構（S B2506・2507 建物跡、S A2530 柱列跡）

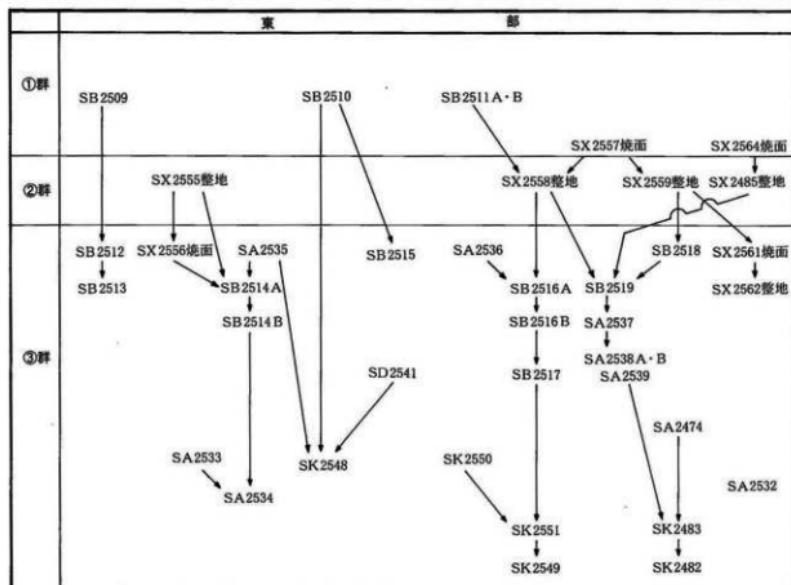
の3群に大別できる。このうち1群は8世紀に遡る可能性もある。

3) 調査区東部の遺構変遷

東部では建物跡・柱列跡・焼面・整地層の新旧関係を詳細に検討することができた。その関係は第26図に示すとおりである。ここではまず、東部で検出された遺構のうちでも特徴的である焼土整地について考察し、その焼土整地との関係から他の遺構について考察する。

【焼土整地】 <対象遺構> S X 2555・2558・2559・2485 焼土整地

北東部にはS X 2555 焼土整地、南東部にはS X 2558・2559・2485 焼土整地がある。これらの焼土整地は、いずれも広範囲を土壤状に掘削して多量の焼土塊・炭片を含む褐色土で人為的に整地したものである。また、S X 2558・2559 焼土整地はS X 2557 焼面より新しく、S X 2485 焼土整地はS X 2564 焼面より新しい。S X 2555 焼土整地より新しい柱穴の掘方壁面にみえるS X 2555 焼土整地の堆積状況



第26図 城前地区(東部)検出の主要遺構の新旧関係と遺構期

を観察すると、S X 2555 焼土整地の下層には焼面が存在する。このように S X 2555・2558・2559・2485 焼土整地は層相・層位関係が共通することから、場所を異にするが同時期の整地とみられる。

焼土整地からは政府第Ⅰ期～第Ⅲ期の瓦が出土し、瓦は政府第Ⅱ期の瓦が主で、次いで政府第Ⅰ期の瓦が多く、政府第Ⅲ期の瓦は少ない。また、9世紀代のロクロ土師器は出土していない。

したがって、焼土塊・炭片を多量に含む焼土塊・炭片を多量に含むこれらの整地は、政府第Ⅲ期の存続期間中〔宝亀11（780）年～貞觀11（869）年〕の大規模な整地であり、9世紀代のロクロ土師器が出土していないことを考え併せると、8世紀後葉頃のものとみられる。そしてこの頃この地区で大規模な火災があったことを窺わせる。

東部では S X 2555・2558・2559・2485 焼土整地に覆われる建物跡とそれを壊す建物跡・柱列跡があり、焼土整地を基準に遺構の設定が可能である。そこで、S X 2555・2558・2559・2485 焼土整地より古い遺構を①群、S X 2555・2558・2559・2560 焼土整地を②群、S X 2555・2558・2559・2485 焼土整地より新しい遺構を③群とする。

【①群の遺構】 <対象遺構> S B 2509・2510・2511 建物跡

北東部の S X 2555 焼土整地よりも古い①群の建物跡には S B 2510 建物跡があり、南東部の S X 2558・2559 焼土整地よりも古い①群の建物跡には S B 2511 建物跡がある。両建物とも桁行5間、梁行2間の南北棟であり、両側柱筋を揃えて南北に並び、桁行総長が 11.9m と等しく、桁行の柱間寸法、柱の大きさなども一致することから、計画的に配置された同時期の建物とみることができる。

S B 2510 建物跡の北側には S B 2510 建物跡の東側柱筋と東側柱筋を揃えて並ぶほぼ同規模の南北棟と推定される S B 2509 建物跡がある。これら3棟の S B 2509・2510・2511 建物跡は計画的に配置された同時期の建物であり、①群に位置付けられる。

【③群の遺構】 <対象遺構> S B 2514～2519 建物跡、S A 2537・2538・2539 柱列跡

次に、②群の焼土整地よりも新しい③群の建物跡と柱列跡を検討する。

北東部の S X 2555 焼土整地よりも新しい③群の建物跡には S B 2514A・B 建物跡がある。そして、その北側には約3mの間隔をあけて S B 2512 建物跡と、それよりやや北にずらして建て替えられている S B 2513 建物跡がある。これら S B 2514A・B 建物跡と S B 2512・2513 建物跡は東西の柱筋をほぼ揃えて計画的に建てられた同時期の建物跡とみることができる。そして、S B 2514A 建物跡の柱穴掘方埋め土からはロクロ調整の土師器坏が出土していることから、これらの建物跡は9世紀代に建てられたものとみられる。

南東部の S X 2558・2559・2560 焼土整地よりも新しい建物には、S B 2516～2519 建物跡がある。

このうち S B 2517 建物跡と S B 2518 建物跡は両側柱筋を揃えて南北に並ぶ桁行3間、梁行2間のほぼ同規模の南北棟で、同時期に計画的に配置されているとみられる。新旧関係では S B 2516 建物跡が S B 2517 建物跡より古いくこと、S B 2518 建物跡→S B 2519 建物跡→S A 2538・2539 柱列跡と新旧関係があることから、これら③群の建物跡・柱列跡は S B 2516 建物跡→S B 2517・2518 建物跡→S B 2519 建物跡→S A 2537 柱列跡→S A 2538・2539 柱列跡と変遷すると推定される。

S B 2516B 建物跡の掘方埋め土からはロクロ調整で手持ちヘラケズリの土師器坏が出土しており、

9世紀代に建てられたものとみられる。S B 2518・2519 建物跡の柱痕跡・抜取穴からもロクロ調整の土師器が出土している。また、S A 2537 柱列跡より新しい S K 2482・2483 土壌からは、ロクロ調整後に手持ちヘラケズリまたは回転ヘラケズリされた土師器坏の他、回転糸切り無調整の土師器坏も出土しており、9世紀中頃～後半頃のものとみられる（『年報 1998』）。したがって、③群の建物跡・柱列跡はいずれも9世紀代のものとみられる。

東部の中央やや北寄りの位置には、S B 2515 建物跡がある。これは直接焼土整地と切り合いがないが、①群の S B 2510 建物跡より新しく、また、柱痕跡からロクロ調整の土師器坏が出土していることから、これまでみてきた③群の遺構とほぼ同時期のものとみられる。

なお、S D 2541 瓦組暗渠は、政府第Ⅱ期の瓦を暗渠の施設に用いているので、政府第Ⅱ期以降に位置付けられる。また、東部の S K 2548～2554 土壌については、いずれも9世紀前半～後半頃のロクロ調整の土師器坏が出土しており、この頃のものとみられる。

【①～③群の年代的位置付け】

②群については、焼土整地から政府第Ⅰ期～第Ⅲ期の瓦が出土し、瓦は政府第Ⅱ期の瓦が主で、次いで政府第Ⅰ期の瓦が多く、政府第Ⅲ期の瓦は少ないと、9世紀代のロクロ土師器は出土していないことから、政府第Ⅲ期の存続期間中〔宝亀11（780）年～貞觀11（869）年〕の8世紀後葉頃のものと考えられる。

①群の S B 2509・2510・2511 建物跡については、8世紀後葉頃の②群の焼土整地より古いこと、多賀城跡の存続期の建物と考えられることから、政府第Ⅱ期のものとみられ、新旧2時期あることから政府第Ⅰ期にまで遡る可能性もある。③群の S B 2514～2519 建物跡、S A 2537・2538・2539 柱列跡については、重複関係で最も古い S B 2514A 建物跡の柱穴掘方埋め土からロクロ調整の土師器坏が出土していることから、これらの建物跡・柱列跡は9世紀代の政府第Ⅲ期～第Ⅳ期に建てられたものとみられる。

3) 政府跡遺構期との対応関係

ここで、中央部中央～南寄りで設定した1群～3群の遺構期、南東部で設定した①群～③群の遺構期を政府跡の遺構期（宮城県多賀城跡調査研究所、1982）と対応させると、次のようになる。9世紀代に位置付けた中央部2群は政府第Ⅲ期～第Ⅳ期、中央部2群より古い中央部1群は政府第Ⅰ期～第Ⅱ期、10世紀前葉～中頃に位置付けた中央部3群は政府第Ⅳ-3e期に相当するとみられる。また、焼土整地の東部②群は政府第Ⅲ期、それより古い東部①群は政府第Ⅰ期～第Ⅱ期、東部②群より新しい東部③群は政府第Ⅲ期～第Ⅳ期に相当するとみられる。

なお、来年度には第71次調査として本年度実施した第70次調査のすぐ北側を調査する予定であり、第69次調査を含めた城前地区の遺構の変遷は来年度に総括する。

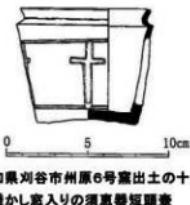
(2)まとめ

1. 今回の調査区では、遺構が集中する箇所が西部、中央部、東部の3カ所に大別でき、それらの間には、帯状に遺構が存在しない空白地がある。そのうち中央部では東西棟、東部では南北棟というように、建物が建てられる場所によって棟方向に特徴がある。
2. 奈良時代に遡る可能性のある建物跡の存在を東部で検出した。東部では桁行5間、梁行2間の南北棟2棟、およびこれと同規模となる可能性のある南北棟1棟の計3棟が南北に並んで計画的に配置されていることが判明した。中央部でも奈良時代に遡る可能性のある柱列などを検出した。昨年度の調査と併せると、奈良時代には中央部の廂付きの東西棟と東部の南北棟からなる官衙の存在が次第に明らかになりつつある。平安時代になると、東部では桁行3間、梁行2間の南北棟2棟が1組となって計画的に配置され、中央部では建物跡や柱列跡が連続的に変遷していることなどが明らかになってきた。
3. 東部では政庁第III期の造営に関わるとみられる焼土塊や炭片を多量に含む大規模な整地を検出した。

註

註1 愛知県刈谷市州原6号窯出土資料は、谷沢靖氏が最初に報告され（谷沢、1958；実測図は中村編、1997に採録）、その後に坂野和信氏が再実測して「十字透し彫坏」と名付けて報告されている（坂野、1979；右図参照）。坂野氏によれば、この資料は須恵器で、「口径7.9cm、器高7.0cm、箱形の体部に外反する短い口縁部がつけられている。体上部と下部に各1条ずつめぐらせた沈線の間に、十字透し窓が4箇所割り付けられている。内底部から口縁部はろくろ撫でされる。外底部は糸切の後、周辺が範削りされる。体部外面と口縁部内側は、暗緑褐色を呈する灰釉がみられる。胎土は青灰色の須恵質である。用途は不明であるが香炉風のものであったことも考えられる。」という。愛知県陶磁資料館の井上喜久男氏のご教示によれば、州原6号窯は猿投窯跡群の井ヶ谷78号窯式期のもので、長岡京期～9世紀初頭頃に位置付けられるという。さらに、この州原6号窯出土の類品は、消費地での出土は現在のところ知られておらず、生産地でも類例はあまりないという。

註2 宮城県内に分布する灰白色火山灰は、十和田a火山灰と同一とみる研究者が多数を占めている。十和田a火山灰は、秋田県仙北町払田柵跡の外郭線C期角材列の存立期間中に降灰し、このC期角材の年輪年代測定が907年と出されたので、907年より新しい（児玉編、1997）。また、承平4（934）年閏正月15日（『日本紀略』）に焼失した陸奥国分寺の七重塔の焼土層に灰白色火山灰が覆われることから、934年よりは古い（白鳥、1980）。したがって、灰白色火山灰＝十和



愛知県刈谷市州原6号窯出土の
十字透かし窓入りの須恵器短縁壺

田 a 火山灰の降灰年代は、907 年～934 年の間の 10 世紀前葉頃というのが考古学的にわかる事実である。なお、『扶桑略記』の延喜 15（915）年 7 月 13 日条の「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑 桢損之由」の記事を十和田 a 火山灰の降灰年代に結び付けて 915 年とする説（町田，1987；阿子島・檀原，1991 など）が有力だが、この年代観についてこれまできちんと論証されたことは一度もない（『年報 1997』p76 の註 2）。

引用文献

- 阿子島功・檀原徹 1991 「東北地方、10C 墳の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論集』 pp. 1～9
- 古代の土器研究会編 1992 『古代の土器 I 都城の土器集成 I』
- 古代の土器研究会編 1993 『古代の土器 2 都城の土器集成 II』
- 古代の土器研究会編 1994 『古代の土器 3 都城の土器集成 III』
- 児玉準編 1997 『払田柵跡－第 107～109 次調査概要－』
- 白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要』VII
- 中村浩編 1997 『須恵器集成図録 第 6 卷 補遺・索引編』
- 坂野和信 1979 「金鉄場遺跡出土の水鳥紐蓋付平瓶について」『考古学雑誌』65-3 pp. 68～78
- 町田弘 1987 「火山とテフラ」『日本第四紀地図』（日本第四紀学会編）pp. 73～74
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1979 『多賀城漆紙文書』（宮城県多賀城跡調査研究所資料 I）
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1980 『多賀城跡 政庁跡 図録編』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1982 『多賀城跡 政府跡 本文編』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1988 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1988 多賀城跡－第 53・54・55 次調査－』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1998 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1997 多賀城跡－第 68 次調査・多賀城碑覆屋解体修理－』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1999 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1998 多賀城跡－第 69 次調査－』
- 矢沢靖氏 1958 「井ヶ谷古窯跡群」『刈谷市の古窯』

III. 付 章

1. 関連研究・普及活動

平成 11 年度は多賀城跡発掘調査の他に、以下の調査研究事業や普及活動を行った。

（1）多賀城跡環境整備事業

平成 11 年度の多賀城跡環境整備事業は、史跡等保存整備費（一般）国庫補助事業として、総事業費は 31,500 千円で実施した。今年度は第 6 次 5 カ年計画の最終年次にあたり、大畠地区を対象とした一連の整備は今年度で一応終了することとなる。おもな工事内容は以下の通りである。

①遺構表示工

当地区では 9 世紀前半頃の遺構を表示することを整備方針としている。そこで大畠地区官衙の北門跡、材木塀跡、建物跡を表示した。大畠地区官衙北門跡では、柱の位置を木柱によって、壁の位置を花壇によって表示した。また、門に取り付く材木塀跡の位置にはドウダンツツジを列植した。その他の建物跡は、建物平面に相当する範囲を、砂利を詰めた幅 30cm の溝で区切った上で、その内部に野芝を張り付けた。

②学習施設設置工

「大畠地区官衙北門跡と材木塀跡」および「平安時代の道路跡」についてそれぞれ遺構説明板を設置した。板面は、カラーフィルムに印刷したものを F R P に封入したものとした。

③園路工

当地区的見学および散策に役立つように幅 1.5m の園路を設置した。これまで設置してきた多賀城内の園路と同様の樹脂舗装のものとした。

（2）特別史跡多賀城跡附寺跡の現状変更

当研究所では、現状変更により地下遺構や歴史的景観に悪影響を与えることのないよう関係機関や地域住民の方々と協議しながら、特別史跡の保存と活用に努めてきた。

平成 11 年度における特別史跡指定地内の現状変更申請は 4 件あった。この他、平成 10 年度に現状変更申請され、平成 11 年度に対応すべきものが 3 件あった。平成 11 年度はこれら 7 件の現状変更に対応した（表 3）。その内容は以下のとおりである。

①民間工事 5 件一本堂・住宅増改築（2・5・7）、農業施設設置（3）、電話柱設置（6）。

②公共事業 1 件一下水道設置工事（1）。

③史跡の活用に関わるもの 1 件一あやめまつり（4）。

掘削を伴う住宅・本堂の増改築の 2 件（2・7）については発掘調査を、その他現状変更が軽微なもの 5 件（1・3～6）については工事の際に立ち会いを行った。発掘調査を行った 2 件（2・7）

についての報告は、次年度以降の年報で報告する。

番号	申請者	変更事業	対応
1	多賀城市長 鈴木和夫 多賀城市浮島字後山地内	公共下水道付設 平成11年3月25日 文化庁許可	立会:4月6日
2	菊池傳吉 多賀城市市川字五万崎17	住宅改築工事 平成11年3月25日 文化庁許可	発掘調査:5月31日 調査面積:10m ²
3	菊池傳吉 多賀城市市川字五万崎17	農業施設新築工事 平成11年3月25日 文化庁許可	立会:6月22日・7月27日 8月3日・9月3日
4	多賀城市長 鈴木和夫 多賀城市市川字田屋場地内	あやめまつり仮設テント等設置 平成11年5月20日 県教委許可	立会:6月1日~7月31日
5	佐藤多助 多賀城市市川字大畑9番地	住宅増築工事 平成11年7月8日 県教委許可	立会:7月26日
6	東日本電信電話㈱宮城支店長 佐藤英明 多賀城市市川地内	電話柱設置工事 平成11年9月17日 県教委許可	立会:11月17~19日
7	玉川寺代表役員 村上孝邦 多賀城市市川字城前	本堂改築に伴う発掘調査 平成11年10月21日 文化庁指示	試掘調査:12月7~9日 調査面積:75m ²

(平成11年4月~平成12年1月末現在)

表3 平成11年度実施の現状変更

(3) 多賀城関連遺跡発掘調査事業

当研究所では多賀城と関連する宮城県内の古代城柵・官衙遺跡や生産遺跡について、計画的な調査・研究を継続的に実施している。この調査・研究事業は、中央政府と密接な関連のもとに陸奥・出羽両国を支配する上で中枢的な役割を果たした古代の多賀城を、多角的な視野から解明するとともに、これらの遺跡を保存し、活用することを目的としている。

平成11年度は第6次5カ年計画の初年度にあたり、桃生郡河北町から桃生町に位置する桃生城跡の第8次調査を実施した。発掘調査面積は約1,200m²である。調査にあたっては桃生郡河北地区教育委員会・桃生町教育委員会の協力を得た。総事業費は15,300千円(50%国庫補助)である。

1. 調査の成果

今回発見した遺構は、区画溝1条・掘立式建物跡4棟・竪穴住居跡2棟・土壙などである。区画溝は幅約4mで、南北約41m以上延びると考えられ、本地区的官衙群を東西に2分する。掘立式建物跡の内2棟は、6間×2間と5間×3間の大規模なもので、前者は床束を、後者は間仕切りをもつ建物である。他の2棟は小規模なもので全容の分かるものは、3間×2間である。竪穴住居跡は、重複と立て替えにより、3時期の変遷が認められる。この内最も古い時期のものは、人為的に埋め戻されている。最も新しい住居跡は、堆積土に10世紀前葉に降下した灰白色火山灰が堆積し、自然に埋没したものである。遺構・遺物等の検討から、桃生城の造営に関わるものと廃絶期に関わるものと考えられる。

2. 調査の意義

- (1) 政府西側の官衙は、南北 100m 以上、東西 200m 以上の広がりを持ち、区画溝によって東西に分けられる。
- (2) 区画溝の西側では、大規模な建物を 2 棟発見した。これらは、この地区における中心的な建物と考えられる。大規模な建物は、火災によって焼失しており、宝亀 5(774) 年の海道の蝦夷による襲撃によるものと考えられる。

(4) 遺構調査研究事業

本事業は多賀城跡で検出した建物跡などの諸遺構を保存・展示・活用することを目的として、他遺跡における類例と比較検討しながら基礎的研究を行うものである。本年度は遺構調査研究事業の第 5 次 5 カ年計画の 2 年目として、福岡県福岡市鴻臚館跡等の調査データを収集する予定であったが、予算の関係で、桃生郡矢本町赤井遺跡（牡鹿柵・牡鹿郡家）の調査データを収集するに止まった。このため、従来収集した各地のデータを整理し、多賀城跡・桃生城跡と比較・検討を行った。

(5) その他

1. 現地説明会の開催

発掘調査の成果を一般に公開するために、下記の現地説明会を開催した。

「多賀城跡第 70 次調査について」 平成 11 年 11 月 13 日 阿部恵・柳澤和明・白崎恵介
「桃生城跡第 8 次調査について」 平成 11 年 9 月 18 日 後藤秀一・吾妻俊典

2. 各機関・委員会などへの協力

白鳥良一 秋田市秋田城跡環境整備指導委員 盛岡市志波城跡整備委員 仙台市郡山遺跡発掘調査指導委員 多賀城市文化財保護委員 多賀城市環境審議委員 角田市郡山遺跡発掘調査指導委員 古川市名生館官衙遺跡発掘調査 環境整備指導委員 古代城柵官衙遺跡検討会代表世話人 新世紀・みやぎ国体実行委員会式典専門委員会大会旗・炬火リレー部会委員
佐藤和彦 青森県史編さん委員会古代部会専門委員
吾妻俊典 女川町文化財保護委員
白崎恵介 古川市名生館官衙遺跡発掘調査・環境整備指導委員 史跡等整備のあり方に関する調査研究会協力委員

3. 講演会などへの協力

白鳥良一 「伊治城と古代東北」 栗原郡文化財保護委員連絡協議会 平成 11 年 6 月 4 日
「考古学から見た古代蝦夷」 仙台市北山市民センター 平成 11 年 6 月 24 日
「古代の栗原と蝦夷」 平成 11 年度宮城県民大学シニアセミナー 平成 11 年 7 月 23 日
「伊治公呂事件と多賀城」 平成 11 年度史跡案内ボランティア養成講座 平成 11 年 10 月 15 日

「特別史跡多賀城跡について」高等学校及び特殊教育諸学校高等部初任者研修

平成 11 年 10 月 19 日

「特別史跡多賀城跡について」シルバー観光ガイドセミナー

平成 11 年 10 月 22 日

「特別史跡多賀城跡の歴史的意義」小中学校及び特殊教育諸学校小中学部初任者研修

平成 11 年 11 月 9 日

「古代蝦夷と多賀城」平成 11 年度地域リーダー合同研修会

平成 11 年 11 月 25 日

「多賀城と古代蝦夷」宮城県文化財友の会公開講演会

平成 11 年 12 月 5 日

「東北の縄文遺跡からの発見」みやぎ学生フォーラム連続講座

平成 12 年 1 月 22 日

「古代城柵と蝦夷」地底の森ミュージアム友の会講座

平成 12 年 1 月 23 日

吾妻俊典 「桃生城とその時代－東北地方と律令国家」河北地区教育委員会文化財セミナー

平成 12 年 3 月 4 日

「石巻地方の古墳文化」河北地区教育委員会文化財セミナー

平成 12 年 3 月 11 日

「桃生城炎上とその後の時代」河北地区教育委員会文化財セミナー

平成 12 年 3 月 18 日

4. 研究発表・執筆など

白鳥良一 「第二章 縄文時代」『仙台市史通史編 1 原始』(分担執筆) 仙台市 平成 11 年 3 月 31 日

「第九章 多賀城碑地下部分の発掘調査」『多賀城碑その謎を解く（増補版）』雄山閣

平成 11 年 11 月 20 日

阿部・柳澤・白崎「多賀城跡第 70 次調査の概要」宮城県遺跡調査成果発表会

平成 11 年 12 月 12 日

「多賀城跡第 70 次調査の概要」第 26 回古代城柵官衙遺跡検討会 平成 12 年 2 月 19 日

後藤・吾妻「見えてきたぞ！桃生城」『広報かほく No. 516』

平成 11 年 11 月 1 日

「桃生城跡第 8 次調査の概要」宮城県遺跡調査成果発表会

平成 11 年 12 月 12 日

「桃生城跡第 8 次調査の概要」第 26 回古代城柵官衙遺跡検討会

平成 12 年 2 月 19 日

後藤秀一 「陸奥国南部における郡衙の特質－亘理郡・伊具郡－」第 26 回古代城柵官衙遺跡検討会

平成 12 年 2 月 19 日

柳沢和明「多賀城碑の製作工程」『佐藤広史君追悼論文集 一所懸命』

平成 11 年 1 月 7 日

吾妻俊典（共同執筆）「覚満寺跡発掘調査概報」『宮城考古学』第 1 号 宮城県考古学会

平成 11 年 5 月 16 日

5. 文化財科学

東北大大学院文学研究科長と宮城県多賀城跡調査研究所長の協定に基づき、文学研究科文化財科学専攻の大学院生の研究・指導にあたった。

白鳥良一（客員教授）：文化財科学研究特論 I 「埋蔵文化財論」

文化財科学研究演習 I 「指定文化財の活用(1)」

課題研究

2. 組織と職員

（宮城県教育委員会行政組織規則（抄））

第13条の四 文化財保護課の分掌事務は、次のとおりとする。

四 多賀城跡調査研究所及び歴史博物館に関する事。

第21条 特別史跡多賀城跡附寺跡（これに関連する遺跡を含む。以下同じ。）の発掘、調査及び研究を行うため、地方機関として多賀城跡調査研究所を設置する。

2 多賀城跡調査研究所の名称及び位置は次のとおりとする。

名 称	位 置
宮城県多賀城跡調査研究所	多 賀 城 市

3 多賀城跡調査研究所の所掌事務は、次のとおりとする。

- 一 特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘に関する事。
- 二 特別史跡多賀城跡附寺跡の出土品の調査及び研究に関する事。
- 三 特別史跡多賀城跡附寺跡の環境整備に関する事。
- 四 庶務に関する事。

第24条 必要と認めるときは、多賀城跡調査研究所に次の表の上欄に掲げる職を置き、その職務は、当該下欄に定めるとおりとする。

職	職務
上席主任研究員	上司の命を受け、重要かつ高度な調査研究に従事し、主任研究員、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
副主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、研究員の業務を整理する。
研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事する。

2 上席主任研究員、主任研究員、副主任研究員及び研究員は、技術職員をもつて充てる。

（職員）



3. 沿革と実績

(1) 宮県多賀城跡調査研究所の沿革

年月	事項
大正 11.10	多賀城跡が史蹟名勝天然紀念物保存法(大正 8・4 公布)により史蹟指定 指定名称：多賀城跡附寺跡
昭和 35	県教委が「多賀城跡発掘調査委員会」を組織して 5 カ年計画で多賀城跡の発掘調査を実施することになり、その初年として多賀城跡と多賀城廃寺跡の地形図を作成
36.8	多賀城廃寺跡第 1 次発掘調査実施(県教委主体、多賀城町と河北文化事業団共催。調査団長は伊東信雄東北大教授)
37.8	多賀城廃寺跡第 2 次発掘調査実施、主要伽藍配置が判明
38.8	多賀城跡政府地区発掘調査(第 1 次)開始、以後 40 年 8 月(第 3 次)まで実施、政庁地区の朝堂院的な建物配置が判明
41.4	多賀城跡附寺跡特別史跡に昇格指定
43.11	多賀城町が多賀城跡政府地区の発掘調査(第 4 次)を再開
44.4	宮県多賀城跡調査研究所設立
44.7	多賀城跡調査研究指導委員会設置(委員長伊東信雄) 研究所による多賀城跡調査研究事業開始
44.10	色麻村日の出山窯跡の発掘調査実施
45.3	『多賀城跡調査報告 1 - 多賀城廃寺跡 -』刊行
45.4	研究所による多賀城跡環境整備事業開始
48.10	金福地区を対象とした第 21 次調査で計帳様文書断簡を発見
49.2	外郭西辺地区的追加指定が官報告示
49.4	多賀城闇連跡発掘調査事業開始
49.8	桃生城跡の発掘調査に着手(昭和 50 年度まで継続)
49.8	ブレハブ序舎から東北歴史資料館の建物に移転
51.3	特別史跡多賀城跡附寺跡保存管理計画書策定
52.7	伊治城跡の発掘調査に着手(昭和 54 年度まで継続)
53.4	研究第一科・同第二科の 2 科制となる、遺構調査研究事業開始
53.6	漆紙文書の発見を報道発表、これにより研究所が山本壯一郎知事から表彰を受ける
55.3	『多賀城跡 - 政府跡図録編 -』刊行
55.3	館前遺跡の追加指定が官報告示
55.7	名生館遺跡の発掘調査に着手(昭和 60 年度まで継続)、初年度の調査で 8 世紀初頭の官衙中枢部を検出
57.1	現状変更に伴う緊急調査(第 40 次)により外郭線南辺築地中央部で木舗発見
57.3	『多賀城跡 - 政府跡本文編 -』刊行
58.11	第 43・44 次調査で政庁南前面の道路遺構発見
59.3	多賀城跡南面地域の追加指定が官報告示
60.9	名生館遺跡開合戦瓦窯跡発掘調査実施
61.8	東山遺跡の発掘調査に着手(平成 4 年度まで継続)
62.8	名生館官衙遺跡の史跡指定が官報告示
62.11	第 53 次調査で多賀城第□・□期の外郭東門を発見
63.3	特別史跡多賀城跡附寺跡第 2 次保存管理計画書策定
平成 2.6	柏木遺跡の追加指定が官報告示
2.11	多賀城跡調査研究指導委員会に南門 - 政府間整備活用専門部会を設置
4.11	日本最古の「かな」諸紙文書について報道発表
5.8	下伊場野窯跡群の調査を実施し、3 基の多賀城創建瓦窯跡を発見
5.9	山王千刈田地区的追加指定が官報告示
6.8	桃生城跡の発掘調査を再開(平成 13 年度まで継続中)、政庁の全貌を解明
7.6	第 31 回指導委員会において南門 - 政府間整備活用計画案承認
9.11	多賀城碑覆屋の解体修理および碑地下部分の発掘調査を実施
10.6	多賀城跡の重要文化財(古文書)指定が官報告示
11.1	東山官衙遺跡の史跡指定が官報告示
11.4	2 科制が廃され、研究班となる
11.4	東北歴史博物館の建物に移転

(2) 事業実績

1) 多賀城跡発掘調査事業

箇 計	年次	次数	発掘調査区	発掘面積	経費
第1次5 力年 計画	昭和44年度	5次	政庁地区南東部	1,980m ²	
		6次	政庁地区北東部	2,079m ²	
		7次	外郭南辺中央部(多賀城碑付近)	264m ²	4,323m ² 9,000千円
	昭和45年度	8次	外郭南辺中央部	350m ²	
		9次	政庁地区南西部	2,046m ²	
		10次	外郭西辺中央部	495m ²	3,511m ² 12,000千円
		11次	外郭東辺南部	660m ²	
	昭和46年度	12次	外郭中央地区北部	3,795m ²	
		13次	外郭東辺東門付近	1,600m ²	7,481m ² 12,000千円
		14次	外郭東地区北部	2,086m ²	
	昭和47年度	15次	鴻の池周辺	112m ²	
		16次	政庁地区北半部	1,320m ²	
		17次	外郭北東隅・北西隅	1,729m ²	6,098m ² 13,000千円
		18次	外郭中央部地区北部	2,937m ²	
	昭和48年度	19次	政庁地区北西部	2,640m ²	
		20次	外郭南辺中央部	990m ²	
		21次	外郭西地区中央部	1,485m ²	8,580m ² 17,000千円
		22次	城外南方(高平遺跡)	3,465m ²	
第2次5 力年 計画	昭和49年度	23次	外郭東地区北部(字大畑)	3,300m ²	
		24次	外郭南東隅	2,640m ²	5,940m ² 17,000千円
	昭和50年度	25次	多賀城庵跡跡南門推定地	2,310m ²	
		26次	多賀城庵跡跡中門前方地区	2,310m ²	5,280m ² 22,000千円
		27次	奏社宮西隣市川大久保地区	660m ²	
	昭和51年度	28次	五万崎地区	2,310m ²	
		29次	五万崎地区	2,310m ²	4,620m ² 22,000千円
	昭和52年度	30次	五万崎地区	1,980m ²	
		31次	政庁北方隣接地区	1,980m ²	3,960m ² 22,000千円
		32次	政庁北方隣接地区	1,000m ²	
	昭和53年度	33次	外郭西門地区	1,000m ²	2,000m ² 22,000千円
第3次5 力年 計画	昭和54年度	34次	雀山地区南低湿地	1,300m ²	
		35次	鴻の池南地区	900m ²	2,200m ² 30,000千円
	昭和55年度	36次	外郭東地域中央部作貫地区	1,800m ²	
		37次	多賀城外南地方(砂押川東岸)地区	700m ²	2,500m ² 30,000千円
	昭和56年度	38次	作貫南端低湿地(緊急調査)	50m ²	
		39次	外郭東地域中央部作貫地区	2,500m ²	
		40次	外郭南辺築地東半中央部(立石地区、緊急)	80m ²	2,630m ² 35,000千円
	昭和57年度	41次	外郭東辺南端部(田星場東端地区)	1,200m ²	
		42次	外郭東地域中央部(作貫地区)	500m ²	1,700m ² 32,000千円
	昭和58年度	43次	外郭中央地区中央部(政庁南方)	800m ²	
		44次	外郭中央地区中央部(政庁南方)	2,500m ²	3,300m ² 32,000千円
第4次5 力年 計画	昭和59年度	45次	坂下地区	70m ²	
		46次	外郭西門地区	750m ²	
		47次	外郭西辺中央部	1,000m ²	1,820m ² 29,000千円
	昭和60年度	48次	外郭南門地区	800m ²	
		49次	外郭北門推定地区	450m ²	1,250m ² 29,000千円
	昭和61年度	50次	政庁南地区	900m ²	
		51次	外郭東北隅東地区	500m ²	1,400m ² 29,000千円
	昭和62年度	52次	大畑地区及び東辺外の地区	500m ²	
		53次	外郭東門北東地区	1,000m ²	1,500m ² 29,000千円
	昭和63年度	54次	外郭東門東地区	1,000m ²	
		55次	外郭東辺中央部(作貫地区)	500m ²	1,500m ² 29,000千円

年次	次数	発掘調査区	発掘面積	経費
第5次5カ年計画	56次	大畠地区北半部	1,550 m ²	
	57次	外郭東辺南半部(西沢地区)	500 m ²	2,050 m ² 29,000千円
	58次	大畠地区中央部	1,470 m ²	
	59次	大畠地区中央部東側	900 m ²	2,370 m ² 30,000千円
	60次	大畠地区中央部	1,450 m ²	
	61次	鴻の池地区	150 m ²	1,600 m ² 30,000千円
平成4年度	62次	大畠地区南半部	1,100 m ²	
	63次	大畠地区北半部	1,700 m ²	2,800 m ² 35,000千円
平成5年度	64次	大畠地区北部		3,000 m ² 35,000千円
第6次5カ年計画	65次	外郭東門北部 現状変更に伴う調査	1,800 m ² 400 m ²	2,200 m ² 36,000千円
	66次	大畠地区北西部		3,000 m ² 35,000千円
	67次	大畠地区西部		3,000 m ² 39,000千円
	68次	大畠地区西部 多賀城碑覆屋の解体修理に伴う発掘調査		2,650 m ² 36,000千円
	69次	城前地区南部		2,000 m ² 36,000千円
第7次5カ年計画	70次	城前地区南部		2,000 m ² 37,700千円
	71次	城前地区南部		2,000 m ² 41,000千円
	72次	南門西側築地跡・城内南北大路跡		1,800 m ² 41,000千円
	73次	南門東側築地跡・城内南北大路跡		1,500 m ² 41,000千円
	74次	城外南北大路跡とその東側の状況		1,500 m ² 41,000千円

※平成11年度までは実績で、平成12年度以降は計画

2) 多賀城跡環境整備事業

	年度	対象地区	主な工事内容	面積(m ²)	事業費(千円)
第1次5年計画	昭和 45	政庁地区(第1期)	南門裏跡・東脇殿跡表示工	3,519	10,000
	昭和 46	政庁地区(第2期)	正殿跡・築地堀跡表示工	7,256	20,000
	昭和 47	政庁地区(第3期)	西脇殿跡・築地堀跡表示工	14,669	25,000
	昭和 48	政庁地区(第4期) 外郭東門地区	北西門跡・築地堀跡表示工 東門跡・堅穴住居跡表示工	9,415	20,000
	昭和 49	六月坂地区	掘立建物跡・倉庫跡・道路跡表示工	8,326	20,000
	計			43,185	95,000
第2次5年計画	昭和 50	外郭東南隅地区(第1期)	木質遺構保存施設設置工	3,600	20,000
	昭和 51	外郭東南隅地区(第2期)	湿地修景工・園路工	6,400	10,000
	昭和 52	鴻の池地区(第1期)	南辺築地堀跡表示工	2,000	16,000
	昭和 53	鴻の池地区(第2期)	多賀城碑周辺修景工	2,500	16,000
	昭和 54	南門地区(第1期)	南門跡・築地堀跡保護工		
第3次5年計画	昭和 54	南門地区(第2期)	南門周辺丘陵の地形修復工・緑化修景工	5,200	20,000
	計			19,700	82,000
	昭和 55	南門地区(第3期)	園路工・便益施設(公衆便所)設置工・緑化修景工	7,030	30,000
	昭和 56	外郭南築地東半部	緑化修景工	2,149	30,000
	昭和 57	園路(資料館・南門)	園路工・便益施設設置工・緑化修景工		
第4次5年計画	昭和 57	外郭南門地区東斜面	園路工	31,831	28,000
	昭和 58	作貫地区(第1期)	遺構保護盛土工・緑化修景工		
	昭和 58	作貫地区(第2期)	建物跡表示工・便益施設設置工・園路工・緑化修景工	54,400	30,000
	昭和 59	作貫地区(第3期)	土壠跡及び空堀跡表示工・便益施設設置工・園路工	6,750	27,000
	計			102,160	145,000
第5次5年計画	昭和 60	作貫地区(第4期)	遺構露出展示工・便益施設設置工・園路工・緑化修景工	6,400	27,000
	昭和 61	政庁南地区	地形修復工・道路跡復元工・緑化修景工		
	昭和 61	作貫地区	便益施設設置工	7,470	27,000
	昭和 62	雀山地区	緑化修景工		
	昭和 62	作貫地区北部	園路工・緑化修景工・便益施設設置工		
第6次5年計画	昭和 63	政庁地区	便益施設設置工・園路工・緑化修景工	6,130	27,000
	昭和 63	雀山地区	便益施設(あづまや)設置工・園路工・緑化修景工		
	平成元	作貫地区北部・丘陵南西裾部	便益施設(展望所)設置工・園路工・緑化修景工	8,260	27,000
	平成元	北辺地区南半部	便益施設設置工・園路工・緑化修景工	6,700	27,112
	計			34,960	135,112
第5次5年計画	平成 2	北辺地区北半部(第1期)	便益施設設置工・園路工・緑化修景工	11,500	30,000
	平成 3	北辺地区北半部(第2期)	便益施設設置工・園路工・緑化修景工	19,000	30,000
	平成 4	北辺地区北半部(第3期)	便益施設設置工	2,900	30,000
	平成 5	東門・大畑地区東側部(第1期)	地形修復工・園路工・緑化修景工		
	平成 6	東門・大畑地区東側部(第2期)	奈良時代東門跡及び掘立建物跡表示工・便益施設設置工	2,500	35,000
第6次5年計画	平成 7	東門・大畑地区東側部(第3期)	便益施設設置工	550	35,000
	計			36,450	160,000
	平成 7	東門・大畑地区西側北半部(第1期)	道路跡復元工・築地堀跡建物跡表示工・便益施設設置工・緑化修景工	3,120	30,000
	平成 8	東門・大畑地区西側北半部(第2期)	地形修復工・道路跡復元工・緑化修景工	14,250	39,000
	平成 9	東門・大畑地区西側北半部(第3期)	道路跡表示工・便益施設設置工	805	51,000
第7次5年計画	平成 9	南門地区	多賀城碑覆屋解体修理工	50	35,000
	平成 10	東門・大畑地区西側北半部(第4期)	道路跡表示工・排水施設工・緑化修景工	12,500	31,500
	平成 11	東門・大畑地区西側北半部(第5期)	建物跡表示工・便益施設設置工・緑化修景工	30,725	186,500

3) 多賀城跡関連遺跡発掘調査事業

計画	年 度	遺跡名	事 業	内 容	発掘面積	経費(千円)
第1次5カ年計画	昭和 49 年度	桃生城跡	地形図作成 第 1 次発掘調査	内郭地区・外郭の調査	500 m ²	2,500
	昭和 50 年度	桃生城跡	第 2 次発掘調査	同上	850 m ²	2,500
	昭和 51 年度	伊治城跡	地形図作成		1,020 m ²	1,500
	昭和 52 年度	伊治城跡	第 1 次発掘調査	外郭線・郭内の調査	438 m ²	3,000
	昭和 53 年度	伊治城跡	第 2 次発掘調査	郭内の調査	780 m ²	3,000
第2次5カ年計画	昭和 54 年度	伊治城跡	第 3 次発掘調査	同上	1,000 m ²	4,000
	昭和 55 年度	名生館遺跡	地形図作成 第 1 次発掘調査	城内地区の調査	1,650 m ²	7,000
	昭和 56 年度	名生館遺跡	第 2 次発掘調査	同上	1,960 m ²	7,000
	昭和 57 年度	名生館遺跡	第 3 次発掘調査	小館・内館地区的調査	1,156 m ²	7,000
	昭和 58 年度	名生館遺跡	第 4 次発掘調査	小館地区的調査	1,020 m ²	7,000
第3次5カ年計画	昭和 59 年度	名生館遺跡	第 5 次発掘調査	城内地区的調査	1,800 m ²	6,300
	昭和 60 年度	名生館遺跡 合戦原窯跡	第 6 次発掘調査 範囲確認調査 関連窯跡調査		1,300 m ²	6,300
	昭和 61 年度	東山遺跡	第 1 次発掘調査	造構確認調査	1,100 m ²	7,800
	昭和 62 年度	東山遺跡	第 2 次発掘調査	造構分布状況の把握	1,074 m ²	7,000
	昭和 63 年度	東山遺跡	第 3 次発掘調査	官衙中枢部の把握	1,200 m ²	7,000
第4次5カ年計画	平成元年度	東山遺跡	第 4 次発掘調査	同上	562 m ²	7,000
	平成 2 年度	東山遺跡	第 5 次発掘調査	同上	600 m ²	7,000
	平成 3 年度	東山遺跡	第 6 次発掘調査	同上	2,200 m ²	10,000
	平成 4 年度	東山遺跡	第 7 次発掘調査	同上	3,260 m ²	12,000
	平成 5 年度	下伊場野窯跡	地形図作成 第 1 次発掘調査	多賀城創建期窯跡調査	600 m ²	14,000
第5次5カ年計画	平成 6 年度	桃生城跡	地形図作成 第 3 次発掘調査	政庁地区と外郭線の調査	2,300 m ²	22,000
	平成 7 年度	桃生城跡	第 4 次発掘調査	同上	730 m ²	20,000
	平成 8 年度	桃生城跡	第 5 次発掘調査	外郭線の調査	800 m ²	17,000
	平成 9 年度	桃生城跡	第 6 次発掘調査	政庁西側官衙の調査	800 m ²	17,000
	平成 10 年度	桃生城跡	第 7 次発掘調査	同上	800 m ²	17,000
第 5 6 カ 年 計 画 次 年	平成 11 年度	桃生城跡	第 8 次発掘調査	同上	1,200 m ²	15,300

4) 研究成果刊行物

①宮城県多賀城跡調査研究所年報

『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1969	多賀城跡』(第 5・6・7 次調査)	昭和 45 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1970	多賀城跡』(第 8・9・10・11 次調査)	昭和 46 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1971	多賀城跡』(第 12・13・14 次調査)	昭和 47 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1972	多賀城跡』(第 15・16・17・18 次調査)	昭和 48 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1973	多賀城跡』(第 19・20・21・22 次調査)	昭和 49 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1974	多賀城跡』(第 23・24 次調査)	昭和 50 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1975	多賀城跡』(第 25・26・27 次調査)	昭和 51 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1976	多賀城跡』(第 28・29 次調査)	昭和 52 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1977	多賀城跡』(第 30・31 次調査)	昭和 53 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1978	多賀城跡』(第 32・33 次調査)	昭和 54 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1979	多賀城跡』(第 34・35 次調査)	昭和 55 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1980	多賀城跡』(第 36・37 次調査)	昭和 56 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1981	多賀城跡』(第 38・39・40 次調査)	昭和 57 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1982	多賀城跡』(第 41・42 次調査)	昭和 58 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1983	多賀城跡』(第 43・44 次調査)	昭和 59 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984	多賀城跡』(第 45・46・47 次調査)	昭和 60 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1985	多賀城跡』(第 48・49 次調査)	昭和 61 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1986	多賀城跡』(第 50・51 次調査)	昭和 62 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1987	多賀城跡』(第 52・53 次調査)	昭和 63 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1988	多賀城跡』(第 54・55 次調査)	平成元年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1989	多賀城跡』(第 56・57 次調査)	平成 2 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1990	多賀城跡』(第 58・59 次調査)	平成 3 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991	多賀城跡』(第 60・61 次調査)	平成 4 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1992	多賀城跡』(第 62・63 次調査)	平成 5 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1993	多賀城跡』(第 64 次調査)	平成 6 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1994	多賀城跡』(第 65 次調査)	平成 7 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1995	多賀城跡』(第 66 次調査)	平成 8 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1996	多賀城跡』(第 67 次調査)	平成 9 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1997	多賀城跡』(第 68 次調査、多賀城碑覆屋解体修理)	平成 10 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1998	多賀城跡』(第 69 次調査)	平成 11 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1999	多賀城跡』(第 70 次調査)	平成 12 年 3 月

②多賀城関連遺跡発掘調査報告書

『桃生城跡 I』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 1 冊	昭和 50 年 3 月
『桃生城跡 II』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 2 冊	昭和 51 年 3 月
『伊治城跡 I』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 3 冊	昭和 53 年 3 月
『伊治城跡 II』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 4 冊	昭和 54 年 3 月
『伊治城跡 III』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 5 冊	昭和 55 年 3 月
『名生館遺跡 I』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 6 冊	昭和 56 年 3 月
『名生館遺跡 II』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 7 冊	昭和 57 年 3 月
『名生館遺跡 III』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 8 冊	昭和 58 年 3 月
『名生館遺跡 IV』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 9 冊	昭和 59 年 3 月

『名生館遺跡V』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 10 冊	昭和 60 年 3 月
『名生館遺跡VI』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 11 冊	昭和 61 年 3 月
『東山遺跡I』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 12 冊	昭和 62 年 3 月
『東山遺跡II』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 13 冊	昭和 63 年 3 月
『東山遺跡III』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 14 冊	平成元年 3 月
『東山遺跡IV』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 15 冊	平成 2 年 3 月
『東山遺跡V』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 16 冊	平成 3 年 3 月
『東山遺跡VI』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 17 冊	平成 4 年 3 月
『東山遺跡VII』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 18 冊	平成 5 年 3 月
『下伊場野遺跡』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 19 冊	平成 6 年 3 月
『桃生城遺跡III』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 20 冊	平成 7 年 3 月
『桃生城跡IV』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 21 冊	平成 8 年 3 月
『桃生城跡V』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 22 冊	平成 9 年 3 月
『桃生城跡VI』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 23 冊	平成 10 年 3 月
『桃生城跡VII』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 24 冊	平成 11 年 3 月
『桃生城跡VIII』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 25 冊	平成 12 年 3 月

③ 研究紀要

『研究紀要I』	昭和 49 年 3 月
『研究紀要II』	昭和 50 年 3 月
『研究紀要III』	昭和 51 年 3 月
『研究紀要IV』	昭和 52 年 3 月
『研究紀要V』	昭和 53 年 3 月
『研究紀要VI』	昭和 54 年 3 月
『研究紀要VII』	昭和 55 年 3 月

④ 調査報告書・資料集他

『多賀城と古代日本』	昭和 50 年 3 月
『多賀城漆紙文書』	昭和 54 年 3 月
『多賀城跡一政庁跡図録編一』	昭和 55 年 3 月
『多賀城跡一政庁跡本文編』	昭和 57 年 3 月
『多賀城と古代東代』	昭和 60 年 3 月

1. 調査区遠景
(南西上空から)

[ネガB 10924]



2. 調査区全景
(南上空から)

[ネガB 10926]



3. 調査区全景
(上空から)

[ネガB 10927]



図版 2

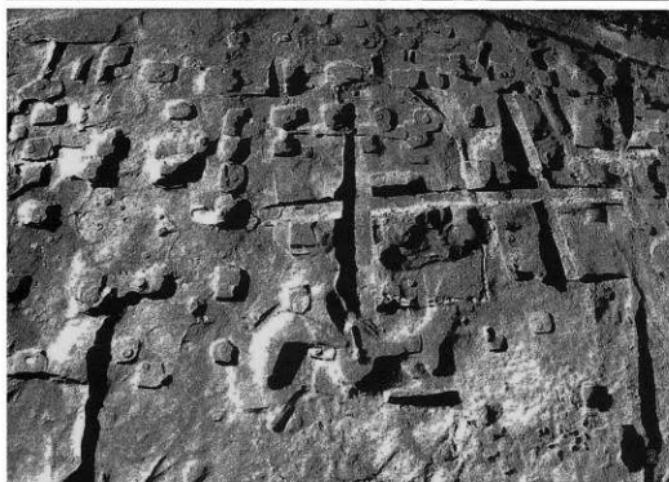
1. 調査区中央部の
遺構検出状況
(南上空から)

[ネガB 10930]



2. 調査区東部中央の
遺構検出状況
(西上空から)

[ネガB 10934]



3. 調査区南東部の
遺構検出状況
(西上空から)

[ネガB 10935]



図版 3

1. 調査区北西部の
遺構検出状況
(南から)

S B 2502A・B 建物跡

[ネガ B 10940]



2. 調査区中央北部の
遺構検出状況
(南から)

S B 2523～2526 柱列跡

[ネガ B 10942]



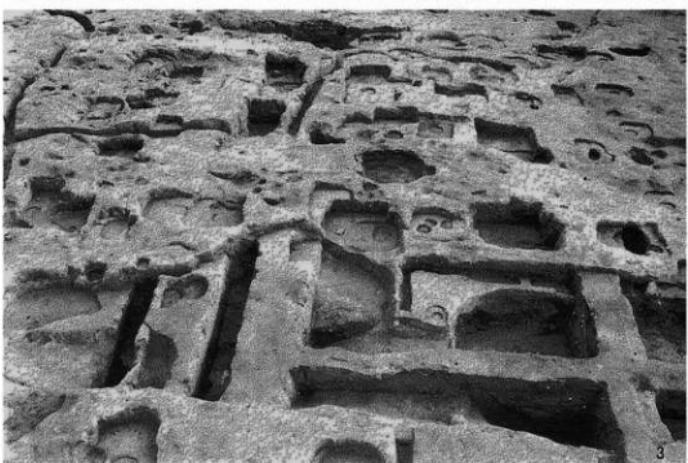
3. 調査区中央部の
遺構検出状況
(西から)

(手前) S I 2540 住居跡

S I 2542～2546 土壙

(奥) S B 2503～2507 建物跡

[ネガ B 10945]



図版 4

1. 調査区北東部
(南から)

S B 2509・2512
・2513 建物跡

[ネガ B 10946]



2. 調査区東部中央
(南東から)

S B 2510・2514 建物跡
S A 2533・2534 柱列跡
S D 2541 瓦組暗渠
S K 2548 土壌

[ネガ B 10949]



3. 調査区東部中央
(南から)

S B 2510・2515 建物跡

[ネガ B 10953]



図版5

1. 調査区南東部
(南から)

S B 2511・2518 建物跡、S A 2474 柱列跡

[ネガB 10951]



2. 調査区南東部の
整地状況
(北西から)

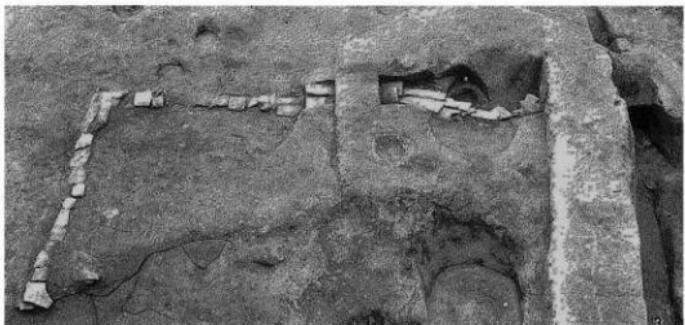
S B 2518 建物跡
西側柱列南から
1間目柱穴、
S B 2511 建物跡
南妻棟通柱穴

[ネガB 10957]



3. S D 2541 瓦組
暗渠検出状況
(東から)

[ネガB 10994]



図版 6

1.

S B 2502 建物跡
北東隅柱穴

[ネガ B 10961]



3.

S B 2503 建物跡
北東隅柱穴、
S A 2528 柱列跡
北端柱穴

[ネガ B 10964]



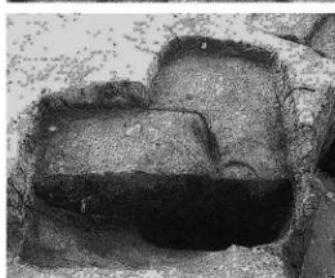
5.

S B 2503 建物跡
南東隅柱穴、
S B 2504 建物跡
南側柱列東から
1間目柱穴
[ネガ B 10967]



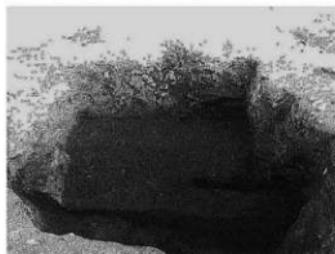
7.

S B 2504 建物跡
南東隅柱穴、
S A 2529 柱列跡
東端柱穴
[ネガ B 10970]



9.

S B 2506・2507
建物跡南西隅柱穴、
S A 2530 柱列跡
西端柱穴
[ネガ B 10976]



2.

S B 2502 建物跡
身含南東隅柱穴

[ネガ B 10962]

4.

S B 2503・2504
建物跡南西隅柱穴
S B 2506・2507
建物跡西妻棟通柱穴
S A 2529 柱列跡
西端柱穴
[ネガ B 10965]



6.

S B 2504 建物跡
西妻棟通柱穴
S B 2505～2507
建物跡北西隅柱穴
[ネガ B 10969]



8.

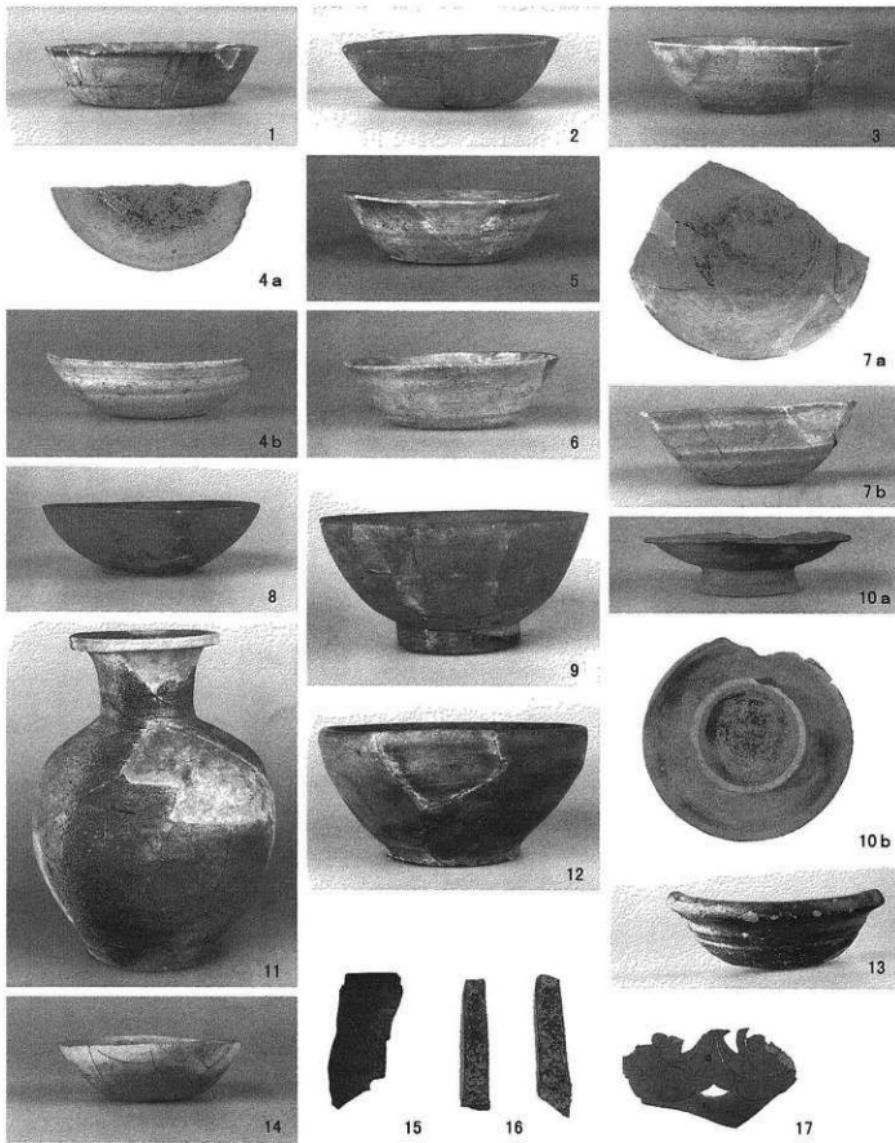
S B 2505～2507
建物跡北側柱列
東から1間目柱穴、
S A 2528 柱列跡
北から1間目柱穴
[ネガ B 10971]



10.

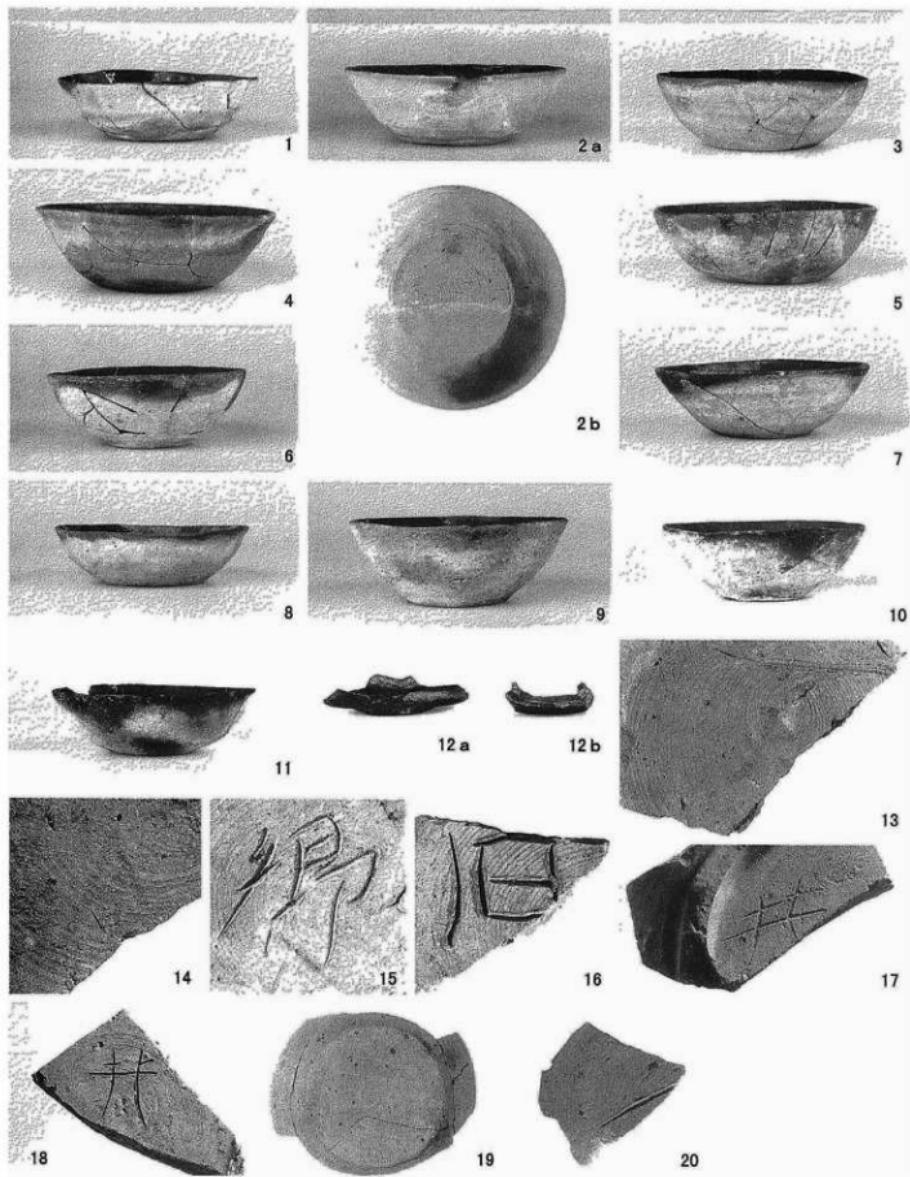
S B 2511 建物跡
南西隅柱穴
[ネガ B 10985]





図版7 出土遺物 (1) 須恵器・須恵系土器・縄釉陶器

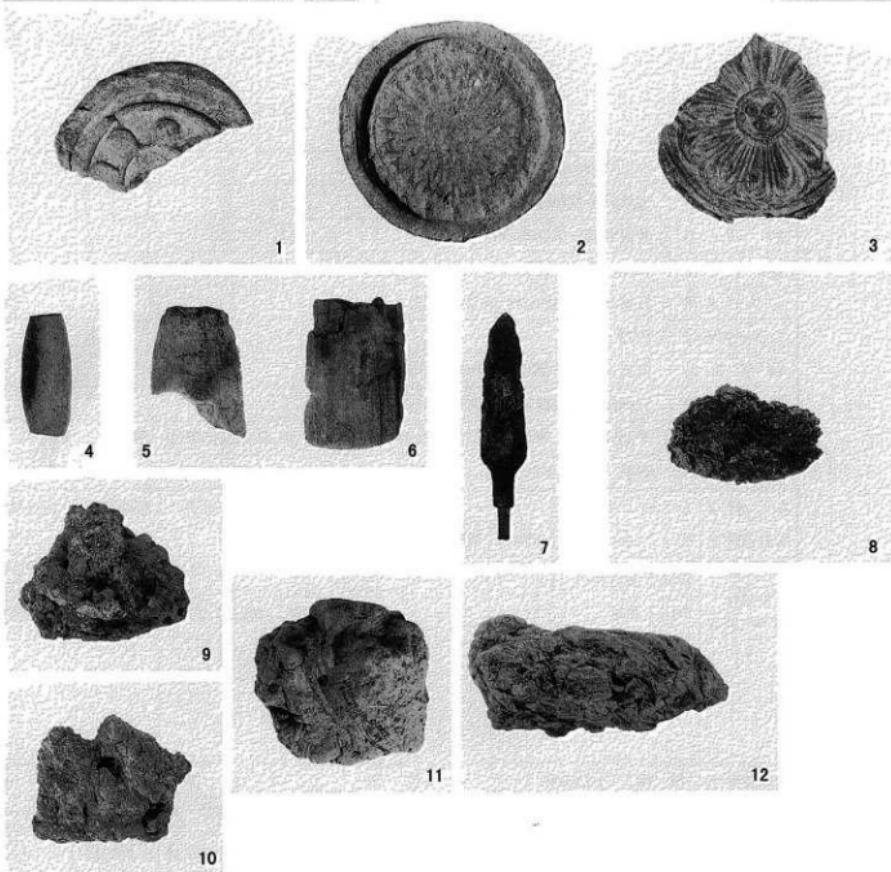
- | | | |
|----------------------------------|------------------------------|------------------------------|
| 1. S X 2558 燃土整地 | 2. S B 2518 建物跡 | 3 ~ 6. SK 2548 土壙 |
| 7. 8. 10. 11. 14. 17. SK 2551 土壙 | | 9. SK 2545 土壙 |
| 12. 15. 表土 | 13. SK 2565 土壙 | 16. SA 2533 柱列跡 |
| 1 ~ 8. 箔形窯跡 | 18. (第21図68 ネガB11003 B11004) | 17. 不明指跡 (第24図75 ネガB11013) |
| 1 (第16図13 ネガB11011) | 8 (第21図59 ネガB11006) | 14. 須恵系土器跡 (第21図55 ネガB11005) |
| 2 (第17図22 ネガB10997) | 9 ~ 10. 高台跡 | 15. 短筒窯跡 (第24図82 ネガB11015) |
| 3 (第19図34 ネガB10988) | 9 (第11図8 ネガB10996) | 16. 円筒窯跡 (ネガB11014) |
| 4 (第19図35 ネガB10999 B11000) | 10 (第21図61 ネガB11007 B11008) | 17. 縄釉陶器香炉 (第22図66 ネガB11010) |
| 5 (第19図37 ネガB11001) | 11 盆 (第21図63 ネガB11009) | |
| 6 (第19図38 ネガB11002) | 12 鉢 (第24図74 ネガB11012) | |



图版8 出土遗物(2) 土师器·墨书·刻书

1. S B2516 建物跡 2・13. SK2548 土壙 3～9・12. SK2551 土壙
10. SK2481 土壙 11・15. SK2554 土壙 14・16～20. 表土

- | | | |
|----------------------------|--------------------------------|-------------------------|
| 1～11 土師器跡 | 7 (第20図48 氷刀B11030) | 14 墨書 (第24図76 氷刀B11040) |
| 1 (第17図20 氷刀B11023) | 8 (第20図47 氷刀B11029) | 15 刻書 (第22図72 氷刀B11016) |
| 2 (第19図32 氷刀B11024 B11025) | 9 (第20図40 氷刀B11032) | 16 " (第24図77 氷刀B11017) |
| 3 (第20図44 氷刀B11026) | 10 (第22図70 氷刀B11035) | 17 " (第24図78 氷刀B11018) |
| 4 (第20図45 氷刀B11027) | 11 (第22図71 氷刀B11036) | 18 " (第24図79 氷刀B11019) |
| 5 (第20図46 氷刀B11028) | 12 耳皿 (第20図53 氷刀B11033 B11034) | 19 " (第24図80 氷刀B11021) |
| 6 (第20図49 氷刀B11031) | 13 墨書 (第19図39 氷刀B11038) | 20 " (第24図81 氷刀B11022) |



圖版9 出土遺物（3）瓦・土製品・鉄製品・鉄滓・漆塊・壁材

1. S A2537 柱列跡 2. S K2548 土壙 3. S K2551 土壙
 4. 5. S K2546 土壙 6. 7. 表土 8. 新溝 9. S X2559 焼土整地
 10. S A2525 B 柱列跡 11. S B2517 建物跡 12. S A2534 柱列跡
- | | |
|----------------------------------|------------------------|
| 1 衛車状文軒丸瓦427 (第18図31 ネガB11041) | 7 鉄鎌 (第24図91 ネガB11046) |
| 2 細弁蓋花文軒丸瓦3101 (第19図41 ネガB11042) | 8 漆塊 (ネガB11051) 縮尺1/2 |
| 3 細弁蓋花文軒丸瓦311 (第22図69 ネガB11043) | 9 鉄滓 (ネガB11048) 縮尺1/2 |
| 4 土鍤 (第11図12 ネガB11044) | 10 鉄滓 (ネガB11047) 縮尺1/2 |
| 5 鐵羽口 (第11図11 ネガB11045) | 11 壁材 (ネガB11049) 縮尺1/2 |
| 6 鐵羽口 (第24図88 ネガB11046) | 12 壁材 (ネガB11050) 縮尺1/2 |

報告書抄録

ふりがな	みやぎけんたがじょうあとちうさけんきゅうしょねんぼう							
書名	宮城県多賀城跡調査研究所年報 1999							
副書名	多賀城跡-第 70 次調査-							
巻次	宮城県多賀城跡調査研究所年報 1999							
シリーズ名	宮城県多賀城跡調査研究所年報							
シリーズ番号	1999							
編著者名	白鳥良一・阿部恵・柳澤和明・白崎恵介							
編集機関	宮城県多賀城跡調査研究所							
所在地	〒985-0862 宮城県多賀城市高崎 1 丁目 22-1 TEL022-368-0102 FAX022-368-0104							
発行年月日	西暦 2000 年 3 月 22 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因	
特別史跡 たがじょうあと 多賀城跡 第 70 次調査	みやぎけんたがじょう し 宮城県多賀城市 いちかわ うしま 市川・浮島	04209	004	38 度 18 分 14 秒	140 度 59 分 30 秒	1999.4.21 ~ 1999.11.26	2,000 m ²	調査計画 に基づく 学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
特別史跡 多賀城跡	国府・ 城櫓遺跡	奈良時代 ~ 平安時代	掘立式建物跡 柱列跡 堅穴住居跡 焼面 整地層 土壤 溝など	20 棟 20 条 1 棟 4 カ所 4 カ所 多数 多数	○土師器坏・高台坏・耳 皿・甕 ○須恵器坏・高台坏・稜 塊・甕・壺・十字形透かし 窓入り短頭壺・縁鉢 ○須恵系土器坏・高台坏 ・高台鉢 ○灰釉陶器塊 ○綠釉陶器香炉蓋・塊 ○土製品(円面硯・風字 硯・転用硯・置竈・驥 羽口・土鍾) ○瓦(軒丸瓦・軒平瓦・ 平瓦・丸瓦・隅切瓦) ○鉄製品(鉄鍔・鉄釘)、 鉄滓 ○墨書き土器、刻書「郷」 「厨」土器 ○漆バレット転用坏 ○砥石 ○土壁片 ○漆紙断片、漆塊	1. 城前地区において 奈良時代から平安時 代にわたって官衙遺 構が変遷しているこ とを確認した。 2. 調査区東部では、 奈良時代に桁行 5 間、 梁行 2 間の南北棟が、 平安時代には桁行 3 間、梁行 2 間の南北 棟が南北に並んで計 画的に配置されてい る。また、調査区中 央部では平安時代に なって建物跡等が連 続的に変遷している ことが明らかとなっ た。 3. 調査区東部では政 府第Ⅲ期の造営に關 わるとみられる大規 模な燒土整地を検出 した。		



宮城県多賀城跡調査研究所年報 1999
多賀城跡

平成12年3月22日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市高崎一丁目22-1
TEL.(022)368-0102
FAX.(022)368-0104
印刷所 東社印刷株式会社
